
さいたま市

大木戸遺跡 II

大宮西部特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

(第2分冊)

2013

独立行政法人 都市再生機構
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

(第1分冊)	
卷頭図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 遺跡の立地と環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	7
(1) 旧石器時代	7
(2) 縄文時代	7
(3) 弥生時代	8
(4) 古墳時代	8
(5) 奈良・平安時代	12
(6) 中・近世	12
III 遺跡の概要	16
1. 大宮西部特定土地区画整理事業地内の 遺跡とその調査	16
2. 大木戸遺跡の概要	17
3. 大木戸遺跡の基本層序	18
IV 第13地点の遺構と遺物	19
1. 概要	19
2. 旧石器時代の遺構と遺物	27
(1) トレンチの設定と内容	27
(2) 石器	28
3. 縄文時代の遺構と遺物	33
(1) 住居跡	33
(2) 掘立柱建物跡	160
(3) 土壙	164
(4) 集石土壙	188
(5) 炉穴	190
(6) グリッド出土土器	193
(7) グリッド出土土製品	291
(8) グリッド出土石器	297
4. 古墳時代の遺構と遺物	344
(1) 住居跡	344
(2) 方形周溝墓	365
(3) 土壙	402
(4) グリッド出土遺物	404
(第2分冊)	
5. 近世の遺構と遺物	405
(1) 溝跡	405
(2) 土壙	415
(3) ピット	437
(4) グリッド出土陶磁器	439
(5) グリッド出土金属器	444
(6) グリッド出土石製品	445
V 自然科学分析	447
1. ガラス小玉の自然科学的調査	447
2. 翡翠原石の理化学的分析	452
VI 調査のまとめ	454
1. 調査の成果	454
2. 旧石器時代	454
3. 縄文時代	454
4. 古墳時代	456
5. 近世	456
6. 加曾利B1式、B2式土器	456
7. 古墳時代の方形周溝墓	461
写真図版	

5. 近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

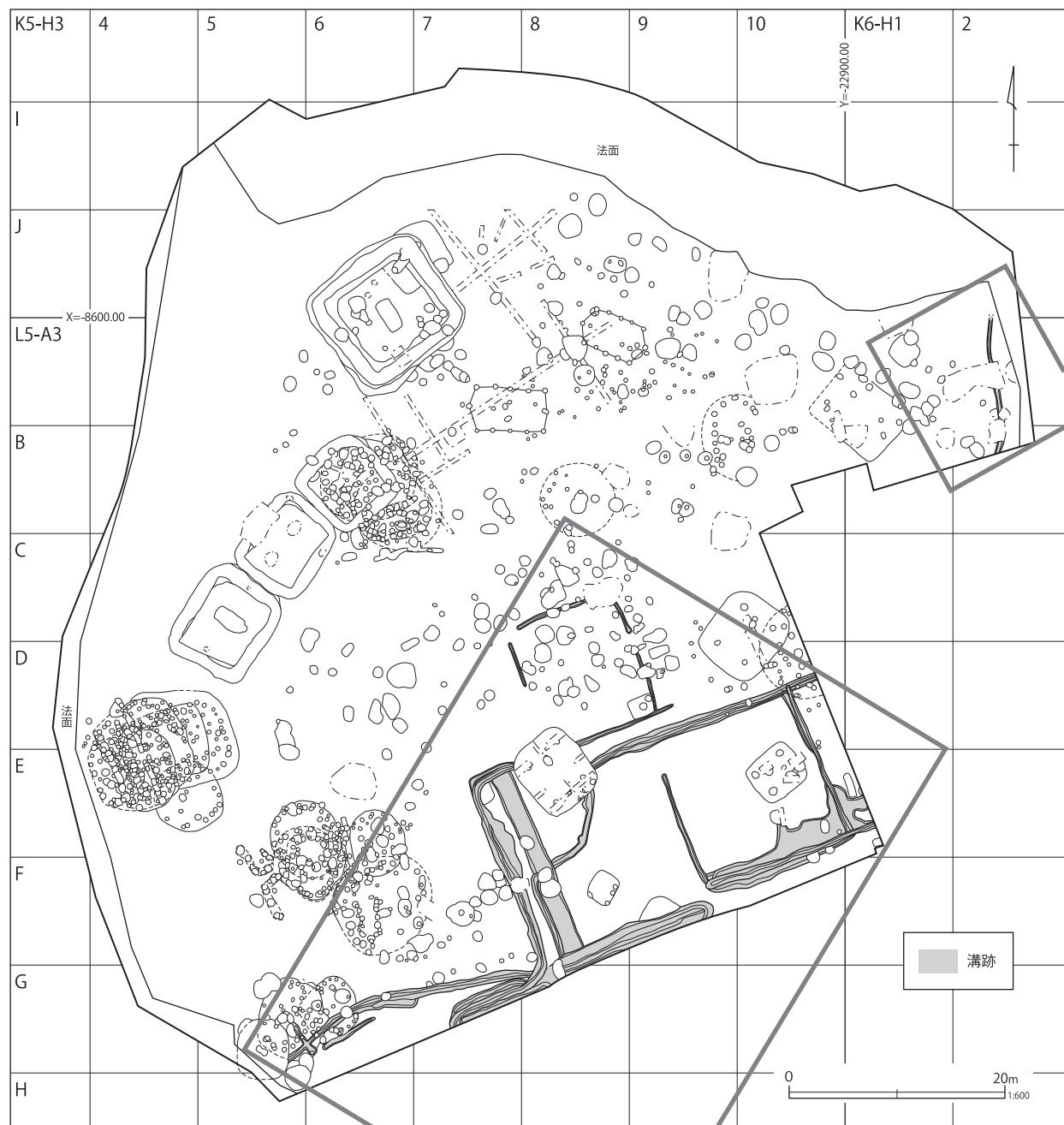
大木戸遺跡第13地点からは、近世に帰属すると考えられる溝跡を16条検出した。

第373図に近世の溝跡全体図、第374図に拡大図を示した。

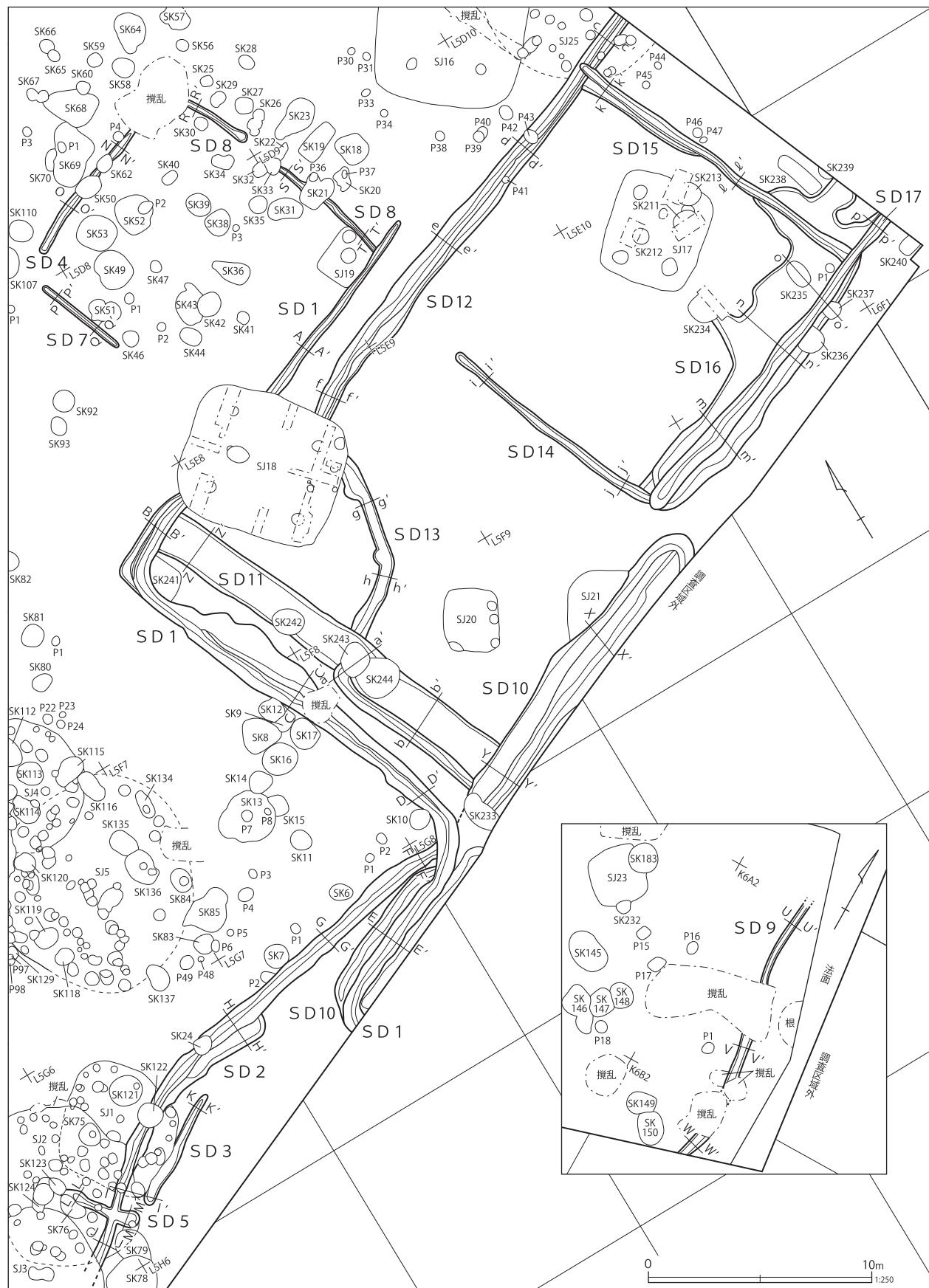
第1分冊の第6図に示したように、既調査範囲

でも近世の溝跡を多数検出した。特に隣接する第4地点の溝跡は、今回報告した第13地点の溝跡と一体的に理解すべきものである。

出土遺物は、概ね18世紀後半から19世紀にかけての日常雑器類である。



第373図 近世溝跡(全体図)



第374図 近世溝跡(拡大図)

今回の第13地点で検出した近世の溝跡は、およそ13~15mの方形区画を構成している。これらの区画は近世家屋に関連したものであると考えられる。出土遺物はすでに記したように18世紀後半から19世紀にかけてのものが大半であり、その時期に家屋もまた構築されたと見て良いであろう。台

地の縁辺には林が造られ、この屋敷林と家屋との間の40~50m程度の空間が、裏庭として日常生活の中で様々に利用され、その痕跡が土壌として残されたものと考えられる。

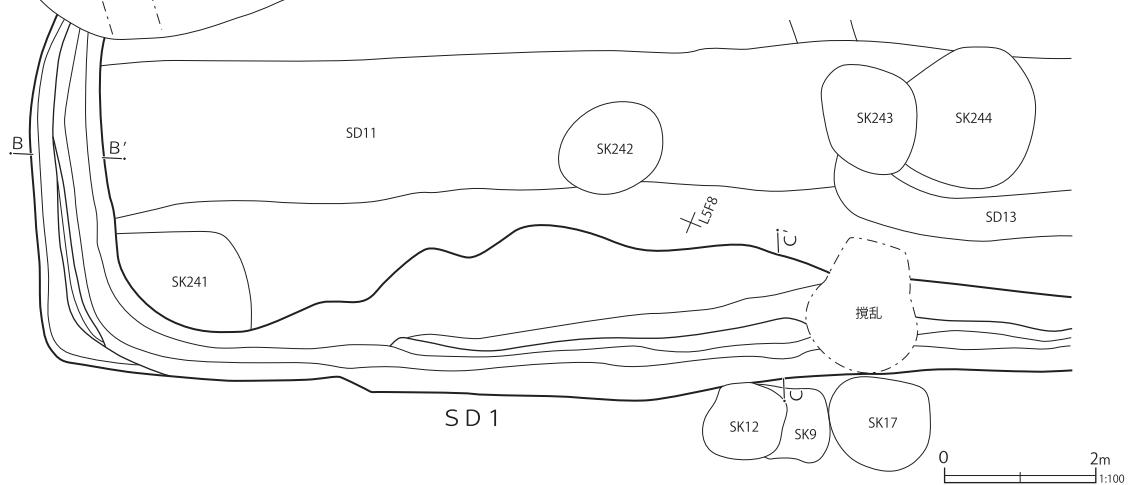
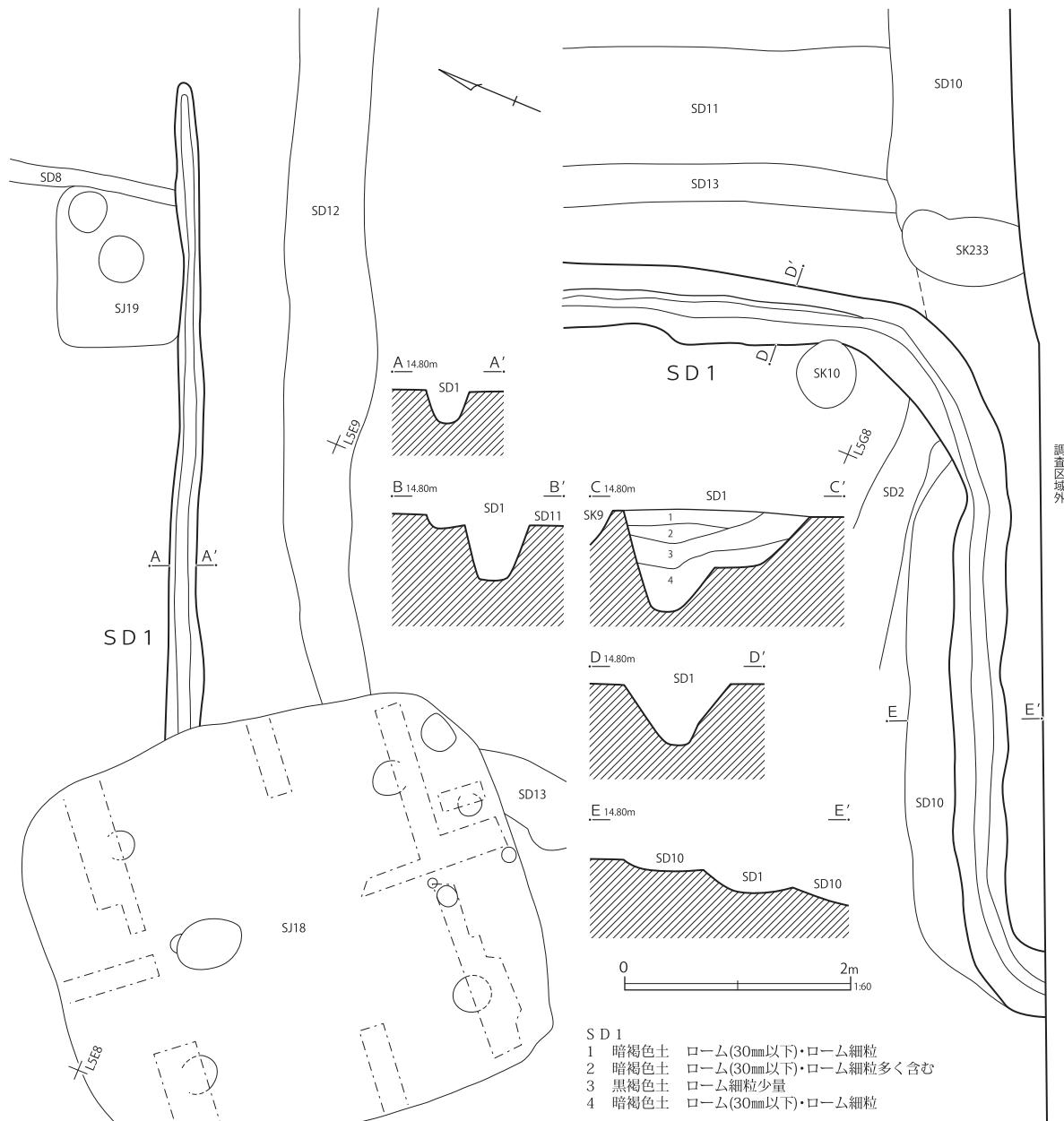
一方、家屋の周辺に見られる溝跡の中でも、すでに述べた方形区画を形成している溝跡以外のも

第65表 近世溝跡一覧表(1)(第375~380図)

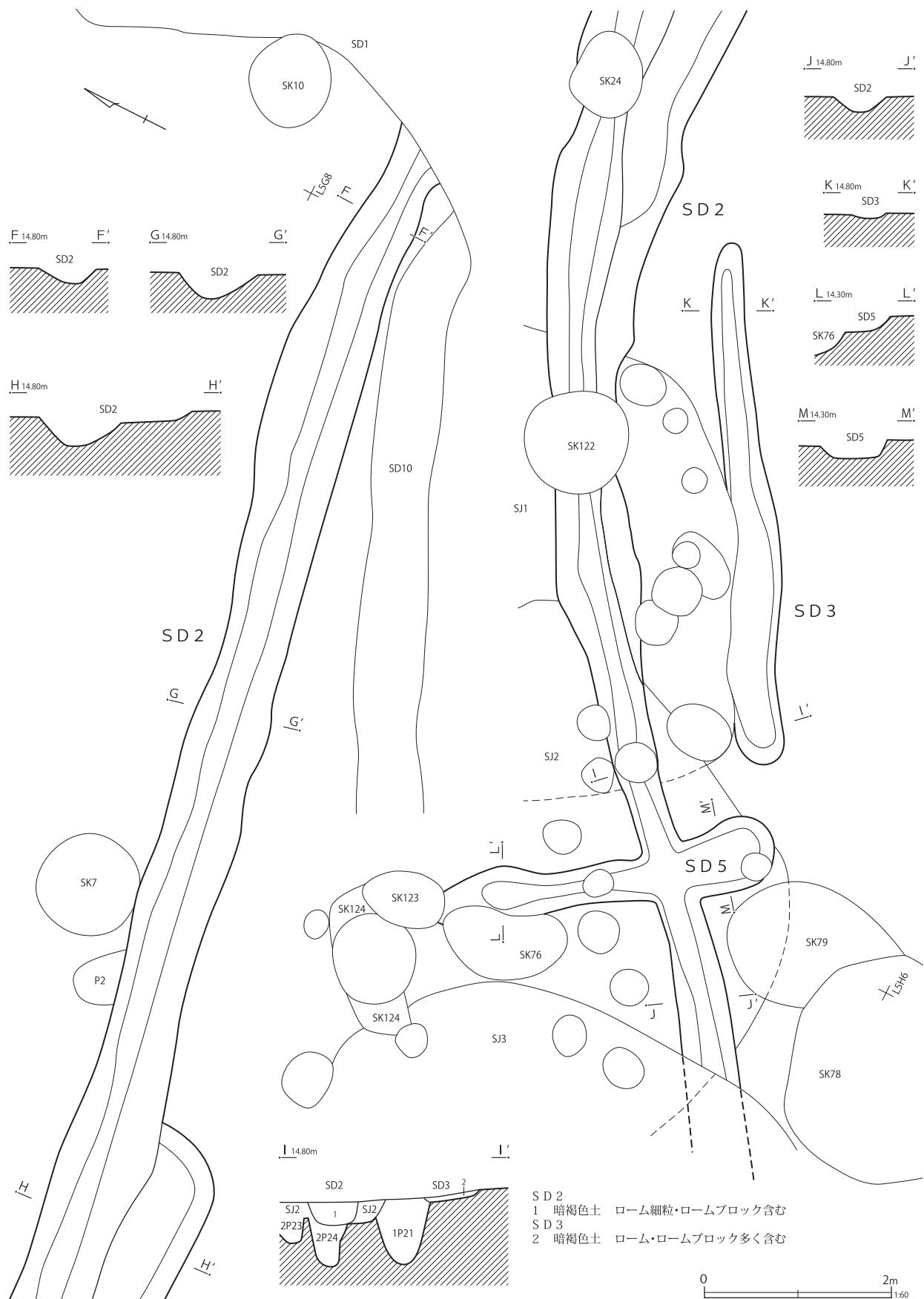
番号	グリッド	方位	長さ/m	上幅/m	下幅/m	深さ/cm
1	L5-D8~9 L5-E7 L5-F~G7~8	N-68° -E N-22° -W	48.1	0.4~2.2	0.1~0.3	30~90
2	L5-G5~8	N-52° -E N-80° -E	24.6	0.7~1.0	0.2~0.3	35
3	L5-G6	N-59° -E	5.6	0.4~0.5	0.1~0.4	5
4	L5-C7~8	N-70° -E	6.9	0.3~0.4	0.2	25
5	L5-G5~6	N-36° -W	4.6	0.4~0.7	0.1~0.5	20
6	欠番	-	-	-	-	-
7	L5-D7~8	N-19° -W	4.3	0.3	0.1	15~20
8	L5-C8~9 L5-D9	N-20° -W	10.5	0.2~0.5	0.1~0.3	5~15
9	L6-A~B2	N-5° -W	12.4	0.3~0.5	0.2~0.3	25~35
10	L5-F8~9 L5-G7~8	N-67° -E	26.8	(1.7)~(2.2)	0.3~0.4	40~70
11	L5-E7~8 L5-F8	N-24° -W	18.1	1.7~2.0	1.3~1.6	5~20
12	L5-D8~10 L5-E8~9	N-69° -E	22.5	0.7~1.3	0.1~0.4	30~35
13	L5-E~F8	N-3° -E N-52° -E	19.0	0.5~0.8	0.3~0.4	0.2~0.4
14	L5-E~F9	N-22° -W	10.9	0.3~0.5	0.1~0.2	10~25
15	L5-D~E10 L6-E1	N-22° -W	14.8	0.4~0.8	0.1~0.3	10~30
16	K5-E~F10 K5-F9 K6-E~F1	N-68° -E	16.5	2.2~5.6	1.7~5.1	10~30
17	L5-E10 L5-F9~10 L6-E1	N-68° -E	16.8	0.4~0.8	0.2~0.3	20~65

第66表 近世溝跡一覧表(2)(第375~380図)

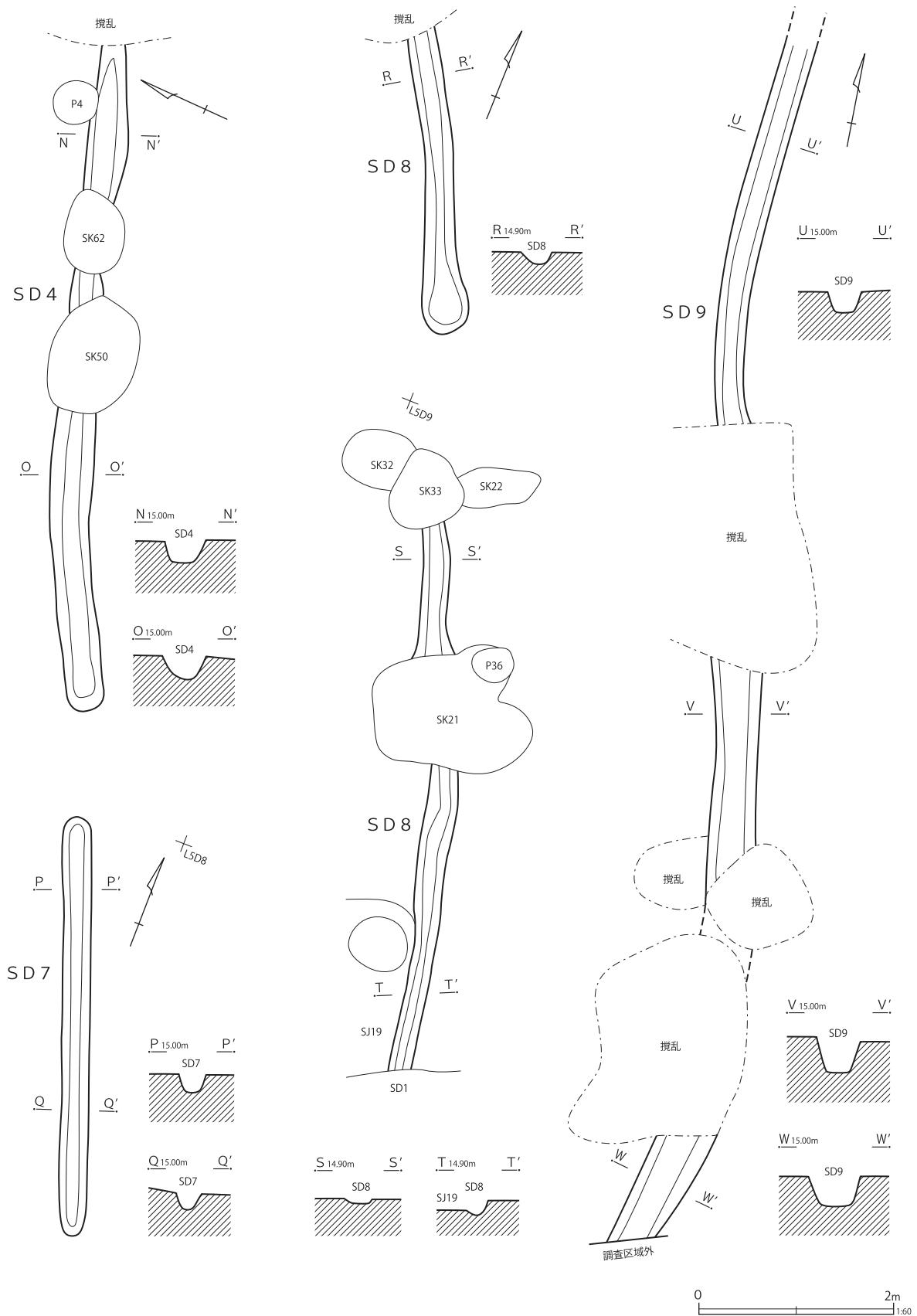
番号	平面形	断面形	溝より古	溝より新	不明
1	二箇所クランク	逆台形	SJ18 SJ19		SD2 SD8 SD10 SD1SK101 SK12 SK241
2	直線	皿型 段をもつ皿型	SJ1 SJ2 SJ3 SK24 SK122		
3	直線	皿型	SJ1		SJ1
4	直線	逆台形		SK50 SK62	
5	直線	逆台形	SJ2 SK76		SD2 SK123
6	欠番	-	-	-	-
7	直線	逆台形			
8	直線	逆台形 浅い皿型	SJ19 SK21		SD1 SK33
9	直線	逆台形			
10	直線	段をもつ不整逆台形	SJ21		SD1 SD11 SD13 SK233
11	直線	浅い皿型			SD1 SD10 SD13 SK242 SK243 SK244
12	直線	段をもつ逆台形	SJ18 SJ25		SD15
13	円弧状 直線状 1箇所クランク	逆台形	SJ18		SD10 SD11
14	直線	逆台形			SD16 SD17
15	直線	段をもつ逆台形 皿型	SJ25		SD12 SD16 SD17
16	直線	皿型			SD14 SD15 SD17 SK234 SK235 SK236 SK237
17	直線	逆台形 皿型			SD14 SD15 SD16 SK236 SK237



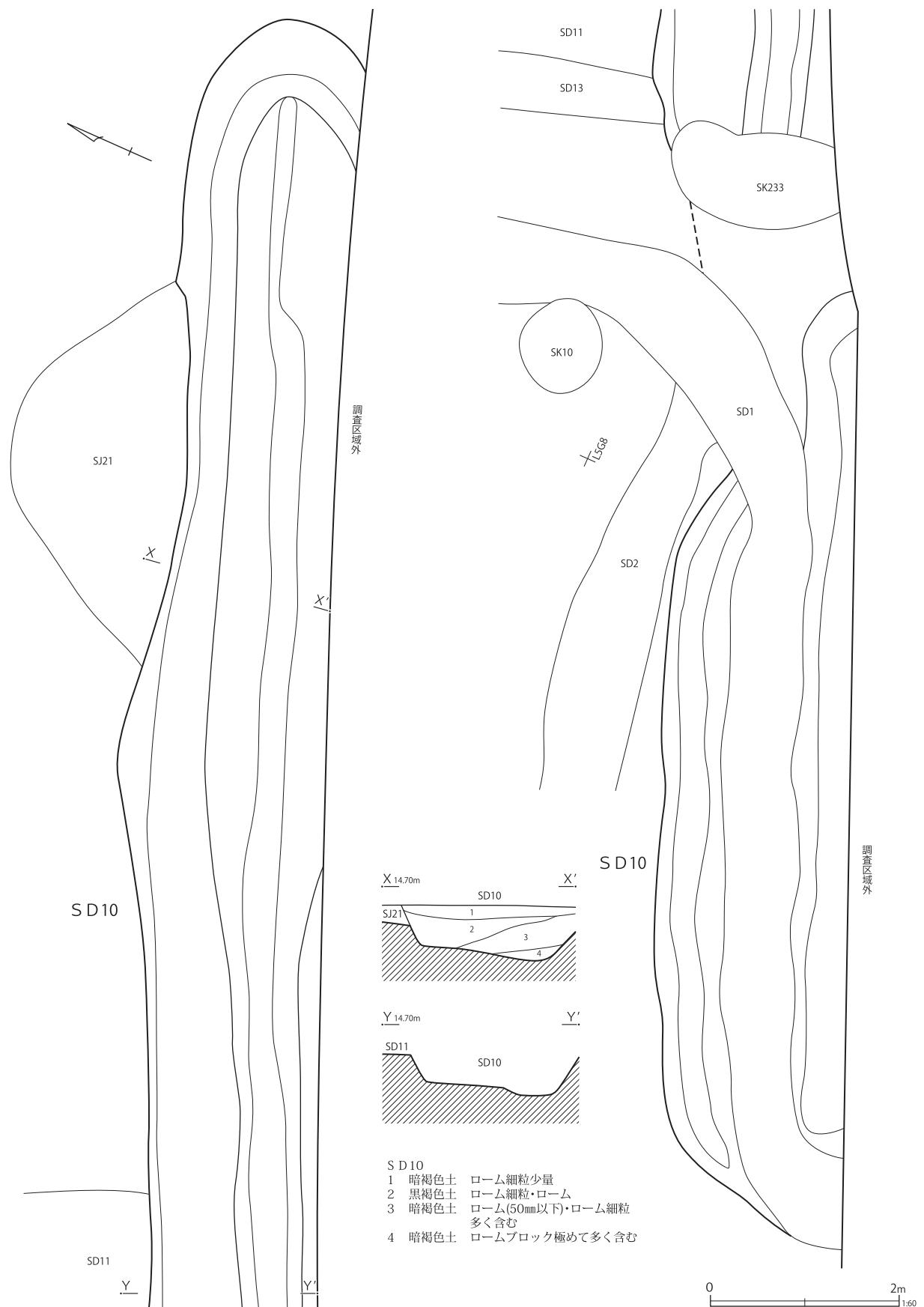
第375図 近世溝跡(1)



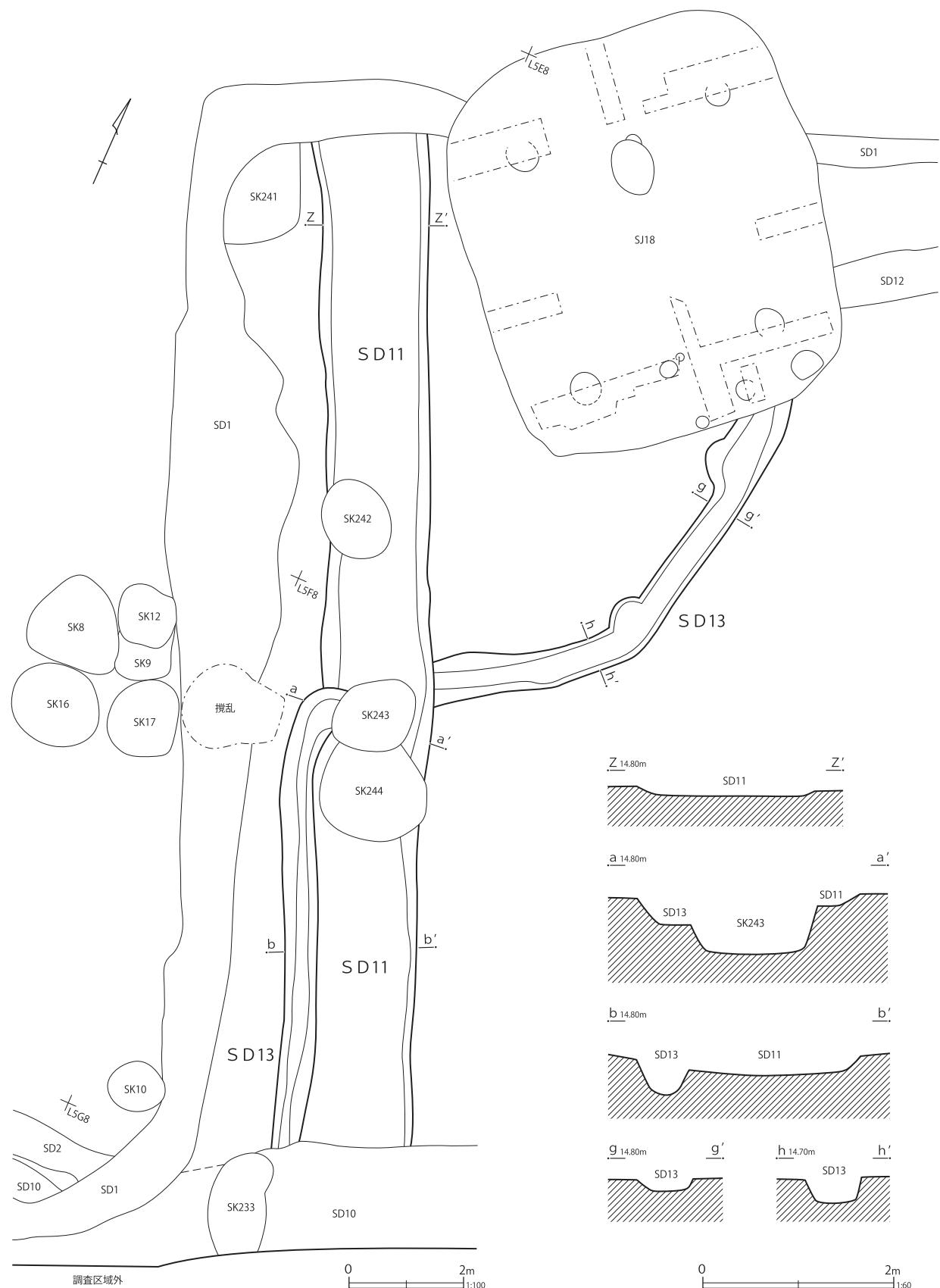
第376図 近世溝跡(2)



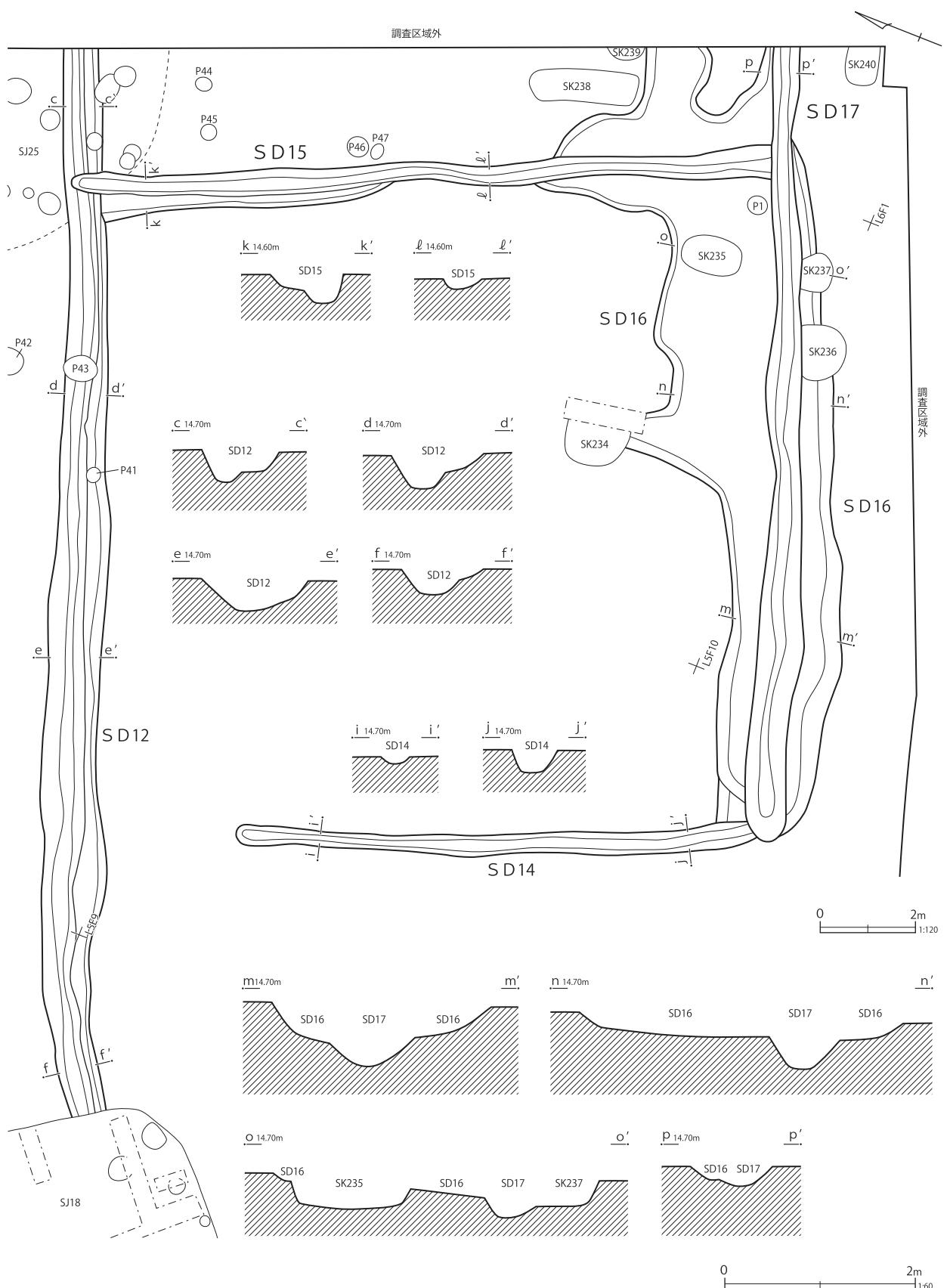
第377図 近世溝跡(3)



第378図 近世溝跡(4)



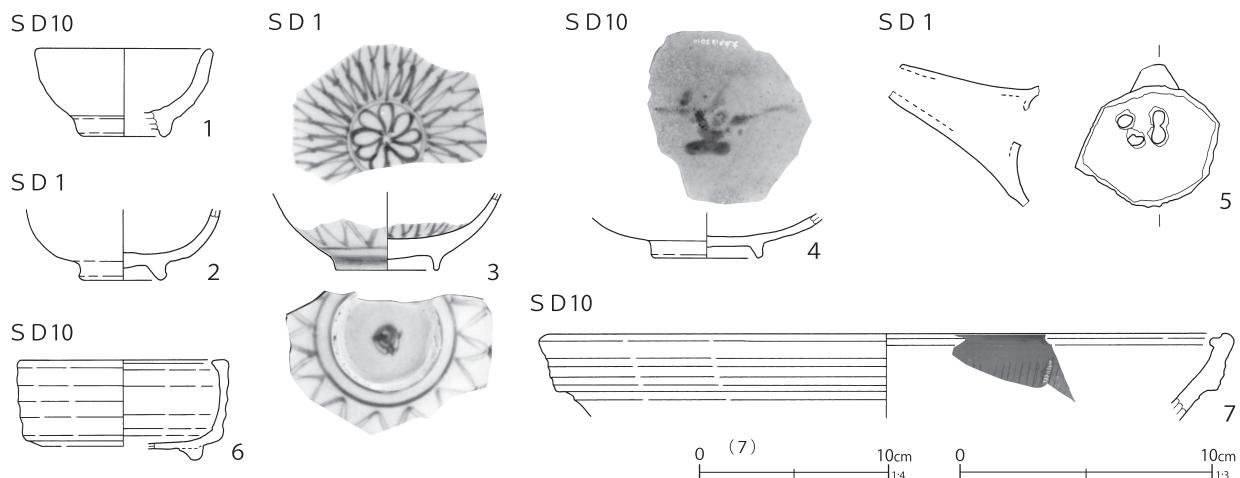
第379図 近世溝跡(5)



第380図 近世溝跡(6)

第67表 近世溝跡出土遺物観察表(第381図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	壺	(6.7)	3.5	(3.6)	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 灰釉壺 19c前葉	162-1
2	陶器	碗	—	[2.8]	3.4	50	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉碗 19c前半	162-2
3	磁器	碗	—	[3.1]	(4.0)	50	良好	灰白	肥前系 染付碗 18c後半	162-3
4	陶器	鉢	—	[1.8]	4.4	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 梅樹文鉢 19c前葉	162-4
5	陶器	土瓶	—	[5.7]	—	95	良好	灰白	信楽 灰釉土瓶 19c前半	162-5
6	陶器	香炉	(8.0)	5.0	(6.0)	15	良好	灰白	瀬戸美濃 鉄釉香炉 18c後半	162-6
7	陶器	擂鉢	(36.0)	[4.6]	—	5	普通	赤	江戸系 19c前葉	162-7



第381図 近世溝跡出土遺物

のも見られる。例えば、第2、3、5、9号溝跡などである。これらの溝跡はやや性格を異にしていると考えられる。これらの溝跡は、方形区画を構成する溝跡と比べると延長方向の形態が曲線的であり、その規模もやや小さい。遺物の出土はなかったが、方形区画を構成する溝跡とほぼ同時期のものと思われることから、家屋そのものではなく家屋に関連した施設、ないしは耕作等に関連した施設であると考えられる。

溝跡からは少量の遺物が出土した。第381図に図化できるものを掲載した。

第1号溝跡から出土した遺物は、第381図2、3、5である。2は瀬戸美濃灰釉碗である。小ぶりの碗で、時期は19世紀前半である。3は肥前系染付碗で内外面に二重網目文が施され、内面見込みに菊花文、高台内に裏銘が書かれている。高台には

砂目が付着している。18世紀後半と考えられる。5は信楽灰釉土瓶破片で、器肉は薄く軽い。時期は19世紀前半である。

1、4、6、7は第10号溝跡出土遺物である。1は瀬戸美濃系灰釉壺である。器肉が厚くヘラケズリの痕が強く残る。釉薬は茶色に近い灰釉である。4は瀬戸美濃系鉢で、見込みに梅樹文が描かれている。内外面とも貫入が見られる。19世紀前葉と考えられる。6は瀬戸美濃鉄釉香炉である。胴部のロクロ目が強く残る小ぶりの香炉で、脚は1箇所しか残っていないが、3脚であると考えられる。鉄釉は底部を除く口縁から胴部に施され、内面にも飛び散る。時期は18世紀後半と考えられる。7は江戸系擂鉢破片である。胎土の色調は明赤褐色で焼成良好で、堅緻である。時期は19世紀前葉である。

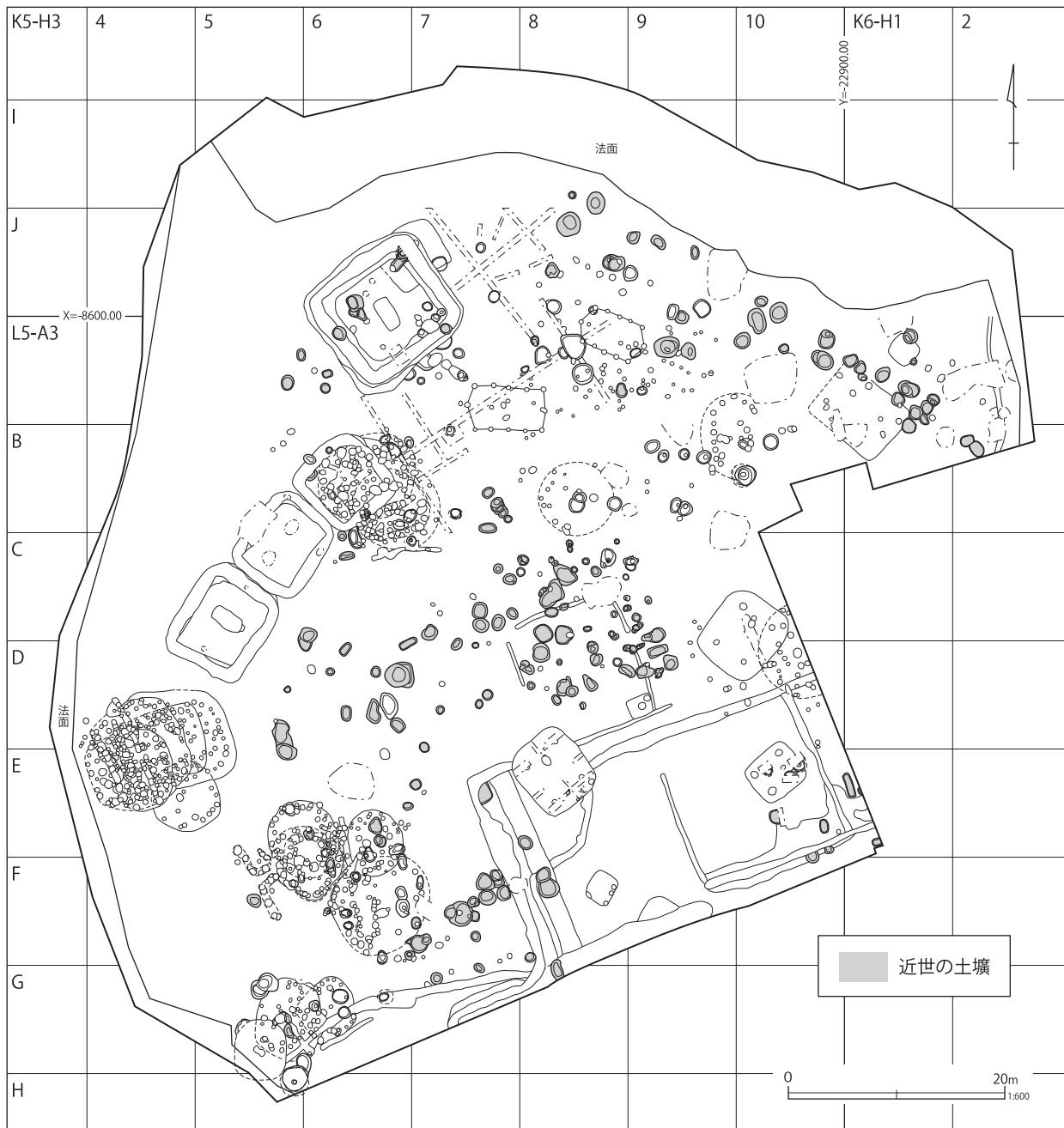
(2) 土壌

大木戸遺跡第13地点からは土壌を241基検出した。この中で近世の土壌は155基である。第382図に近世の土壌全体図、第383～388図に拡大図、第391～400図に個別図を示した。

すでに述べたように調査区南東隅には溝で囲まれた近世の屋敷の区画が存在するが、土壌は主と

してこの区画の外側に分布し、A-10、D-8、F-7の各グリッドをそれぞれ中心として分布している。

つまり、土壌は生活と密接に関連しながらも、家屋の外周に設けられ、生活の中で一定の役割を担っていたと考えられる。その機能は、貯蔵や廃棄などに関わるものであろう。



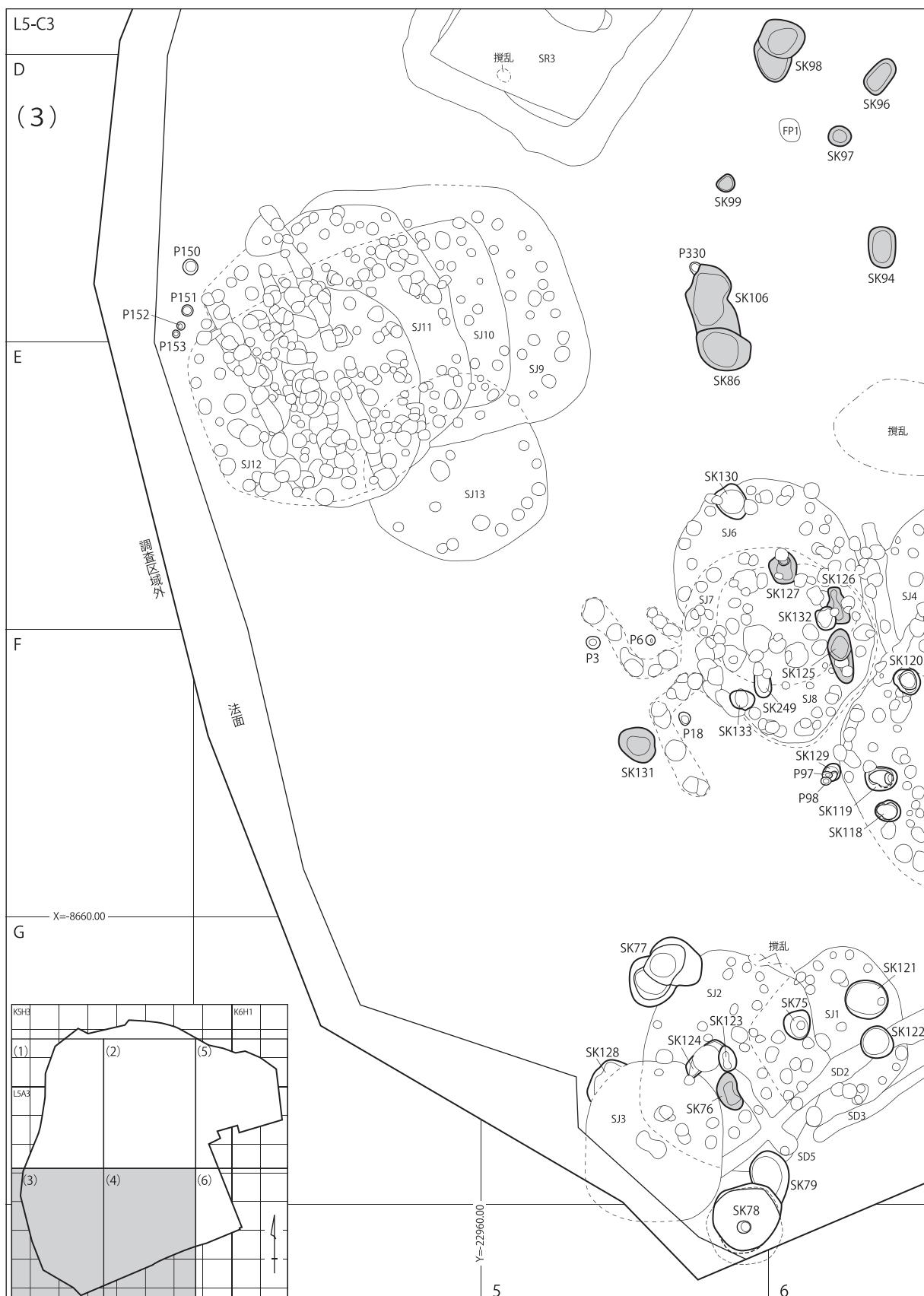
第382図 近世土壌(全体図)



第383図 近世土壤、ピット (拡大図) (1)



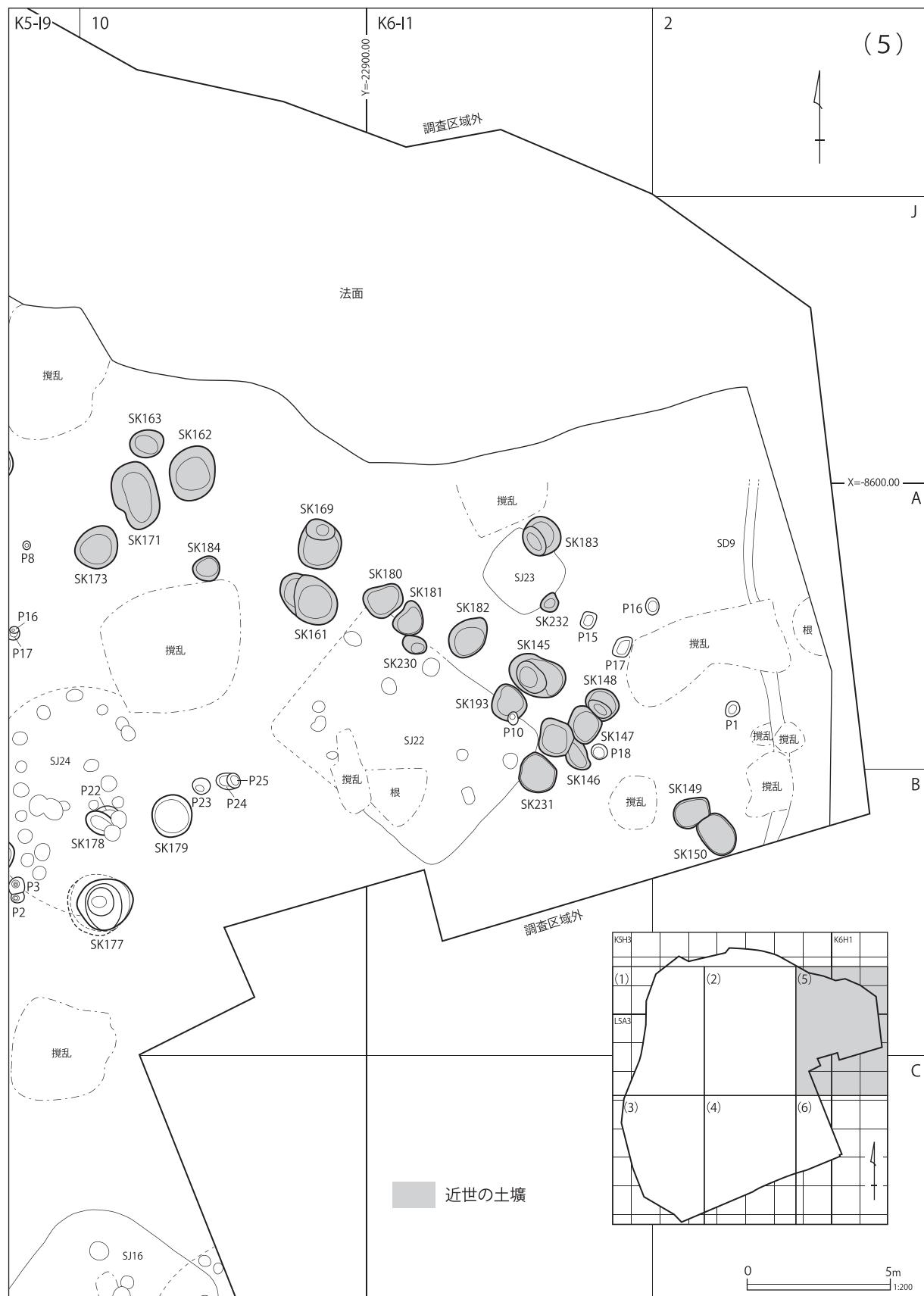
第384図 近世土壤、ピット(拡大図)(2)



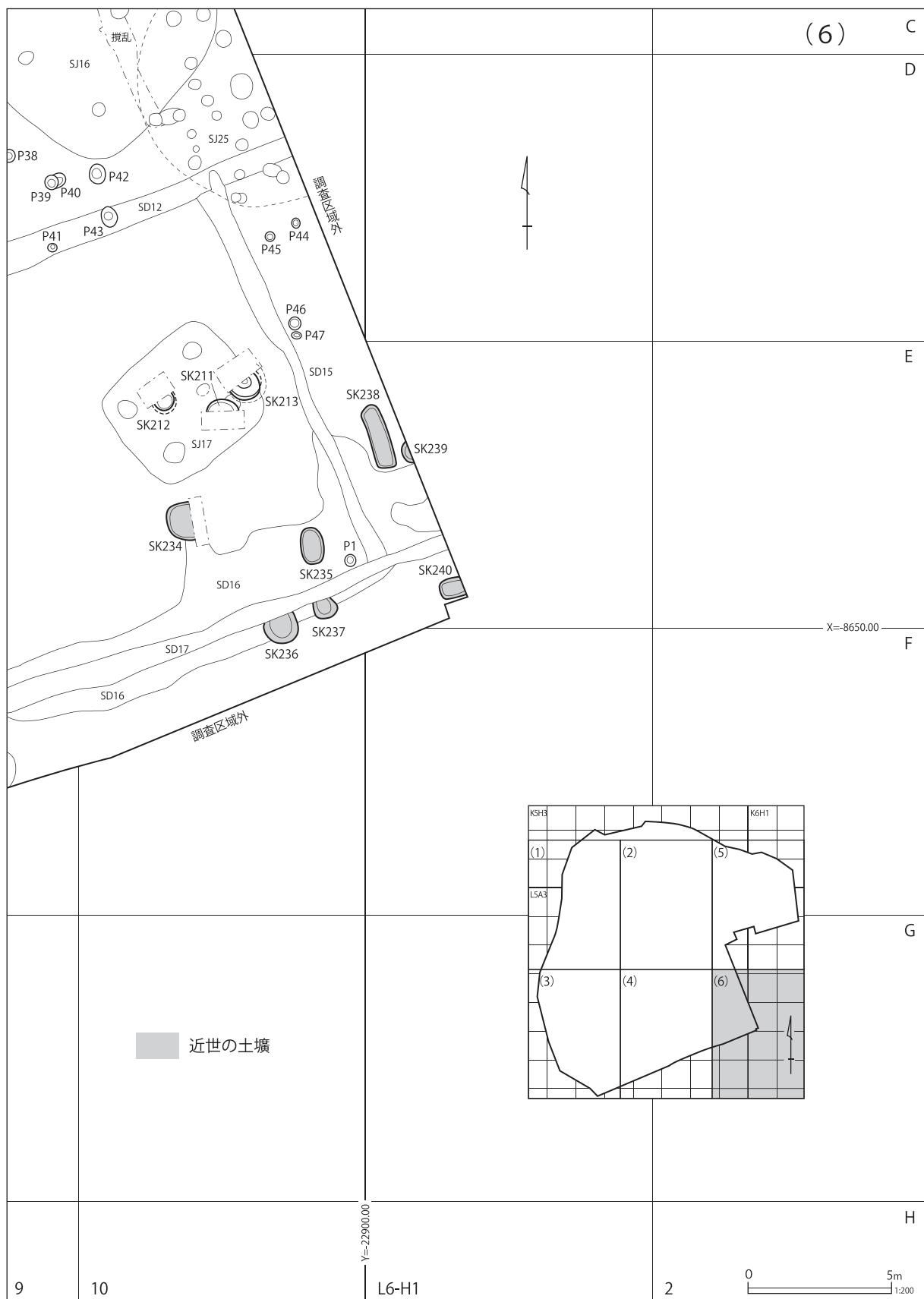
第385図 近世土壤、ピット(拡大図)(3)



第386図 近世土壤、ピット(拡大図)(4)



第387図 近世土壤、ピット(拡大図)(5)



第388図 近世土壤、ピット(拡大図)(6)

第68表 近世土壤一覧表(1)(第391~400図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							土壤より古	土壤より新	不明
1	K5-J8	楕円形	N-82°-W	206	160	78			
2	K5-I~J8	楕円形	N-0°-E	248	170	19			
3	K5-J8	楕円形	N-50°-E	248	212	24			
4	K5-I8	円形	N-90°-E	70	69	44			
5	L5-A7	楕円形	N-40°-W	102	93	99	SR1		
6	L5-G7	楕円形	N-42°-W	100	76	18			
7	L5-G7	円形	N-10°-W	105	105	57			SD2
8	L5-F7	隅丸三角形	N-20°-W	160	154	39		SK9	
9	L5-F7	楕円形	N-23°-W	(60)	100	45	SK8		SK12
10	L5-F8	楕円形	N-72°-E	98	89	12			SD1
11	L5-F7	円形	N-42°-W	98	90	24			
12	L5-F7	円形	N-23°-W	105	101	57			SK9 SD1
13	L5-F7	楕円形	N-19°-E	227	174	57	SK15		SK14
14	L5-F7	楕円形	N-53°-W	104	96	24			SK13
15	L5-F7	楕円形	N-78°-W	323	(143)	33		SK13	
16	L5-F7	楕円形	N-86°-W	162	140	42			
17	L5-F7	楕円形	N-23°-W	130	120	45			
18	L5-D9	不整形	N-43°-W	153	139	39			
19	L5-D9	隅丸長方形	N-68°-E	186	96	45			
20	L5-D9	不整形	N-32°-E	109	67	12			
21	L5-D9	不整形	N-72°-E	166	126	21			SD8
22	L5-D9	楕円形	N-64°-E	(77)	41	27			SK33
23	L5-C~D9	不整形	N-72°-E	223	128	36			
26	L5-C9	不整形	N-48°-E	121	60	57			
27	L5-C9	隅丸長方形	N-51°-W	83	74	27			
28	L5-C9	楕円形	N-29°-W	72	60	45			
29	L5-C8~9	不整形	N-76°-E	74	54	48			
31	L5-D8~9	楕円形	N-55°-W	151	94	21			
32	L5-D8~9	楕円形	N-80°-W	(62)	60	30		SK33	
33	L5-D9	楕円形	N-20°-E	80	(70)	42	SK32		SK22 SD8
34	L5-C8	不整形	N-38°-W	92	60	57			
36	L5-D8	不整形	N-42°-W	174	93	24			
38	L5-D8	楕円形	N-37°-E	122	110	27			
39	L5-D8	楕円形	N-24°-W	114	97	45			
40	L5-C8	隅丸長方形	N-79°-E	76	48	27			
42	L5-D8	楕円形	N-46°-E	113	100	27	SK43		SK43
43	L5-D8	楕円形	N-27°-E	188	(96)	21		SK42	SK42
44	L5-D8	楕円形	N-28°-W	98	74	18			
46	L5-D8	円形	N-28°-E	72	70	30			
47	L5-D8	楕円形	N-0°-E	58	51	51			
49	L5-D8	楕円形	N-28°-W	174	160	39			
50	L5-C8	楕円形	N-83°-E	126	90	21	SD4		SD4
51	L5-D7~8	不整形	N-45°-W	146	88	60			
52	L5-C~D8	円形	N-21°-W	178	172	45			
53	L5-C~D8	楕円形	N-41°-W	170	155	39			
55	L5-B6	円形	N-49°-E	62	60	90	SR2		
58	L5-C8	楕円形	N-34°-W	100	86	30			
59	L5-C8	円形	N-90°-E	66	63	27			
60	L5-C8	円形	N-90°-E	61	61	81			SK68
62	L5-C8	楕円形	N-63°-E	85	62	27	SD4		
63	L5-C8	円形	N-31°-E	48	47	66			
65	L5-C8	楕円形	N-37°-W	68	60	33	SK66		

第69表 近世土壌一覧表(2)(第391~400図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
66	L5-C8	楕円形	N-6°-W	58	49	21		SK65	
67	L5-C8	不整形	N-42°-W	97	52	66		SK68	
68	L5-C8	楕円形	N-57°-W	248	(153)	33		SK69	SK60 SK67
69	L5-C8	不整形	N-34°-E	282	176	36	SK68	SK70	
70	L5-C8	楕円形	N-34°-E	98	44	12	SK69		
73	L5-C7~8	楕円形	N-77°-W	104	94	21			
74	L5-C7	楕円形	N-90°-E	122	98	57			
76	L5-G6	楕円形	N-26°-W	130	75	39	SJ2	SD5	
80	L5-E6~7	楕円形	N-82°-E	94	72	24			
81	L5-E6~7	楕円形	N-48°-E	104	95	39			
82	L5-D~-E7	楕円形	N-37°-W	97	85	15			
83	L5-F6~7	円形	N-54°-E	92	(84)	75		P6	
84	L5-F6~7	楕円形	N-20°-W	110	86	45	SJ5		
85	L5-F6~7	不整形	N-86°-E	236	166	141	SJ5		
86	L5-D~E5	楕円形	N-65°-W	200	141	111		SK106	
88	L5-C7	円形	N-0°-E	87	86	36			
89	L5-D7	楕円形	N-10°-E	81	77	15			
90	L5-D6	楕円形	N-44°-W	138	110	27			
91	L5-D6~7	不整形	N-72°-E	267	221	114			
92	L5-D7	円形	N-0°-E	100	98	36			
93	L5-D7	楕円形	N-0°-E	85	72	21			
94	L5-D6	楕円形	N-0°-E	140	94	30			
95	L5-D6	楕円形	N-0°-E	98	88	21			
96	L5-D6	楕円形	N-47°-E	130	78	21			
97	L5-D6	楕円形	N-90°-E	78	68	21			
98	L5-C~D5~6	楕円形	N-17°-E	212	150	60			
99	L5-D5	楕円形	N-40°-E	60	54	15			
100	L5-C7	楕円形	N-41°-E	145	121	33			
101	L5-C~D7	楕円形	N-31°-E	118	86	48			
102	L5-D7	楕円形	N-90°-E	62	54	9			
104	L5-B~C6	円形	N-22°-W	87	78	33		P51から変更	
105	L5-C6	楕円形	N-81°-E	139	73	39			
106	L5-D5	不整形	N-4°-E	(216)	144	66		SK86	
107	L5-C7	楕円形	N-23°-E	146	119	33			
108	L5-C7	楕円形	N-57°-W	148	128	24	SK109		
109	L5-C7	楕円形	N-0°-E	153	136	27		SK108	
110	L5-C7	楕円形	N-42°-W	110	94	42			
111	L5-C~D6~7	隅丸長方形	N-59°-E	172	68	15			
112	L5-E6	隅丸長方形	N-0°-E	152	119	45	SJ4		
113	L5-E6	楕円形	N-45°-W	119	104	33	SJ4		
125	L5-F6	楕円形	N-0°-E	(98)	82	66	SJ6 SJ7 SJ8		
126	L5-E6	不整形	N-18°-W	130	(60)	60	SJ6 SJ7 SJ8 SK132		
127	L5-E6	楕円形	N-10°-W	(100)	94	144	SJ6 SJ7 SJ8		
131	L5-F5	楕円形	N-50°-W	137	112	54			
140	L5-D6	不整形	N-7°-W	227	130	33			
145	L6-A1	楕円形	N-72°-W	198	136	78			
146	L6-A1	不整形	N-42°-W	224	130	18		SK147	
147	L6-A1	隅丸長方形	N-37°-E	113	(110)	36	SK146 SK148		
148	L6-A1	楕円形	N-54°-W	114	(96)	42		SK147	
149	L6-B2	楕円形	N-71°-W	130	98	18			SK150
150	L6-B2	楕円形	N-35°-E	(145)	114	21			SK149
153	L5-A8	楕円形	N-8°-W	135	101	30			

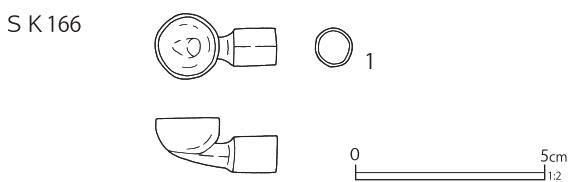
第70表 近世土壙一覧表(3)(第391~400図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							土壙より古	土壙より新	不明
156	K5-J8	楕円形	N-7°-E	144	124	72	L5-J8 P5		
160	K~L5-J9、A9	隅丸長方形	N-30°-E	118	112	60	SK159		
161	L5-A10	楕円形	N-48°-W	220	150	105			
162	K~L5-J10、A10	楕円形	N-18°-E	194	160	90			
163	K5-J10	楕円形	N-90°-E	117	91	30			
165	K5-J8~9	楕円形	N-48°-E	133	110	81			
166	K5-J9	楕円形	N-0°-E	122	73	27			
167	L5-A9	不整形	N-41°-W	148	136	84			L5-A9 P9
169	L5-A10	楕円形	N-19°-E	162	145	84			
170	L5-A8	楕円形	N-22°-W	94	74	21			
171	K~L5-J10、A10	楕円形	N-17°-W	230	149	84			
173	L5-A9~10	楕円形	N-40°-E	156	137	66			
175	K5-J9	楕円形	N-44°-W	152	95	69			
176	L5-A9	楕円形	N-78°-W	235	184	99			L5-A9 P9
180	L5~6-A10、A1	楕円形	N-64°-E	132	112	60	SJ22		
181	L6-A1	不整形	N-66°-E	109	100	27	SJ22		
182	L6-A1	楕円形	N-42°-E	160	119	45			
183	L6-A1	円形	N-38°-W	133	128	45	SJ23		
184	L5-A10	楕円形	N-77°-E	92	84	21			
193	L6-A1	楕円形	N-60°-W	120	118	45	SJ22		L6-A1 P10
196	L5-B~C7	楕円形	N-90°-E	164	90	27			
197	L5-B7	不整形	N-39°-W	(186)	126	57			SK198
198	L5-B7	楕円形	N-90°-E	77	65	9			SK197
199	L5-B7	楕円形	N-41°-E	110	90	12			
206	L5-A6	円形	N-0°-E	94	90	45			
207	L5-A6	隅丸長方形	N-72°-E	92	68	24			
208	L5-A5~6	楕円形	N-0°-E	110	78	84			
209	L5-A5	楕円形	N-0°-E	140	114	60			
210	L5-B6	不明	N-45°-E	112	(49)	12	SR2		
214	K5-J6	不整形	N-35°-W	122	(76)	210	SJ14 SR1 SK215		SK215
215	K5-J6	楕円形	N-40°-E	(136)	104	63	SJ14 SR1	SK214	SK214
216	K5-J6	隅丸長方形	N-26°-W	150	142	99	SR1 SK217		SK218
217	K~L5-J6、A6	不明	—	(88)	(44)	21		SK216	SK218
218	K~L5-J6、A6	不整形	N-30°-W	155	76	69	SR1		SK216 SK217 L5P6 P3
228	L5-A6	円形	N-45°-W	136	119	114	SR1		
229	L5-B6	円形	N-90°-E	47	46	58	SR2 SJ27		
230	L6-A1	円形	N-49°-W	85	66	27	SJ22		
231	L6-A~B1	円形	N-0°-E	137	126	37	SJ22		
232	L6-A1	円形	N-38°-E	71	56	48	SJ23		
233	L5-F~G8	楕円形	N-15°-W	(173)	102	41			SD10
234	L5-E10	円形	N-13°-W	132	(84)	86			SD16
235	L5-E10	楕円形	N-8°-W	127	79	24			SD16
236	L5-E~F10	楕円形	N-20°-W	(91)	116	15			SD16 SD17
237	L5-E10	楕円形	N-29°-W	(68)	76	27			SD16 SD17
238	L5~6-E10、E1	隅丸長方形	N-20°-W	225	67	5			
239	L6-E1	円形	N-23°-W	(80)	(29)	11			
240	L6-E1	隅丸方形	N-70°-E	(85)	63	41			
241	L5-E7	隅丸方形	N-31°-W	(146)	(120)	17			SD1
242	L5-E7~8	円形	N-47°-E	142	115	29			SD11
243	L5-F8	円形	N-21°-W	137	121	43			SK244 SD11 SD13
244	L5-F8	円形	N-20°-W	(154)	185	21			SK243 SD11

第389図1は、第166号土壙から出土した煙管の雁首である。

第390図2は、第8、9号土壙出土のかわらけ皿である。時期は17世紀と考えられる。3は第19号土壙出土の瀬戸美濃産の半胴甕口縁部で、時期は18世紀後半である。4は第21号土壙出土の瀬戸美濃系灰釉木瓜皿である。時期は17世紀前半である。5は第44号土壙出土の肥前系緑釉輪剥皿である。17世紀後半と考えられる。6は第69号土壙出土の肥前系染付碗で、18世紀後半である。7は第108号土壙出土の瀬戸美濃灰釉徳利である。8は第112号土壙出土の肥前系染付碗で、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。9～14は第166号土壙出土遺物で、9は肥前系染付鉢である。10は信楽系灰釉水注で19世紀前半である。11は瀬戸美濃灰釉坏

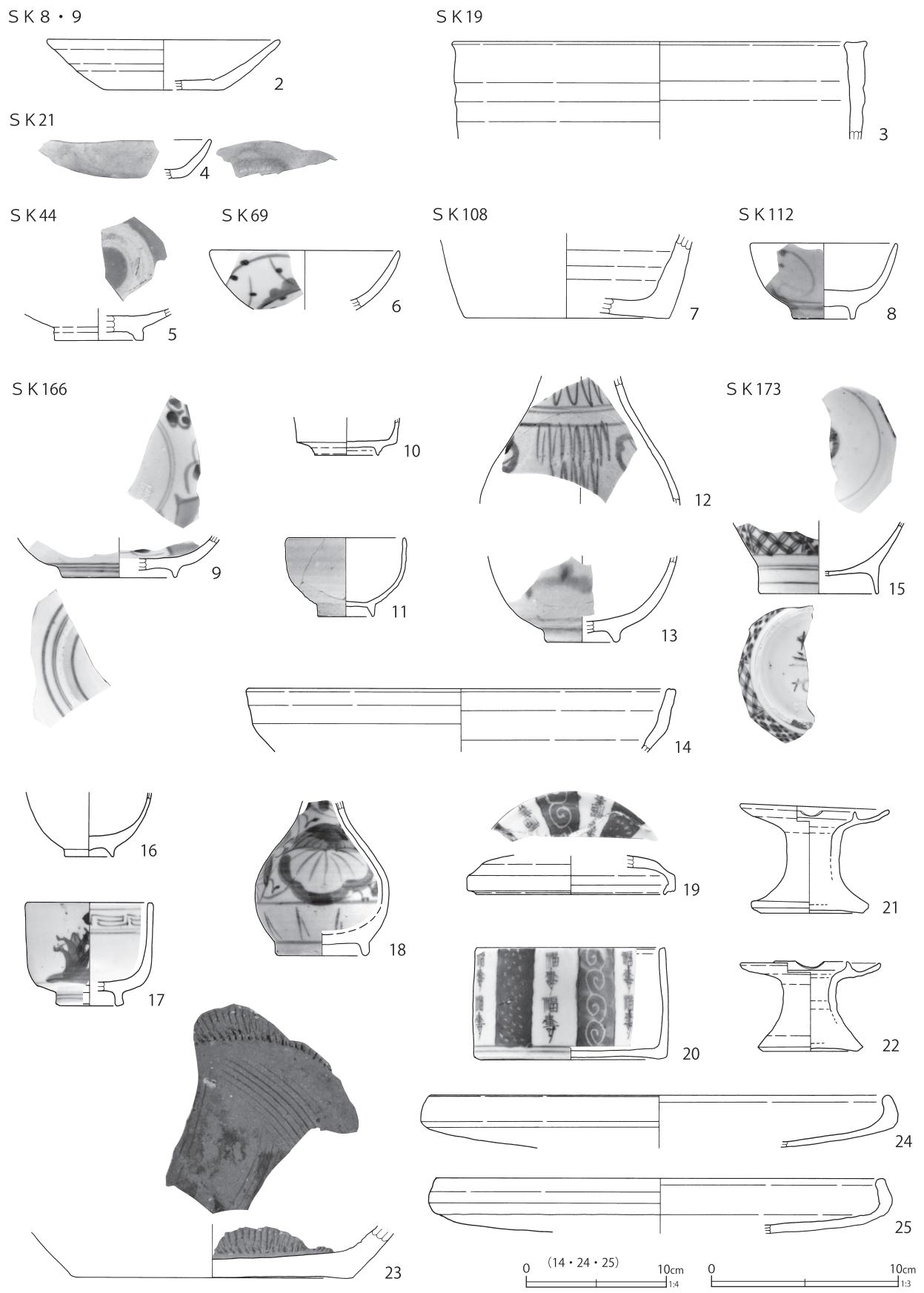
である。12は肥前系染付瓶である。13は肥前系陶胎染付碗で18世紀代と考えられる。15～25は第173号土壙出土遺物で、15は肥前系広東碗である。煤縫痕があり、底部には煤書きが見られる。19世紀前葉である。16は肥前系白磁坏で、高台に砂目付着。17は肥前系染付碗。18は染付瓶である。19、20は肥前系段重の蓋と身で同一個体と思われる。21、22は信楽系灰釉灯明受皿である。23～25は在地系の擂鉢、焙烙である。



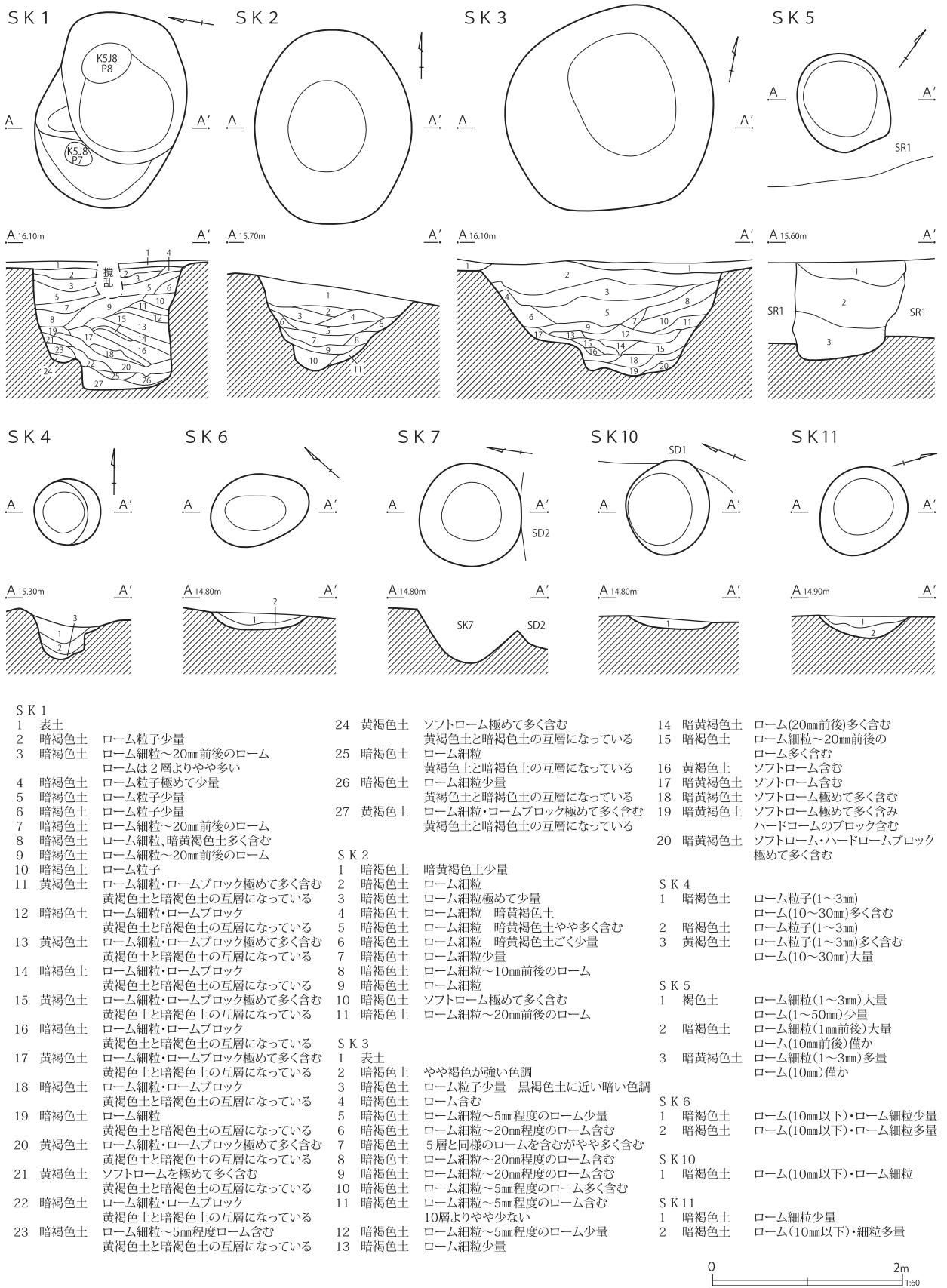
第389図 近世土壙出土遺物(1)

第71表 近世土壙出土遺物観察表(第389、390図)

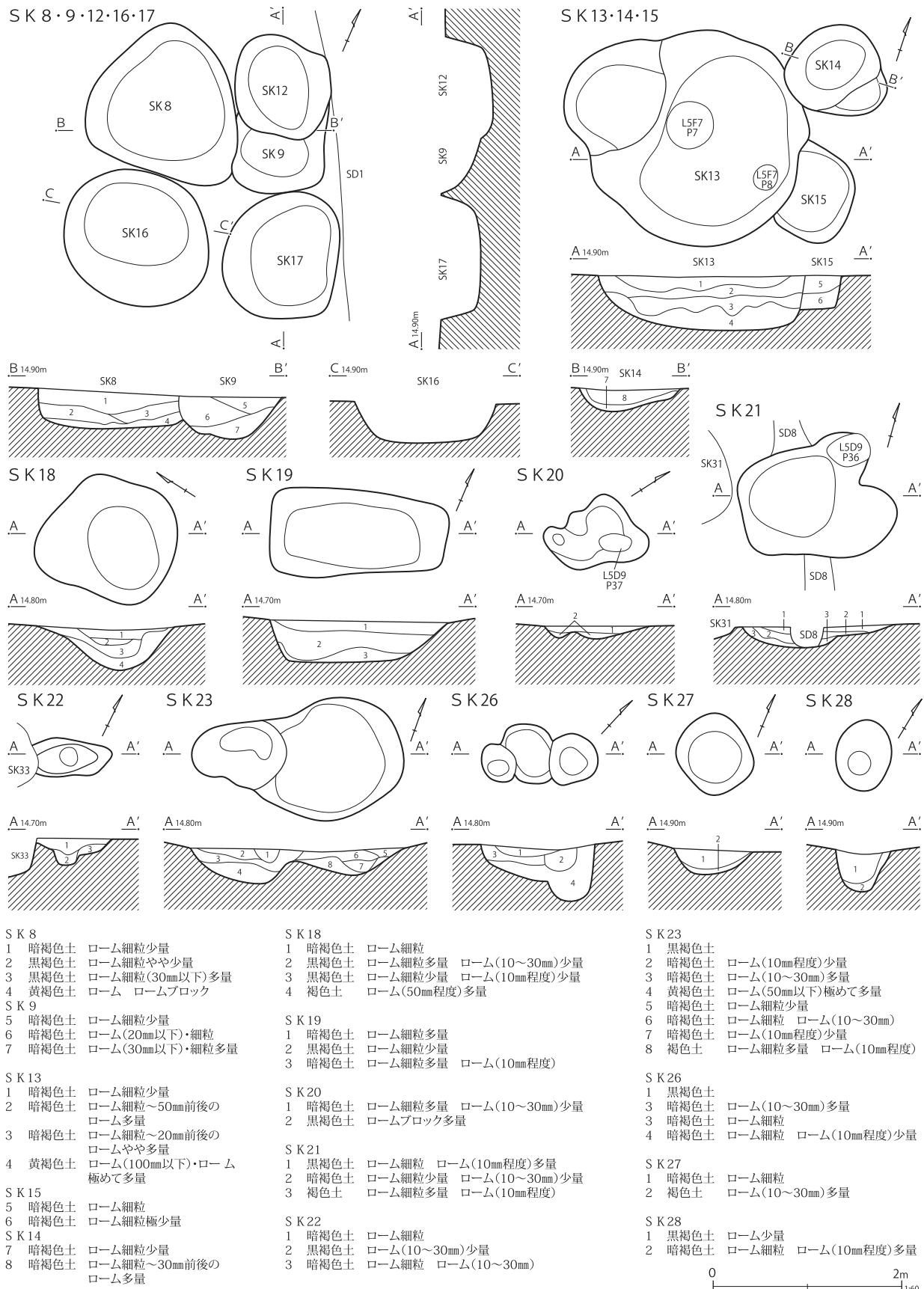
番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	残存	焼成	色調	備考		図版			
									長さ/cm	火皿径/cm				
1	金属器	煙管							=3.2	=1.7	=1.0	=6.0	SK166	162-7
2	かわらけ	皿	(12.2)	2.7	(6.4)	10	普通	橙	17c?	SK8,9				162-8
3	陶器	甕	(21.6)	[5.2]	—	5	普通	灰褐	瀬戸美濃 半胴甕 内外面施釉	18c後半	SK19			162-9
4	陶器	皿	—	[2.1]	—	5	良好	灰	瀬戸美濃系 灰釉木瓜皿	17c前半	SK21			162-10
5	陶器	皿	—	[1.7]	(4.6)	30	良好	灰白	肥前系 緑釉輪剥皿	17c後半	SK44			
6	磁器	碗	(10.0)	[3.2]	—	10	良好	灰白	肥前系 染付碗(くらわんか系)	18c後半	SK69			162-11
7	陶器	徳利	—	[4.5]	(10.8)	10	普通	淡黄	瀬戸美濃 灰釉徳利	18c後半～19c前半	SK108			162-12
8	陶器	碗	(7.6)	4.1	3.2	40	良好	灰白	肥前系 染付碗(くらわんか系)	18c後半～19c前半	SK112			162-13
9	磁器	鉢	—	[2.1]	(6.0)	20	良好	灰白	肥前系 染付鉢	18c後半～19c前半	SK166			
10	陶器	水注	—	[2.0]	3.4	45	良好	灰白	信楽系 灰釉水注	19c前半	SK166			
11	陶器	坏	(6.1)	4.2	3.0	50	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉坏	18c後半～19c前半	SK166			162-14
12	磁器	瓶	—	[6.9]	—	20	良好	灰白	肥前系 染付瓶	18c後半～19c前半	SK166			162-15
13	陶器	碗	—	[4.6]	(4.0)	25	良好	にぶい黄橙	肥前系(陶胎染付) 染付碗	18c代	SK166			162-16
14	瓦質陶器	焙烙	(30.4)	[4.5]	—	5	普通	にぶい黄橙	在地系 焙烙	18c後半～19c前半	SK166			162-17
15	磁器	碗	—	[3.9]	(6.3)	30	良好	灰白	肥前系 染付碗(広東碗)	煤縫痕、底部煤書き	19c前葉	SK173		162-18
16	磁器	坏	—	[3.4]	2.6	60	良好	灰白	肥前系 白磁坏	18c後半～19c前葉	SK173			162-19
17	磁器	碗	(6.6)	5.5	(3.6)	45	良好	灰白	肥前系 染付碗	19c前半	SK173			162-20
18	磁器	瓶	—	[8.3]	5.0	95	良好	灰白	肥前系 染付瓶	18c後半～19c前半	SK173			162-21
19	磁器	蓋	(10.0)	[2.1]	—	25	良好	灰白	肥前系 段重蓋	19c前半	SK173			162-22
20	磁器	段重	(20.0)	6.0	(19.4)	25	良好	灰白	肥前系 染付段重	19c前半	SK173			162-23
21	陶器	灯明受皿	7.8	5.7	6.2	90	良好	淡黄	信楽系 灰釉灯明受皿	19c前半	SK173			162-24
22	陶器	灯明受皿	(7.3)	4.8	5.6	80	良好	灰白	信楽系 灰釉灯明受皿	19c前半	SK173			162-25
23	陶器	擂鉢	—	[2.8]	(15.0)	30	普通	明赤褐	在地系 擂鉢	19c前半	SK173			162-26
24	瓦質陶器	焙烙	(32.6)	[3.7]	(33.2)	20	普通	にぶい橙	在地系 焙烙					162-27
25	瓦質陶器	焙烙	(31.6)	[3.9]	(31.8)	20	普通	浅黄橙	在地系 焙烙					162-28



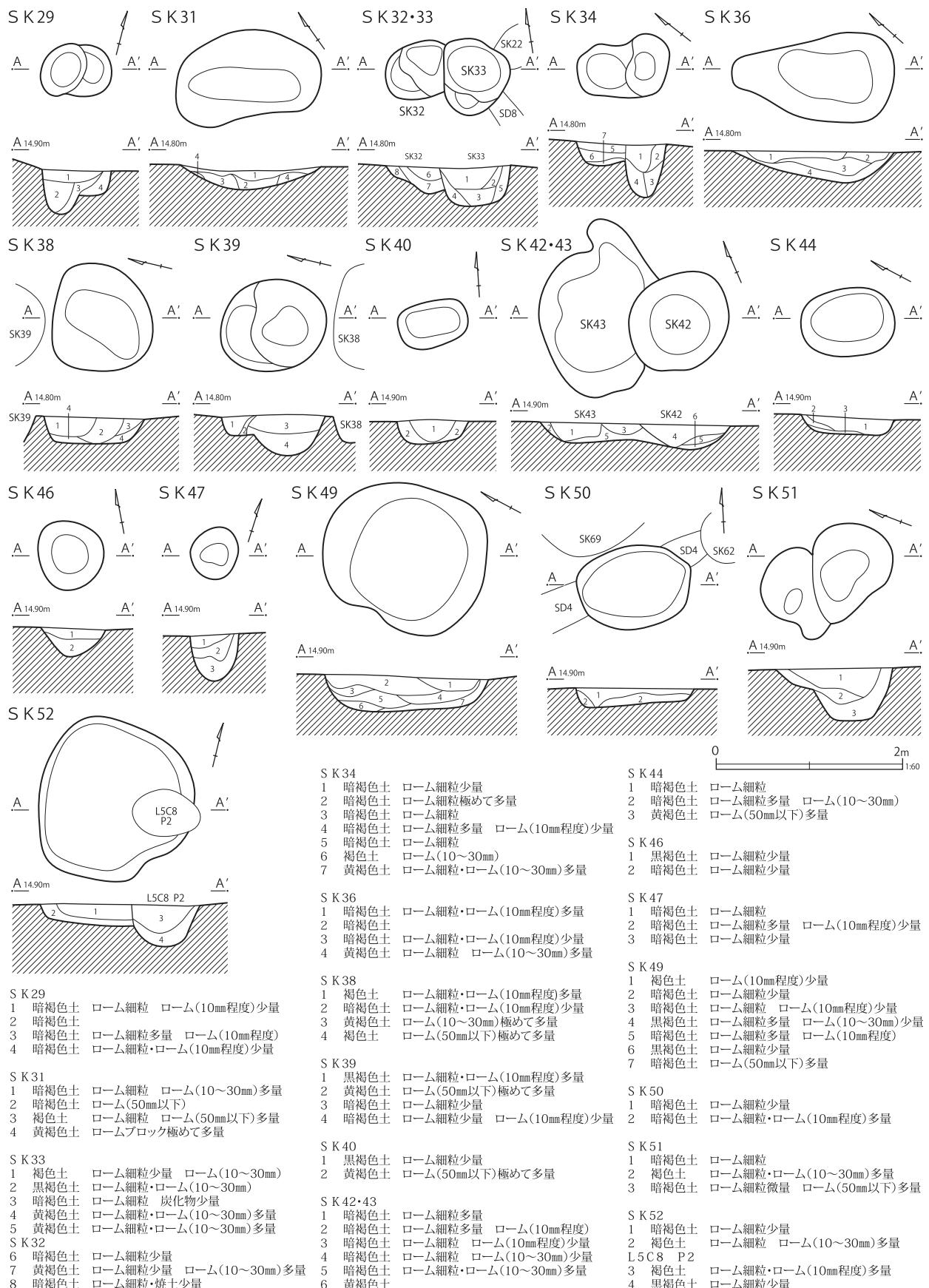
第390図 近世土壤出土遺物(2)



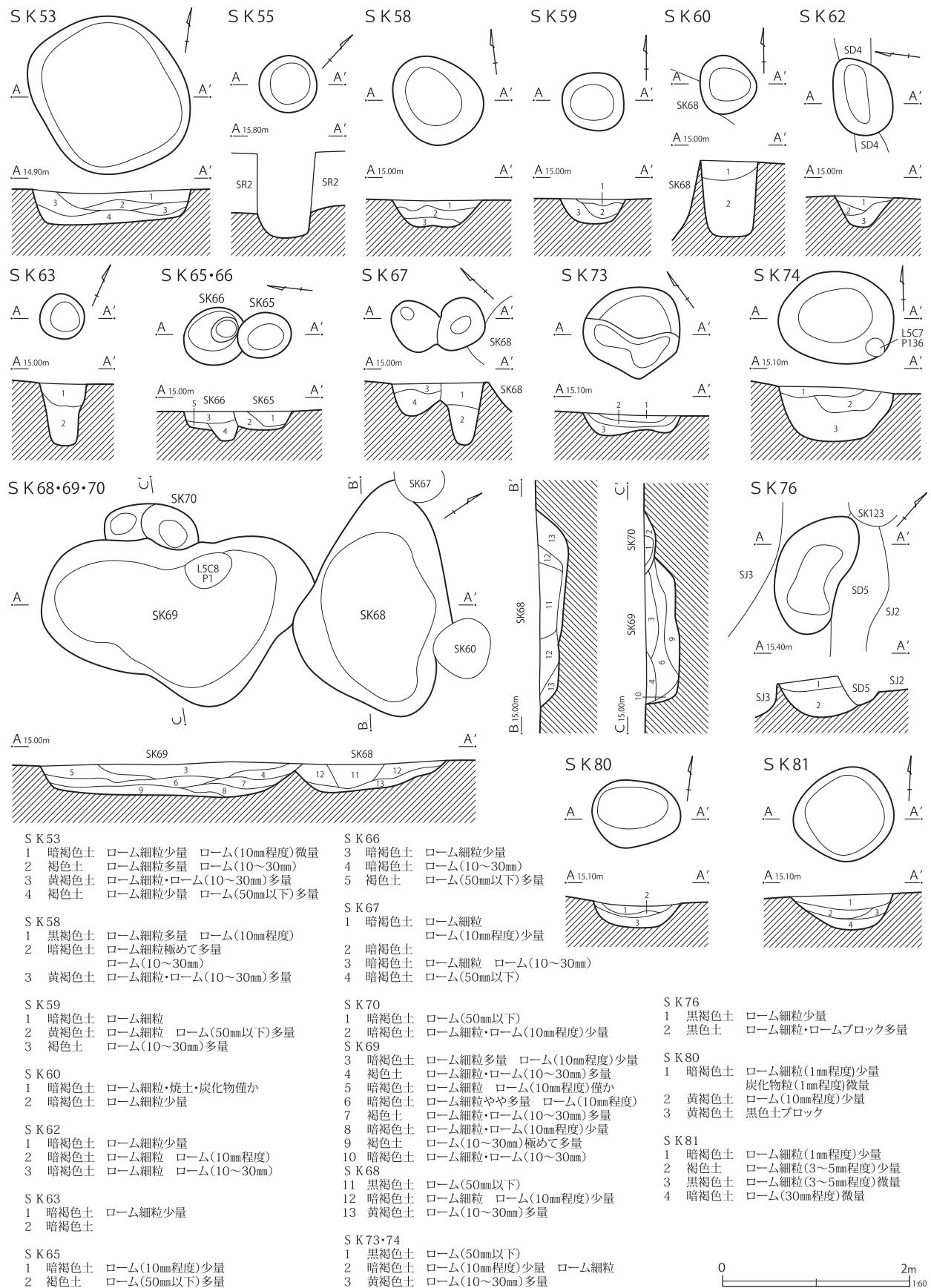
第391図 近世土壤(1)



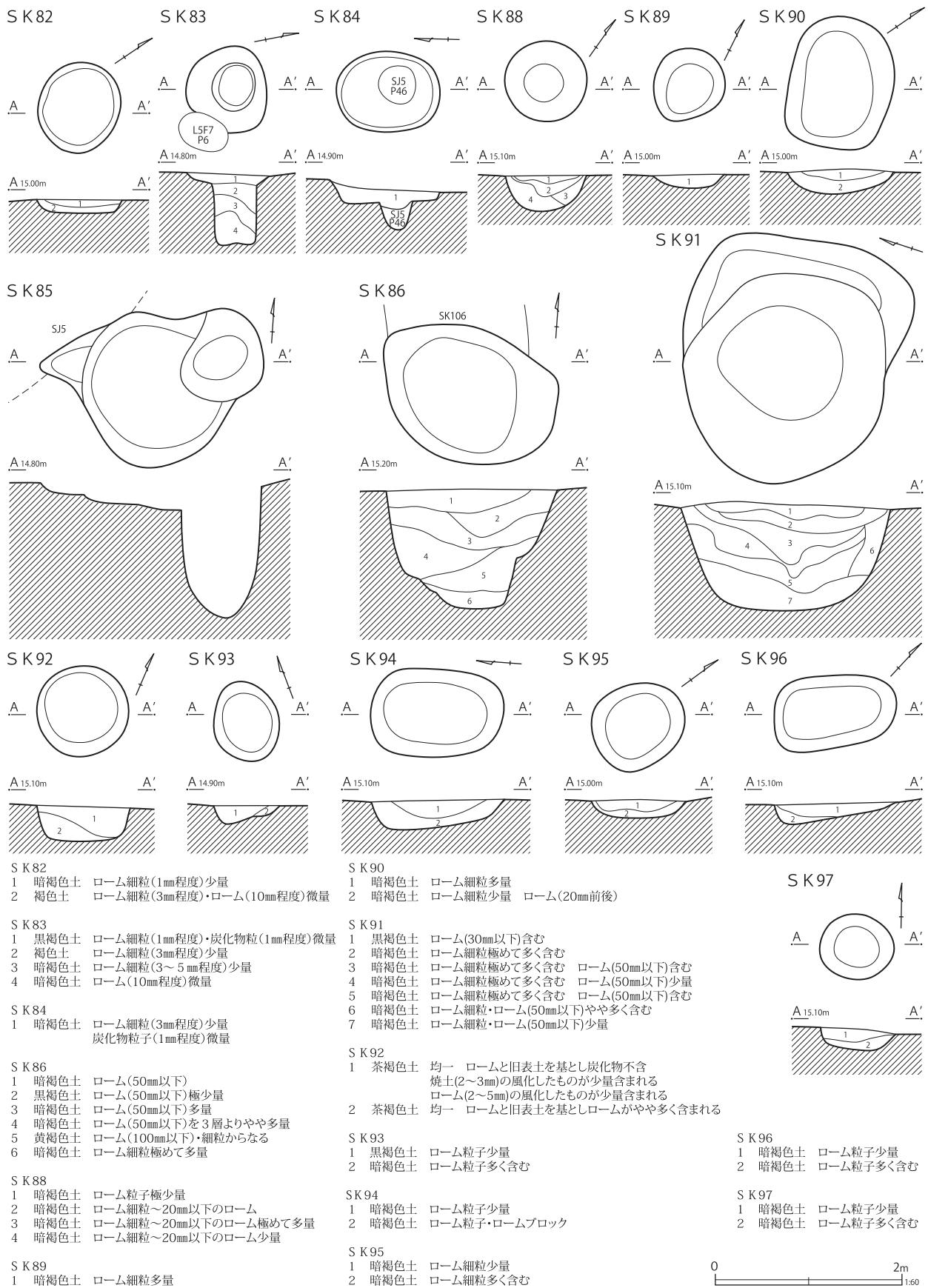
第392図 近世土壤(2)



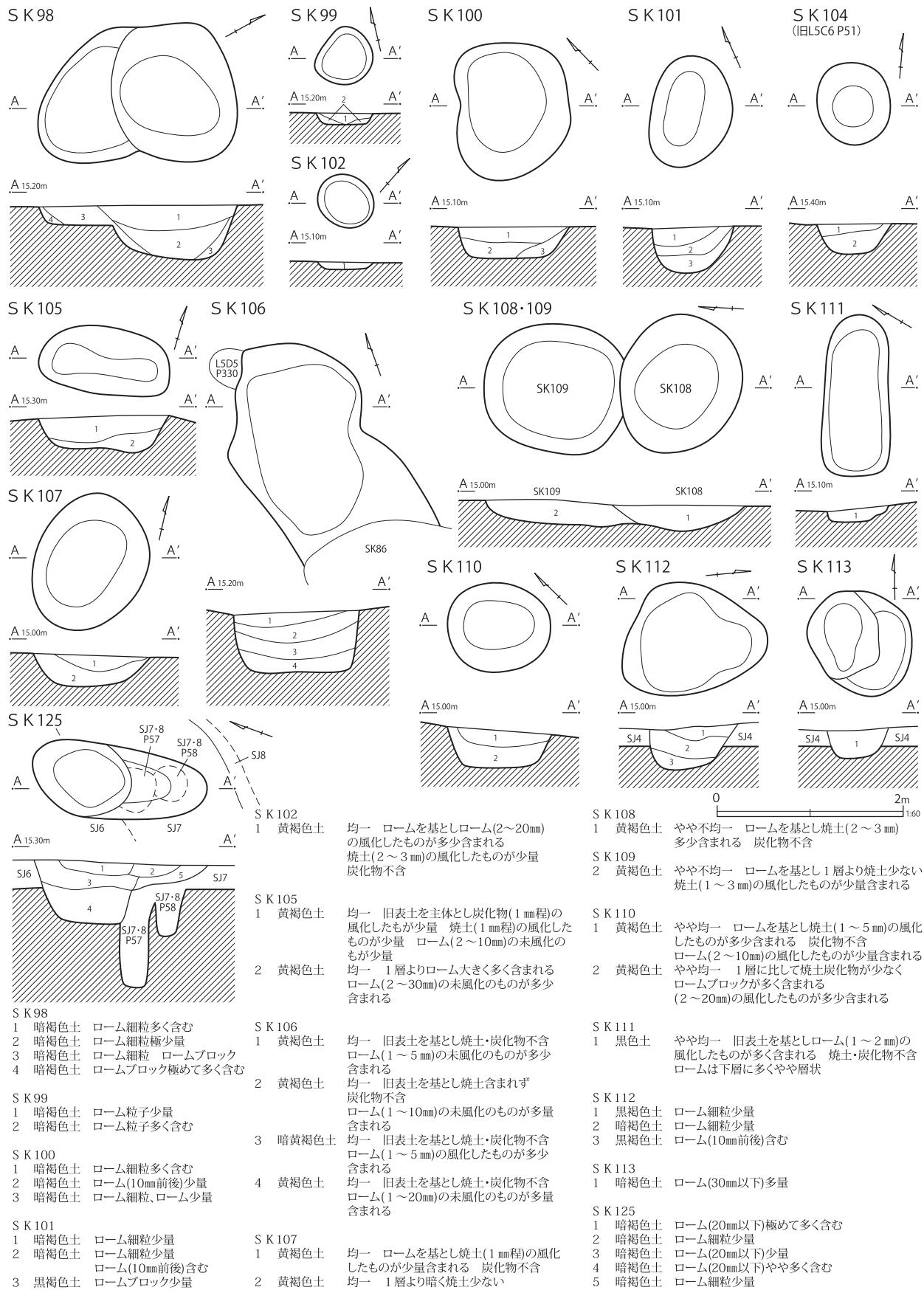
第393図 近世土壌(3)



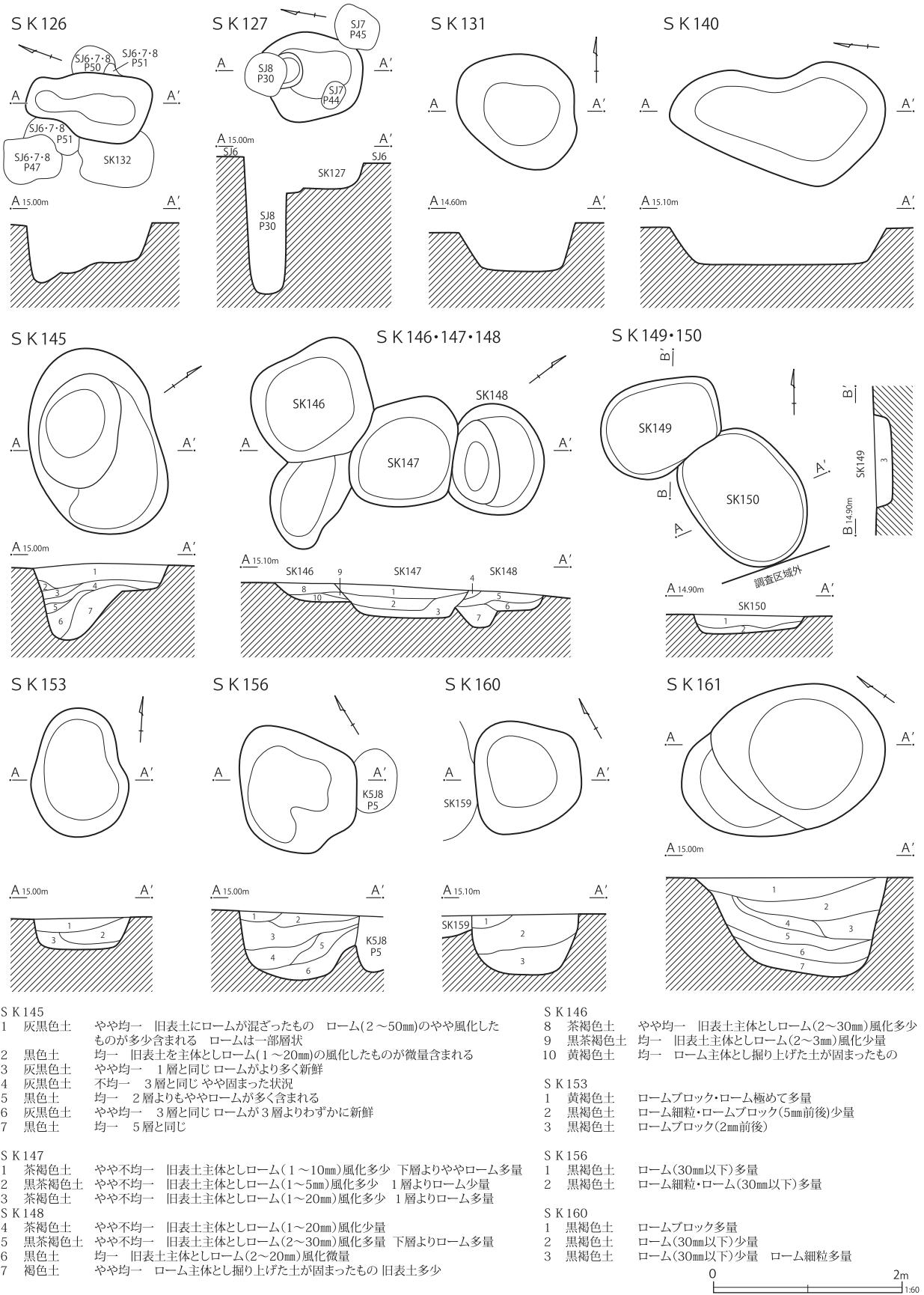
第394図 近世土壤(4)



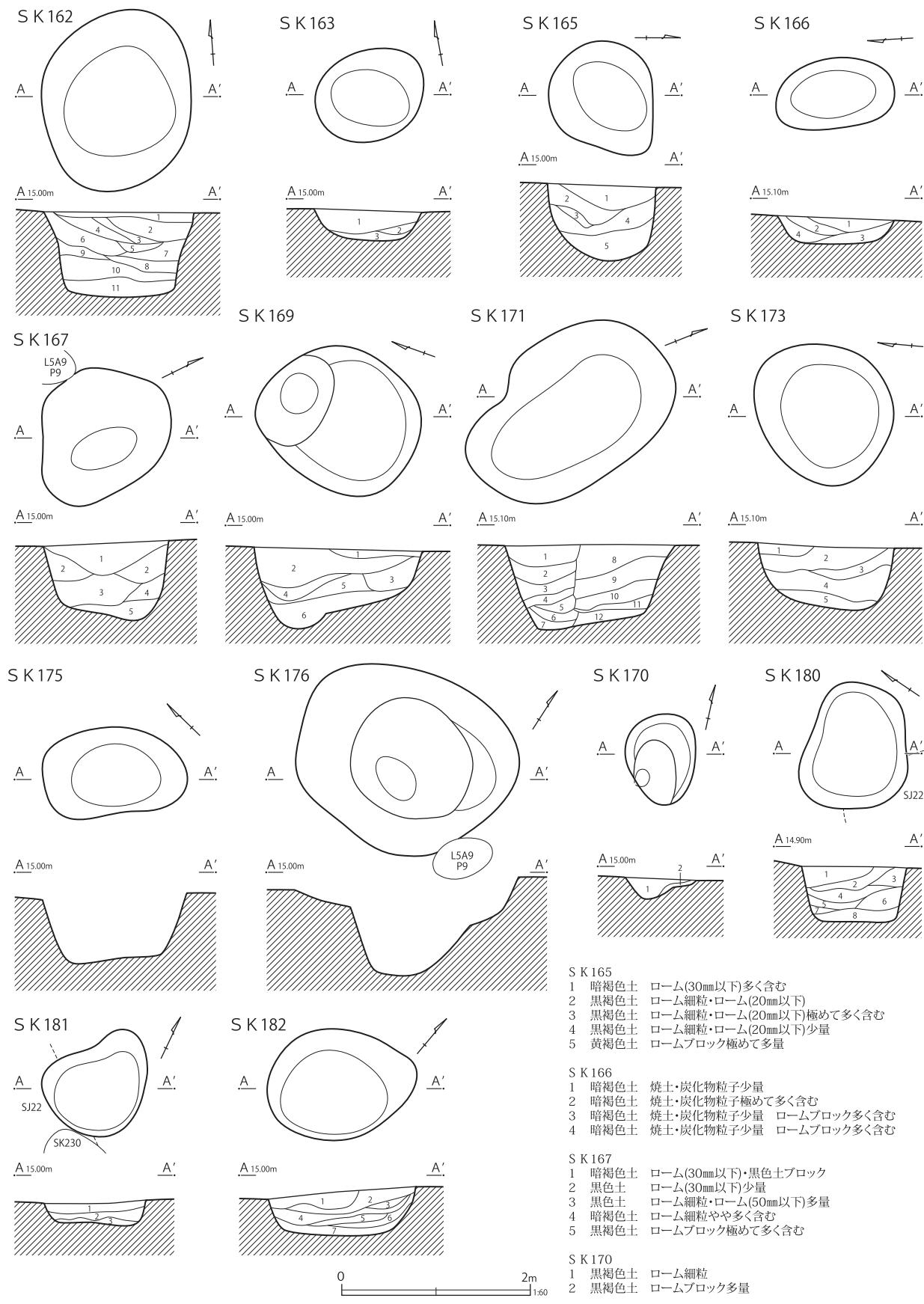
第395図 近世土壌(5)



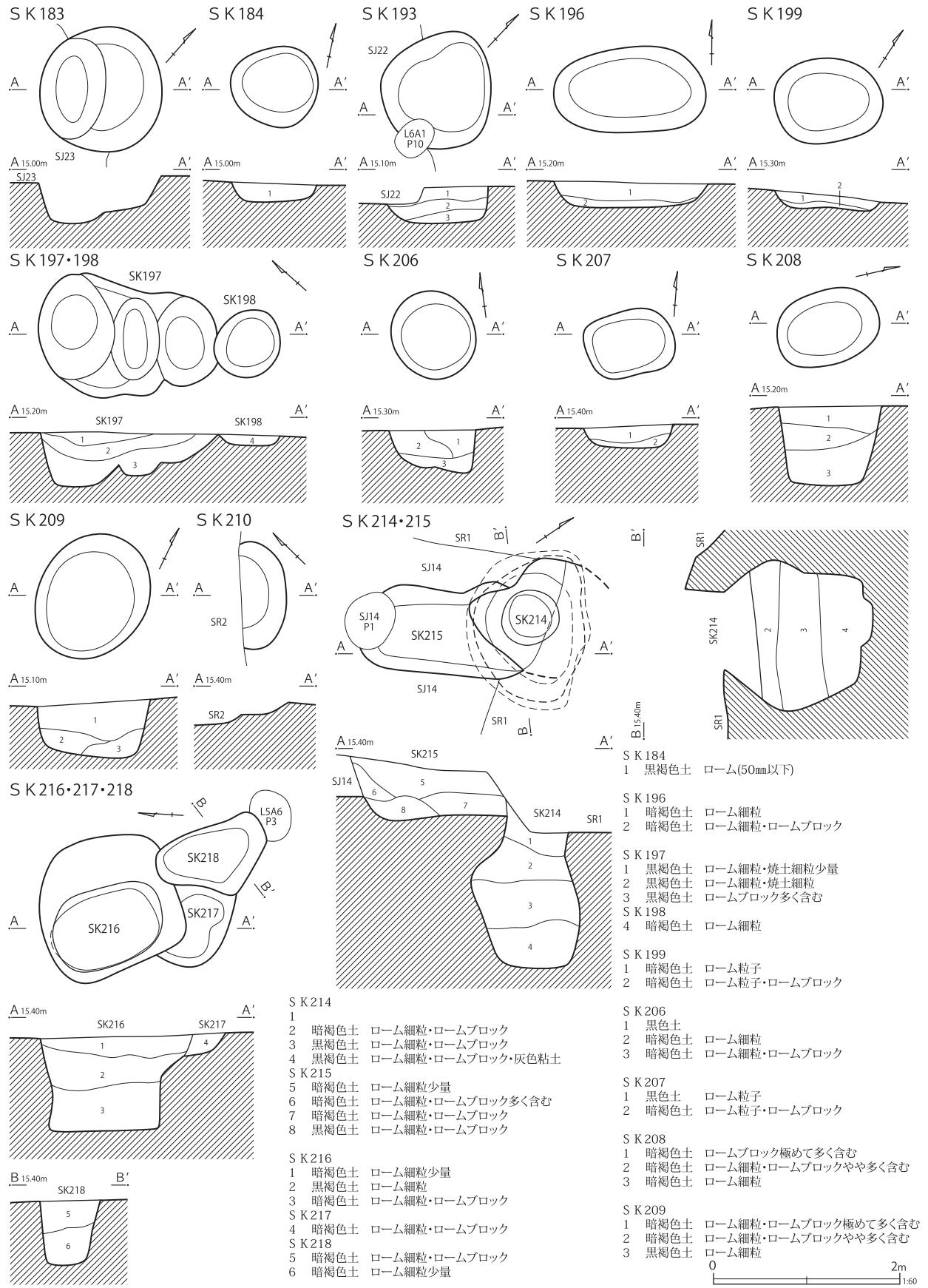
第396図 近世土壤(6)



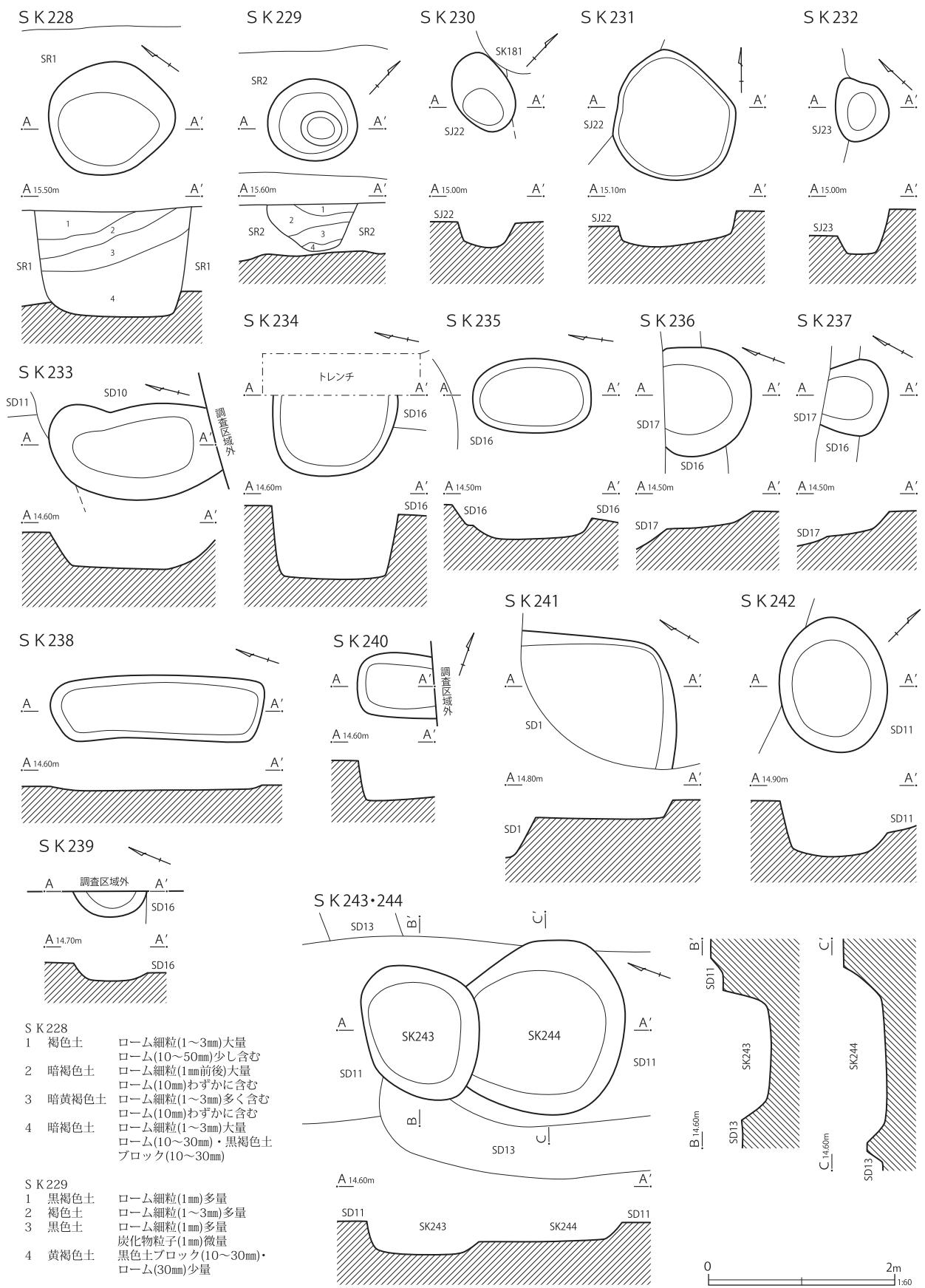
第397図 近世土壙(7)



第398図 近世土壤(8)



第399図 近世土壤(9)



第400図 近世土壤(10)

(3) ピット

大木戸遺跡第13地点からは、ピットを183基検出した。第401図にピットの全体図、第383～388図に拡大図、第72表に一覧表を示した。これらの大半は近世の遺物を出土しないが、覆土の状態から推して、近世の所産であると判断した。

平面的な分布傾向として、第1号掘立柱建物跡

を中心とした半径10m程度の範囲と、第18号住居跡を中心とした半径10～20mの範囲に集中している。

原則としてグリッド毎に番号を付したが、L 5-B～C 7～8、L 5-D～E 4～5、L 5-E～F 5～7グリッドは、各範囲で通し番号とした。



第401図 ピット(全体図)

第72表 ピット一覧表

名称	番号	長径/cm	深さ/cm
K5-J8	1	64	34
	2	62	75
	3	40	33
	4	66	17
	5	66	59
	6	69	43
	7	30	49
	8	54	11
	9	44	8
	10	51	9
K5-J9	11	35	25
	1	51	33
L5-A6	1	52	20
	2	46	-
	3	37	55
L5-A7	1	56	14
	2	58	53
	3	40	15
	4	36	37
	5	38	11
	6	67	10
L5-A8	1	48	10
	2	46	18
	3	30	17
	4	63	76
	5	51	23
	6	46	9
	7	56	13
	8	(30)	15
	9	37	26
	10	(36)	8
	11	43	4
	12	36	10
	13	36	14
	14	34	10
	15	34	13
	16	33	19
	17	32	11
	18	34	6
	19	23	22
	20	37	6
	21	38	5
	22	38	4
	23	20	7
	24	(27)	21
	25	33	12
	26	31	35
	27	29	13
	28	30	11
	29	26	11
	30	45	45
L5-A9	1	45	21
	2	46	-
	3	48	-
	4	39	27
	5	28	29
	6	34	36
	7	32	27
	8	28	20
	9	61	18
	10	51	-
L5-A9	11	27	15
	12	29	-
	13	34	28
	14	36	13
	15	43	-
	16	36	36
	17	(23)	-
	18	30	13
	19	33	9
	20	37	62
L5-A1	21	39	-
	22	29	15
	23	32	16
	24	47	12
	25	37	-
	26	40	21
	10	48	23
	15	58	-
	16	59	13
	17	86	-
L6-A2	18	52	36
	1	56	26
L5-B5	1	41	39
	12	(65)	85
L5-B6	13	101	59
	37	53	22
	38	63	28
	39	67	75
	44	39	40
	45	(36)	77
	46	63	50
	61	(51)	41
	76	(48)	53
	77	(47)	47
	115	44	-
	116	(60)	72
	117	70	84
	119	(56)	28
	110	36	100
	1	41	22
L5-B8	14	28	26
	15	52	13
	16	74	14
	17	38	14
	18	36	31
	1	53	18
L5-B9	2	(33)	41
	3	(58)	37
	4	28	30
	5	38	27
	6	30	11
	7	37	22
L5-B10	8	30	26
	9	45	20
	10	30	18
	11	42	32
	22	(54)	-
L5-C6	23	61	42
	24	(40)	-
	25	56	64
	52	40	20
L5-C6	53	35	18
	62	(46)	-
	130	41	17
	131	38	17
L5-C7	133	39	9
	134	50	22
	135	62	33
	136	19	54
L5-C8	1	49	23
	2	75	44
	3	42	54
	4	45	45
L5-C9	30	35	-
	31	34	12
L5-D3	150	52	72
	151	36	18
	152	26	16
	153	25	57
L5-D5	330	(40)	22
	1	38	29
L5-D7	2	52	11
	1	48	48
	2	40	39
	3	30	24
L5-D9	33	43	37
	34	36	36
	36	48	25
	37	35	-
	38	44	70
	39	50	43
	40	(28)	33
L5-D10	41	35	20
	42	62	46
	43	66	64
	44	37	29
	45	33	29
	46	43	31
	47	32	44
L5-E6	22	47	10
	23	31	12
	24	38	10
	131	50	6
L5-E7	1	41	28
	1	40	23
L5-F5	3	48	47
	6	38	12
	18	42	66
	1	42	-
L5-F6	48	25	8
	49	67	98
	97	34	22
	98	35	46
L5-F7	1	44	70
	2	50	28
	3	42	27
	4	74	69
	5	32	25
	6	54	25
	7	50	25
	8	28	22
L5-G7	1	48	46
	2	(47)	-

(4) グリッド出土陶磁器

出土した陶磁器のうち、図化できるものを第402～404図に掲載した。

1～25は碗である。1は肥前系色絵碗で、時期は19世紀前半である。2は信楽灰釉碗の口縁部破片で、19世紀である。3は肥前陶胎染付碗で、透明釉が厚くかかる。4は信楽系灰釉碗で、19世紀前半である。5は肥前系染付碗の口縁部破片で、外面の文様はこんにゃく印判による。6は肥前系京焼風色絵碗の口縁部破片である。7は信楽系灰釉碗である。時期は19世紀である。8は肥前系京焼風色絵碗である。9、10は肥前系染付碗の口縁部破片で、くらわんか系の碗である。時期は18世紀後半と考えられる。11は瀬戸美濃灰釉呉須絵碗である。時期は18世紀である。12は信楽系灰釉碗である。19世紀前半と考えられる。13は肥前系染付平筒碗である。高台部に砂目が付着する。時期は18世紀末から19世紀初頭である。14は瀬戸美濃灰釉呉須絵碗である。19世紀と考えられる。15、16は信楽系灰釉碗である。19世紀前半である。17～25は肥前系二重網目文の染付碗である。17、19、20は口縁部破片である。18は見込に菊花文、高台内に裏銘が書かれている。18、21～25は高台に少量

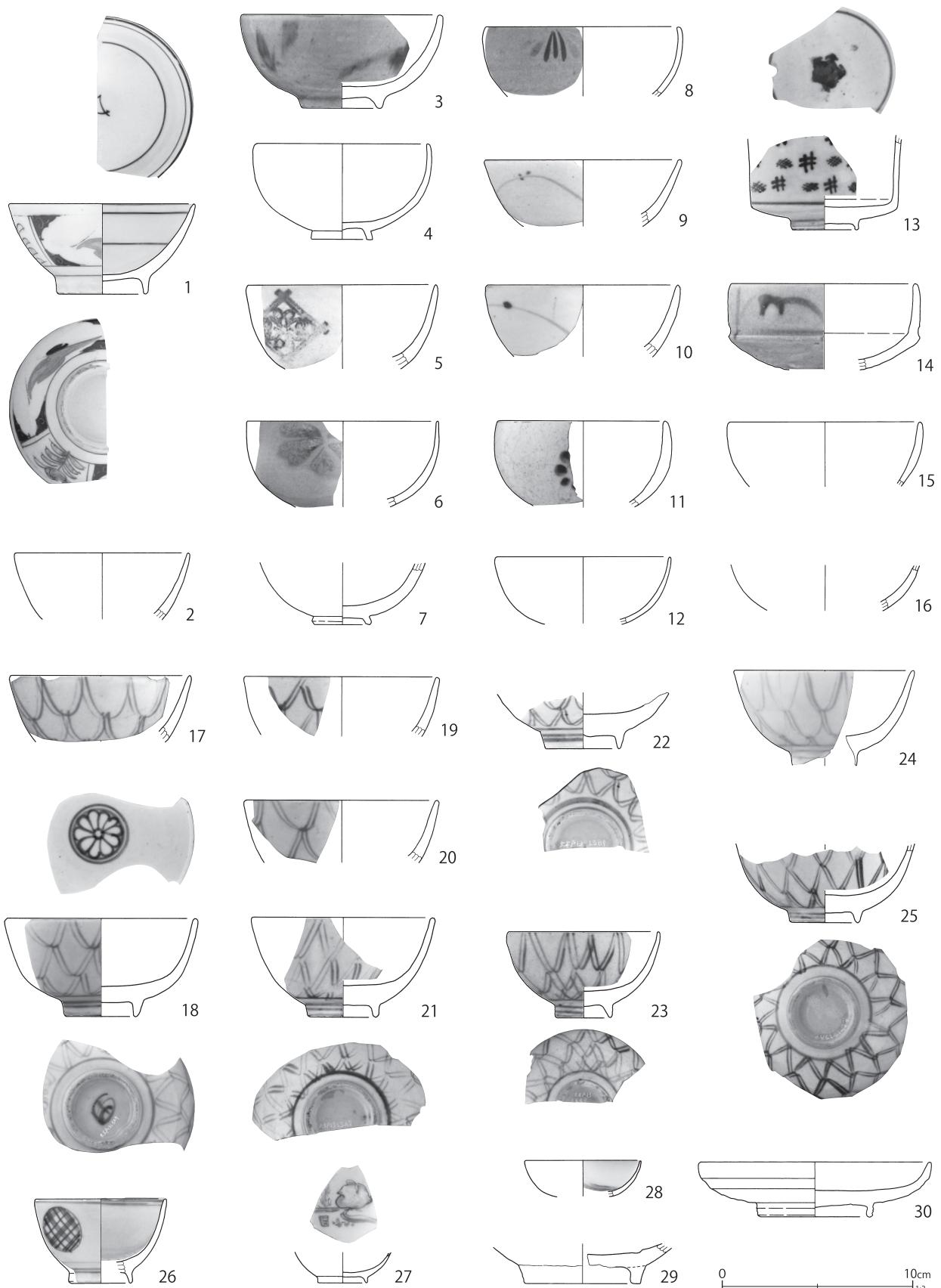
の砂目が見られる。時期はいずれも18世紀後半と考えられる。26は肥前系染付坏である。18世紀末～19世紀初頭と考えられる。27は肥前系色絵酒杯である。非常に薄手の卵殻系の坏である。内面に千鳥と思われる鳥が描かれている。19世紀である。28は肥前系卵殻系染付酒杯である。19世紀である。29は瀬戸美濃系菊花文皿である。時期は17世紀前葉と考えられる。30は瀬戸美濃灰釉鉄絵皿(摺絵)である。見込に胎土目痕が残る。時期は17世紀後半である。31は信楽系灰釉猪口である。19世紀である。32は肥前系染付猪口で、18世紀末から19世紀初頭と考えられる。33、34は瀬戸美濃灰釉・鉄釉掛け分け火容れである。時期は19世紀である。35、36は瀬戸美濃灰釉香炉である。時期は18世紀末から19世紀初頭である。37は在地産土師器皿である。17世紀と考えられる。38は瀬戸美濃灯明皿である。18世紀末から19世紀初頭である。39は信楽灰釉灯明皿である。時期は19世紀である。40は灯明皿か、外面に煤が付着する。底部回転糸切り。17世紀前半と考えられる。41は信楽系灰釉灯明皿である。19世紀である。42は瀬戸美濃系鉄釉灯明受皿である。時期は18世紀末から19世紀前半であ

第73表 グリッド出土陶磁器観察表(1)(第402～404図)

番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.5)	4.7	(4.8)	40	良好	灰白	肥前系 色絵碗 19c前半 L5-B10	163-1
2	陶器	碗	(9.0)	[3.5]	—	30	良好	灰白	信楽 灰釉碗 19c L5-A9	163-2
3	陶器	碗	(10.2)	4.9	4.3	50	良好	灰白	肥前 染付碗(陶胎染付) 表採	163-3
4	陶器	碗	(8.7)	5.0	3.2	50	良好	灰白	信楽系 灰釉碗 19c前半 L5-A9	163-4
5	磁器	碗	(9.8)	[4.4]	—	20	良好	灰白	肥前系 染付碗(こんにゃく印判) 18c前半 L5-A9	163-5
6	陶器	碗	(10.0)	[4.5]	—	15	良好	灰白	肥前系 色絵碗(京焼風陶器) L5-A9	163-6
7	陶器	碗	—	[3.2]	2.9	30	良好	にぶい黄橙	信楽 灰釉碗 19c L5-B9	163-7
8	陶器	碗	(10.0)	[3.6]	—	15	良好	灰白	肥前系 色絵碗(京焼風陶器) L5-B9	163-8
9	磁器	碗	(10.2)	[3.5]	—	20	良好	灰白	肥前系 染付碗(くらわんか系) 18c後半 L5-A9	163-9
10	磁器	碗	(10.0)	[3.7]	—	15	良好	灰白	肥前系 染付碗(くらわんか系) 18c後半 L5-A9	163-10
11	陶器	碗	(8.6)	[4.4]	—	30	良好	淡黄	瀬戸美濃 灰釉呉須絵碗 18c L5-B9	163-11
12	陶器	碗	(9.0)	[3.5]	—	10	良好	灰白	信楽系 灰釉碗 19c前半 L5-A9	163-12
13	磁器	碗	—	[4.9]	3.6	30	良好	灰白	肥前系 染付平筒碗 18c末～19c初 L5-A9	163-13
14	陶器	碗	(9.5)	[4.5]	—	25	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉呉須絵碗 19c K6-J1	163-14
15	陶器	碗	(10.0)	[3.4]	—	15	良好	淡黄	信楽系 灰釉碗 19c前半 L5-A9	163-15
16	陶器	碗	—	[2.4]	—	15	良好	灰白	信楽系 灰釉碗 19c前半 L5-A9	163-16
17	磁器	碗	(9.4)	[3.4]	—	30	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-B9	163-17

第74表 グリッド出土陶磁器観察表(2)(第402~404図)

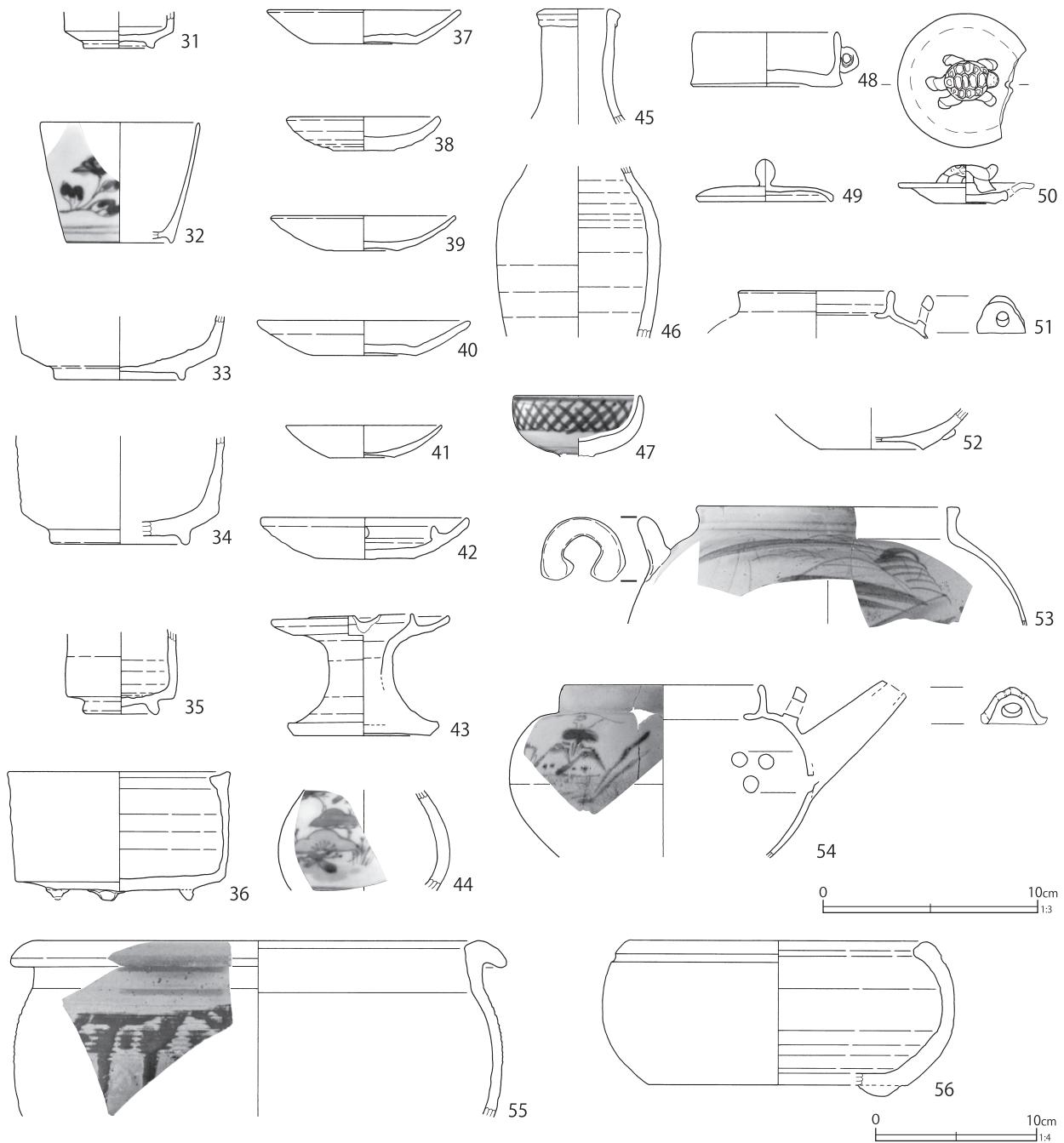
番号	種別	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	残存	焼成	色調	備考	図版
18	磁器	碗	(9.8)	5.1	3.9	25	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-18
19	磁器	碗	(10.0)	[3.1]	—	5	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-19
20	磁器	碗	(10.0)	[3.2]	—	15	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-20
21	磁器	碗	(9.4)	5.2	3.7	30	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-21
22	磁器	碗	—	[2.9]	3.9	40	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-B9	163-22
23	磁器	碗	(7.8)	4.5	(3.0)	25	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-23
24	磁器	碗	(9.4)	[5.0]	—	10	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-24
25	磁器	碗	—	[4.1]	3.6	85	良好	灰白	肥前系 染付碗(二重網目文) 18c後半 L5-A9	163-25
26	磁器	坏	(6.8)	4.4	(5.3)	30	良好	灰白	肥前系 染付坏 18c末~19c初 L5-A9	163-26
27	磁器	坏	—	[1.6]	2.6	70	良好	灰白	肥前系 色絵酒坏(卵殻系) 19c 3T	163-27
28	磁器	酒坏	(6.0)	[1.9]	—	20	良好	灰白	肥前系 染付酒坏(卵殻系) 19c L5-A9	163-28
29	陶器	皿	—	[2.1]	(6.0)	20	良好	淡黄	瀬戸美濃系 菊花文皿 17c前葉 L5-A9	164-1
30	陶器	皿	(12.0)	2.8	(6.0)	20	良好	暗灰黄	瀬戸美濃 灰釉鉄絵皿(摺絵) 17c後半 L5-B9	164-2
31	陶器	猪口	—	[1.7]	(3.2)	25	良好	灰白	信楽系 灰釉猪口 19c L5-A9	164-3
32	磁器	猪口	(7.2)	5.6	(5.0)	20	良好	灰白	肥前系 染付猪口 18c末~19c初 L5-G8	164-4
33	陶器	火入れ	—	[2.9]	6.0	60	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉・鉄釉掛け分け火入れ 19c L5-B9	164-5
34	陶器	火入れ	—	[5.0]	(6.4)	40	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉・鉄釉掛け分け火入れ 19c L5-A9	164-6
35	陶器	香炉	—	[3.9]	3.5	60	良好	灰白	瀬戸美濃 灰釉香炉 19c L5-B9	164-7
36	陶器	香炉	(10.0)	6.0	6.4	45	良好	褐灰	瀬戸美濃 灰釉香炉 18c末~19c初 L5-B9	164-8
37	陶器	皿	(8.8)	1.6	5.0	30	普通	にぶい黄橙	在地 土師器皿 17c L5-B9	164-9
38	陶器	灯明皿	(6.9)	1.6	(2.8)	30	良好	灰白	瀬戸美濃 鉄釉灯明皿 18c末~19c初 L5-B10	164-10
39	陶器	灯明皿	(8.4)	1.6	3.3	50	良好	にぶい黄橙	信楽 灰釉灯明皿 19c L5-A10	164-11
40	陶器	灯明皿?	(9.6)	1.6	4.8	30	普通	橙	17c前半 L5-B9	164-12
41	陶器	灯明皿	7.1	1.5	3.0	90	良好	灰白	信楽系 灰釉灯明皿 19c L5-A10	164-13
42	陶器	灯明受皿	(9.4)	1.9	(4.6)	30	良好	灰褐	瀬戸美濃系 鉄釉灯明受皿 18c末~19c前半 L5-B8	164-14
43	陶器	灯明受皿	8.2	5.6	6.2	80	良好	灰白	信楽 灰釉灯明受皿 19c L5-A10	164-15
44	陶器	瓶	—	[4.7]	—	20	良好	灰白	肥前系 染付瓶 18c後半 L5-A9	164-16
45	陶器	徳利	2.9	[5.4]	—	70	良好	淡黄	瀬戸美濃 灰釉徳利 18c前半 K5J8	164-17
46	磁器	徳利	—	[8.0]	—	20	良好	灰	瀬戸美濃 灰釉徳利(釘書き) 18c末~19c前半 L5-A9	164-18
47	磁器	仏飯器	5.8	[2.8]	—	100	良好	灰白	肥前系 染付仏飯器 19c前 L6-B2	164-19
48	陶器	餌入	(6.6)	2.5	7.0	70	良好	浅黄	瀬戸美濃 灰釉餌入 19c前 L5-A9	164-20
49	陶器	急須蓋	6.2	2.0	—	90	良好	にぶい黄褐	万古焼? 急須蓋 19c L5-B10	164-21
50	陶器	土瓶蓋	6.2	1.8	2.8	70	良好	灰白	白釉土瓶蓋 19c L5-B10	164-22,23
51	陶器	土瓶	7.0	[2.2]	—	70	良好	灰白	京焼 白釉土瓶 19c L5-B10	164-24
52	陶器	土瓶	—	[1.9]	(4.8)	30	良好	灰黄	相馬大堀 緑釉土瓶 19c前半 L5-A9	164-25
53	陶器	土瓶	(12.0)	[5.5]	—	60	良好	にぶい黄橙	益子系 三彩土瓶 19c中 L6-B1	164-26
54	陶器	土瓶	9.2	[8.0]	—	50	良好	灰白	益子系 吴須絵山水土瓶 19c中 L5-A10	164-27
55	陶器	甕	(27.2)	[10.8]	—	5	良好	灰黄褐	瀬戸美濃 鉄釉甕 18c後半~19c前半 L6-B2	164-28
56	陶器	手焙り	(18.2)	9.7	(12.8)	20	普通	にぶい黄橙	在地系 手焙り 19c L5-A8~9	165-1
57	磁器	鉢	(16.5)	6.6	10.0	40	良好	灰白	肥前系 染付鉢 底に墨書あり 19c前半~中葉 L5-B10	165-2,3
58	陶器	鉢	—	[3.3]	(7.0)	25	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃 色絵鉢 19c L5-A10	165-4
59	陶器	甕	(20.0)	[6.1]	—	5	普通	灰褐	中世甕 14cか L5-c5~6	165-5
60	陶器	擂鉢	(30.4)	[5.8]	—	5	普通	橙	L5-A9	165-6
61	陶器	擂鉢	(30.4)	[5.3]	—	5	良好	褐灰	中世擂鉢 砕石転用か 14cか L5-F6	165-7
62	陶器	擂鉢	(36.0)	[6.3]	—	5	良好	にぶい赤褐	瀬戸美濃 鉄釉擂鉢 17c前半 L5-F10	165-8
63	陶器	擂鉢	(40.0)	[3.7]	—	5	良好	にぶい赤褐	信楽 擂鉢 17c SJ18	165-9
64	瓦質陶器	焙烙	(29.6)	[3.2]	(30.0)	5	普通	にぶい黄橙	L6-B2	165-10
65	瓦質陶器	焙烙	(32.0)	[3.8]	(32.0)	15	普通	淡黄	L5-A9・表採	165-11
66	瓦質陶器	焙烙	(36.4)	[4.8]	(32.0)	5	普通	灰黄褐	在地系 焙烙 18c末~19c前半 L5-A9	165-12
67	瓦質陶器	焙烙	(36.2)	3.0	(33.4)	5	普通	にぶい黄橙	L5-A9	165-13
68	瓦質陶器	焙烙	(33.6)	5.2	(30.0)	10	普通	にぶい黄橙	在地系 焙烙 18c末~19c前半 L5-A9	165-14
69	瓦質陶器	焙烙	(40.0)	5.2	(38.4)	5	普通	灰黄褐	在地系 焙烙 18c末~19c前半 L5-A9	165-15
70	瓦質陶器	焙烙	(42.6)	5.5	(40.0)	5	普通	にぶい黄橙	在地系 焙烙 18c末~19c前半 L5-B9	165-16



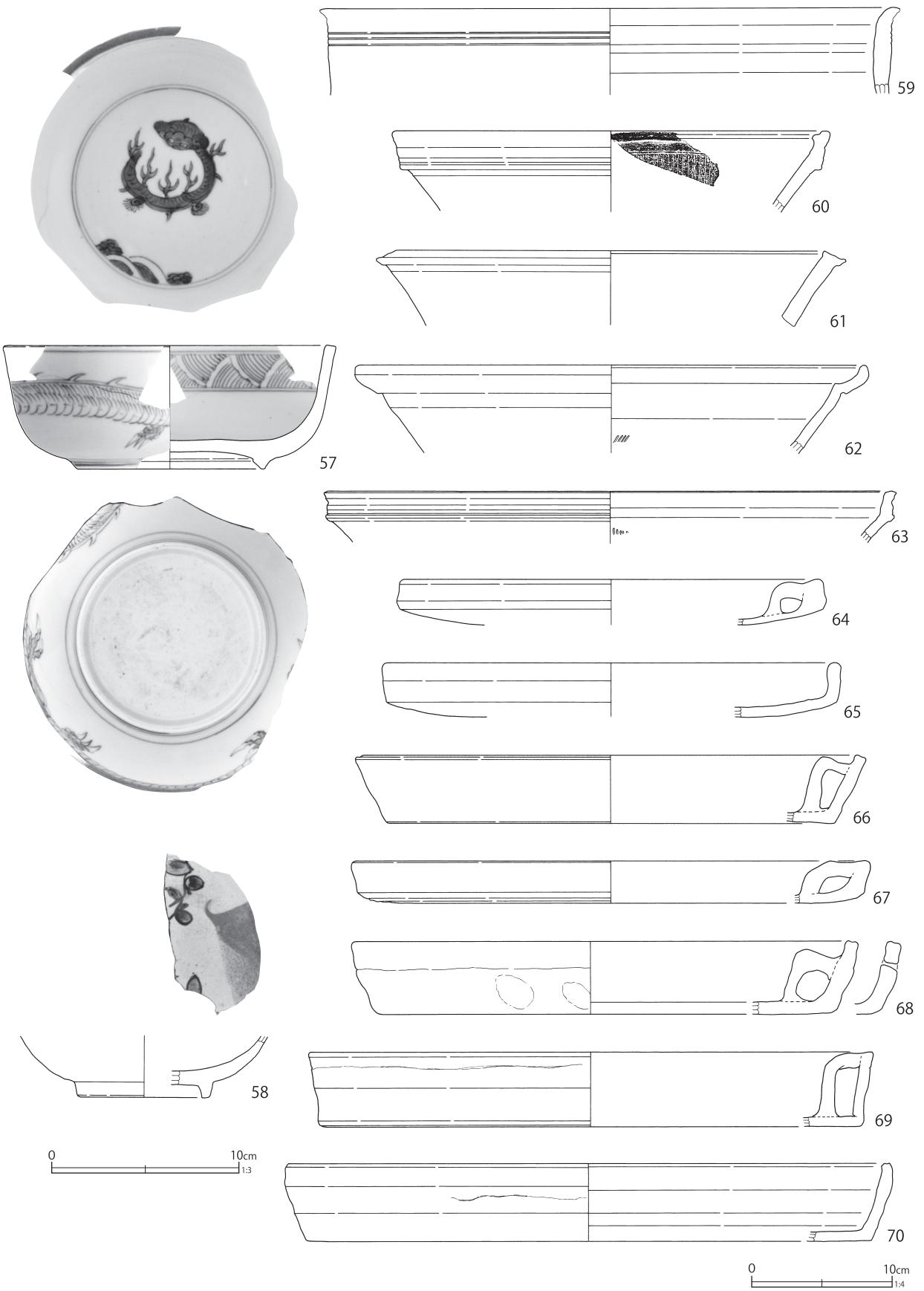
第402図 グリッド出土陶磁器(1)

る。43は信楽灯明受皿である。19世紀である。44は肥前系染付瓶である。18世紀後半である。45は瀬戸美濃灰釉徳利の口縁部である。18世紀前半である。46は瀬戸美濃灰釉徳利で、18世紀末から19世紀前半である。47は肥前系染付仏飯器である。19世紀前半である。48は瀬戸美濃灰釉餌入れである。時期は19世紀前半である。49は万古焼の急須蓋である。19世紀である。50は白釉土瓶蓋で、亀

型のツマミが付く。51の土瓶本体の蓋と考えられる。時期は19世紀である。52は相馬大堀綠釉土瓶の底部である。19世紀前半である。53は益子系三彩土瓶である。19世紀中頃と考えられる。54は益子系呂須絵山水土瓶である。19世紀中頃である。55は瀬戸美濃鉄釉甕である。18世紀後半から19世紀前半と考えられる。56は在地系手焙りである。時期は19世紀である。57は肥前系染付鉢で、底部



第403図 グリッド出土陶磁器(2)



第404図 グリッド出土陶磁器(3)

内面に墨書きが見えるが読み取れない。時期は19世紀前半から中葉である。58は瀬戸美濃色絵鉢である。19世紀である。59は中世の常滑甕である。14世紀代と考えられる。61は中世擂鉢である。砥石転用かと思われる。時期は14世紀か。62は瀬戸美濃鉄釉擂鉢である。時期は17世紀前半と考えられる。63は信楽擂鉢である。17世紀である。64~70

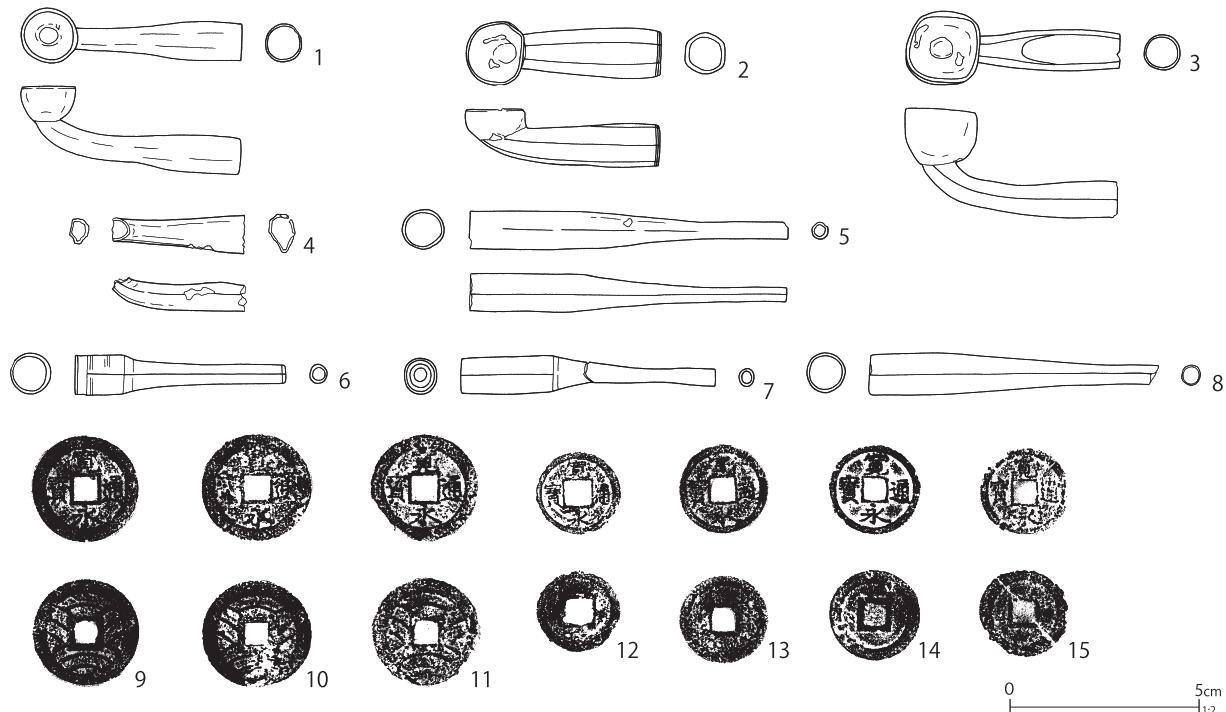
は焙烙である。66、68~70は在地系で、18世紀末から19世紀前半である。

(5) グリッド出土金属器 (第405図)

煙管8点、銭7枚が出土した。1~4は雁首、5~8は吸口である。7の吸口には羅字の破片が残る。形態から18世紀から19世紀と考えられる。9~15は寛永通宝である。

第75表 グリッド出土金属器観察表(第405図)

番号	種別	器種	長さ・径/cm	火皿径/cm	小口径/cm	口付径/cm	重さ/g	備考	図版
1	金属器	煙管	5.8	1.4	0.9	—	7.1	L5-B9	165-17
2	金属器	煙管	5.1	1.6	1.1	—	9.8	L5-A8	165-18
3	金属器	煙管	5.7	1.9	0.9	—	7.0	L5-B9	165-19
4	金属器	煙管	(3.5)	—	(1.0)	—	1.9	表土	165-20
5	金属器	煙管	8.4	—	1.0	0.4	6.9	表土	165-21
6	金属器	煙管	5.6	—	1.0	0.5	4.7	表土	165-22
7	金属器	煙管	6.7	—	0.9	0.4	4.7	L5-B9	165-23
8	金属器	煙管	7.6	—	1.0	0.5	8.3	L5-B9	165-24
9	銭	寛永通宝	2.8	—	—	—	4.4	四文銭 L5-B9	165-25
10	銭	寛永通宝	2.8	—	—	—	4.5	四文銭 L5-B9	165-26
11	銭	寛永通宝	2.8	—	—	—	3.8	四文銭 L5-A9	165-27
12	銭	寛永通宝	2.2	—	—	—	1.6	L6-B1	165-28
13	銭	寛永通宝	2.3	—	—	—	1.9		165-29
14	銭	寛永通宝	2.3	—	—	—	2.4		165-30
15	銭	寛永通宝	2.3	—	—	—	1.7		165-31



第405図 グリッド出土金属器

(6) グリッド出土石製品

1 火打石、砥石 (第406図)

近世の石製品類をまとめて報告する。

1～3は火打石である。いずれも稜線は潰され、鉄分が付着している。

1は透明から白色の玉隨製であり、再生に伴って剥離された破片である。いわゆる北富田産の火打石と同様の材質である。2は灰色の玉隨あるいはチャート製である。稜線の再生を繰り返し、最終的に廃棄されたものである。1に比べると稜線の潰れ方は弱い。3は灰黒色のチャート製であり、あまり見かけない色調の石材が使用されている。稜線は摩耗しているが、未だ再生可能な大きさのものである。赤色化し細かくひび割れた状況が部分的に認められることから、一部分が被熱している可能性が指摘できる。日常生活で一般的に使用されていた大きさである。

4～12は砥石である。5、6、10、12は程度の違いはあるが、表面は黒褐色に変色しており、被熱した可能性がある。

4は緑色岩製で縁辺を中心に切り出し形に整形している。表面は極めて平滑で光沢が見られる。裏面は部分的に平滑である。表面と右側縁が連続的に使用されていたように見える。左側縁も上半では剥離の痕跡が顕著である。一方、下半では凸凹が見られるものの僅かに平滑であり、使用頻度

は低いが、多少の研磨が行われた可能性が高い。基部は、剥離後に調整された痕跡は認められない。当該遺物は古い可能性も考えられる。5は安山岩製で裏面のみ砥面として使用されている。他の面は多少凸凹しており、平行した条線が見られ、一部は緩やかに曲線的である。この条線は、切り出しあるいは成形時の鋸目であろう。使用された面は図の裏面であり、平滑で、不安定な条線が左上から右下にかけて僅かに認められる。上下端は切断面であり、再調整されていない。6は凝灰岩製で上端が欠損し、下端は破損後にも使用されている。裏面は、上端側で切断面側に傾斜した面が見られ、下端側は稜線が見られる。左右両側面には、平行した条線が認められる。7は凝灰岩製で上端の全部と下端の一部が欠損している。表裏面と両側面に刃物痕と考えられる鋭利な溝と、使用に伴う擦痕が多数見られる。上端部の割れ口縁辺が僅かに摩耗している。下端部には鑿痕が見られる。

8は下半を欠損している。表裏面両側縁が使用に伴い平滑化している。裏面には、小さな刃物痕が多数見られる。上端面には鋸目が見られ、上端の側面も使用されている。

9はほぼ完形で、下端を除く全面が使用により平滑化している。上下端にも擦痕がみられ、砥面として使用されている。表面では、左上から右下

第76表 グリッド出土石製品観察表(第406図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
1	火打石	玉髓	1.75	2.6	1.3	4.8		166-10
2	火打石	玉髓	2.1	2.9	2.0	16.5	表採	166-11
3	火打石	チャート	4.0	4.8	2.2	47.9	L5-C7	166-13
4	砥石	緑色岩	18.1	4.8	1.9	226.1	SR3 南溝 北溝	166-1
5	砥石	凝灰岩	[4.3]	2.5	2.2	32.2	L5-E10 被熱	166-2
6	砥石	凝灰岩	[3.2]	3.9	2.6	49.9	SK166 被熱	166-3
7	砥石	凝灰岩	6.3	2.6	2.3	49.7	L5-B7	166-4
8	砥石	凝灰岩	[5.0]	2.9	2.5	47.5	L5-B10	166-5
9	砥石	凝灰岩	[6.3]	2.4	2.1	52.7	L5-B10	166-6
10	砥石	凝灰岩	[5.8]	3.7	2.7	51.6	SD11 被熱	166-7
11	砥石	砂岩	[9.0]	3.5	2.9	138.5	L5-A9	166-8
12	砥石	凝灰岩	[8.4]	3.6	3.0	115.5	被熱	166-9

にかけて使用に伴う形状の捻れが僅かに見られる。

10は上下端を欠損した、砥石の上半部分である。裏面と両側面は使用に伴い平滑化し、表面には横位の刃物痕が多数見られる。

11は表裏面と左右両側面が使用により平滑化している。砂岩製である。下端は成形時のままである。左側縁は剥落している。

12は下端を欠損している。表面、左右両側面、上端面に鋸目が見られる。裏面は平滑化している。

5～10、12は、北関東地方で中世から近世にかけてごく普通に見られる、いわゆる砥沢産の石材と考えられている砥石である。8は僅かに桃色を帯び、目が細かい。9のみ当該地域ではあまり見られない凝灰岩質の砥石である。



第406図 グリッド出土石製品

V 自然科学分析

1. ガラス小玉の自然科学的調査

はじめに

大木戸遺跡の発掘調査において古墳時代初頭の方形周溝墓よりガラス小玉が出土している。今回、これらのガラス小玉について製作技法の推定および化学組成の非破壊分析をおこなった。以下、その結果について報告する。

1 資料と方法

調査対象とした資料は、第2号方形周溝墓出土ガラス小玉5点（第325図1～5）、第3号方形周溝墓出土ガラス小玉32点（第359図1～32）、第4号方形周溝墓出土ガラス小玉2点（第366図3、4）である。これらの詳細は第77表（文末）に示した。これらの資料について以下の方法で観察および分析調査をおこなった。

観察は、肉眼および実体顕微鏡下でおこなった。顕微鏡観察では、落射光および透過光を用いて内部に含まれる気泡の配列や形状に着目した。さらに、孔の形状や気泡の配列についての詳細な情報を得るために、コンピューテッドラジオグラフィ法（Computed Radiography法：以下、CR法）による調査もあわせておこなった。CR法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート（IP）を検出系に利用する方法である。使用した装置は、マイクロフォーカスX線拡大撮像システム（富士フィルム社製μFX-1000）、イメージングアナライザ（富士フィルム社製BAS-5000）である。IPにはBAS-SR2025を用いた。

基礎ガラスおよび着色剤の調査においては、蛍光X線分析法による化学組成の非破壊分析をおこなった。励起用X線源はMo管球、管電圧は、ファンダメンタルパラメーター法（理論補正法、以下FP法とよぶ）を用いた定量分析では20kVに

設定し、20keV以上のスペクトルを検出する場合には、50 kVに設定した。管電流は100 μA、X線照射径は112 μm、計数時間は300秒とした。なお、測定は真空中で実施した。測定結果は、ガラス標準試料（CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620）をもちいて補正したFP法により規格化し、酸化物重量百分率で表した。

さらに、基礎ガラスの判別には上述のCR法とAR（Auto Radiography）法を併用した。CR法はアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスの判別に用いた。アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の方がはるかに密度が高く、X線吸収係数も大きい。したがって、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラス同じ条件下でX線透過撮影すると、アルカリ珪酸塩ガラスよりも鉛珪酸塩ガラスのほうが、はるかにX線の吸収が大きくなる。その結果、ポジ画像では鉛珪酸塩ガラスがより濃い画像として得られることになる。本調査では、比較資料として、ガラス標準資料NIST1412（比重2.9、厚さ3.2mm）およびNIST620（比重2.3、厚さ3.0mm）を同時に撮影した。

AR法はカリガラスの判別を目的として実施した。前節で述べたように、IPは放射線に対して極めて感度がよく、微弱な放射線でも長時間暴露することで検出可能である。AR法は、物質から放射される放射線をフィルムやIPに記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。カリガラスは一般に酸化カリウムを18%前後含有し、⁴⁰Kに由来する放射線（ベータ線）を放射している。したがって、カリガラスとソーダ石灰ガラスをIP上に同じ時間だけ暴露した場合、得られた画像の中でより濃いものを、カリガラスとして識別することができる（肥塚・

脇谷2003)。調査にあたって、資料を直接IP上に置き、外部からの放射線を遮断するため鉛箱内に設置した。さらに鉛からの放射線を遮断するため、IPの周辺を銅版で囲った。使用したIPはBAS-SR2025、暴露時間は168時間である。また、比較試料として標準試料であるJB-1a、JG-1a、BCR126Aを同時に暴露した。これらのK₂O含有量はそれぞれ1.4%、4.04%、10.0%である。

III 結果と考察

(1) 製作技法

大木戸遺跡出土のガラス小玉は、第359図29以外はいずれも孔壁面が比較的平滑で、孔と平行に並んだ気泡が特徴的に観察された(写真1)。軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を作り、それを分割して小玉を作ったと推定できる。

ガラス小玉の端面は丸みを帯びていることから、分割後に加熱整形したと考えられる。既往研究で「管切り法」(朝比奈・小田1954など)や「引き伸ばし法」(大賀2002)と呼ばれる製作技法に相当する。ここでは引き伸ばし法と呼ぶ

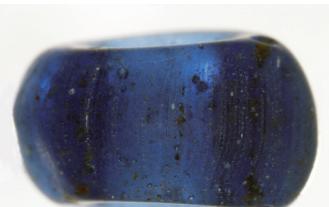


写真1 (第359図24) (透過光)



写真2 (第359図29) (落射光)



写真3 (第359図29) (透過光)

第407図 ガラス小玉写真

こととする。

第359図29は開孔部の大きさが両端面で異なっている(写真2)。ここでは便宜的に開孔部の直径が大きい方を上端面、小さい方を下端面とする。下端面はなめらかな曲線を呈し、開孔部も比較的整った円形を呈する。一方、上端面は下端面に比べて歪で凹凸がある。気泡は上面の孔から下面に向かって放射状に並ぶが、下端面の孔周辺では孔を取り巻くように気泡が伸長する(写真3)。ガラス片を加熱して軟化させた状態で芯棒を貫入し、芯棒をわずかに回転させながら引き抜いたと考えられる。大賀(2002)の分類における加熱貫入法に相当する。

(2) 基礎ガラスの種類と着色要因

CR法の結果、同時に撮影した標準資料であるNIST1412よりもX線の吸収の大きい資料は認められなかった(第408図)。したがって、本資料はすべてアルカリガラスである可能性が示された。

つぎに、AR法を実施した結果、全てのガラス小玉から多量の放射線が検出された(第409図)。同時に暴露したBCR126A(K₂O:10.0%)よりも濃い画像が得られたことから、K₂Oを10%よりも多く含有していると推測され、アルカリガラスの中でもカリウムを融剤としたカリガラスである可能性が高いことが示唆された。

以上の結果をふまえて、これらガラス小玉全点について蛍光X線分析を実施した。その結果、大木戸遺跡出土のガラス小玉39点は、K₂Oの含有量が2.8~19.5%、Na₂Oの含有量が2%未満、CaO含有量が1~2%程度であることから、K₂Oを融剤としたカリガラスであることが確認された。一般的なカリガラスにはK₂Oが15~20%含まれるとされるが、本調査は非破壊測定のため、一部の資料では風化の影響によりK₂Oの含有量が本来の組成よりやや少ない値を示したものと考えられる。カリガラスの風化面でのこのような組成の変化は従来の研究でも指摘されている(肥塚1995)。本

資料のうち、第352図5はK₂O含有量が2.8%と特に少ない値を示しており、蛍光X線分析の結果だけでは基礎ガラスの種類を特定することは困難であったが、AR法を併用することにより、カリガラスであることを示すことができた。

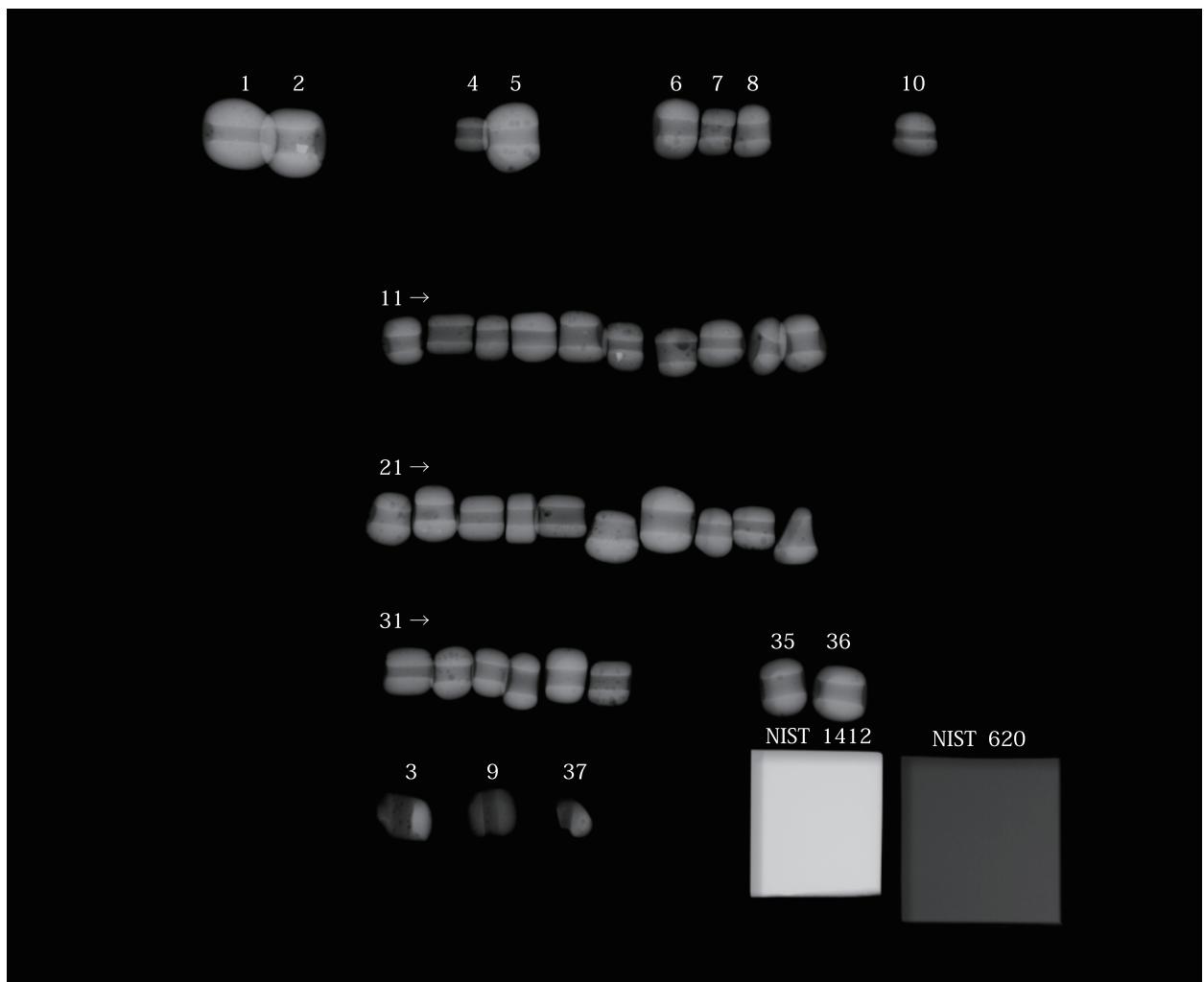
着色に関与する成分に関しては、CoOを0.04～0.11%含有しており、コバルトイオンが紺色の発色に関与しているものと考えられる。コバルト原料に付随する不純物と考えられているMnOを1～3%程度含有するのが特徴である。一方、同じくコバルト原料の不純物と考えられるCuOやPbOの含有量は0.1%未満と極めて少ない。さら

に、管電圧を50kVに変更して分析をおこなったところ、いずれからも微量のバリウム(Ba)が検出された。これらの特徴は従来から知られているコバルト着色のカリガラスの特徴と一致するものである。

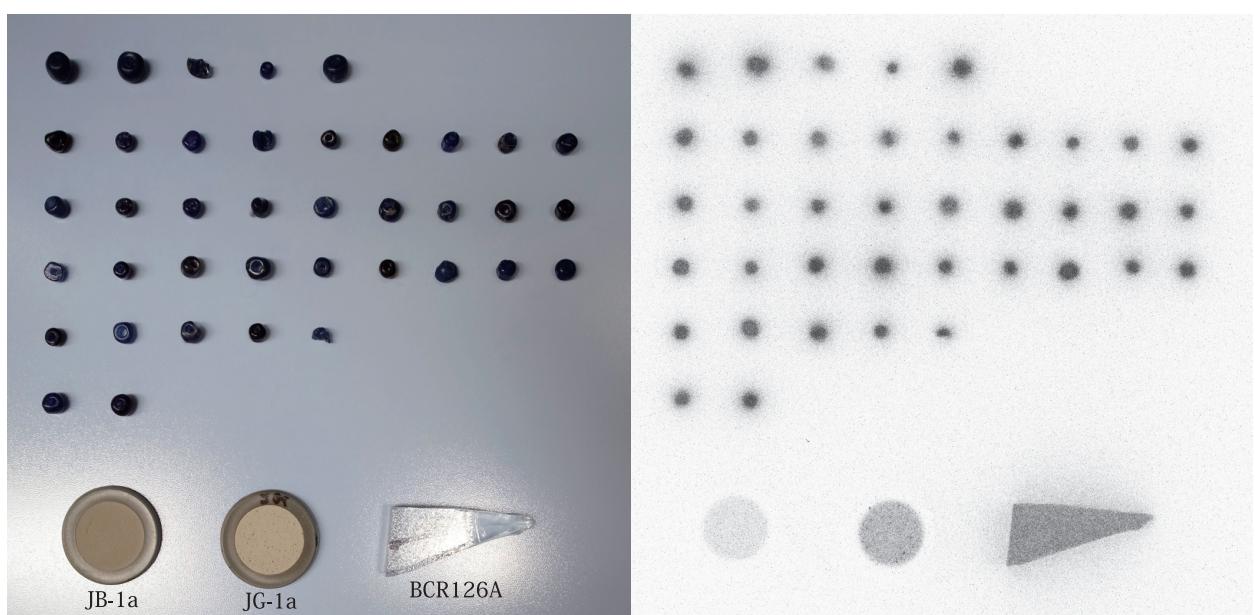
以上のように、本調査では古墳時代初頭に位置づけられている大木戸遺跡から出土したガラス小玉の製作技法、材質および着色剤について明らかにすることができた。関東地域における当該時期のガラス小玉の様相を解明する手掛かりとなれば幸いである。

参考文献

- 朝比奈貞一 小田幸子 1954「日本古代ガラス玉の成形について」『古文化財の科学』第7号 10～13頁
大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』(『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V) 127～145頁
肥塙隆保 脇谷草一郎 2003「CR・AR法を用いた非破壊材質調査の開発研究—古代のガラスの材質判別」
『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』 38～39頁
肥塙隆保 1995「古代珪酸塩ガラスの研究—弥生～奈良時代のガラス材質の変遷—」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』 929～967頁



第408図 大木戸遺跡出土ガラス小玉のC R画像



第409図 大木戸遺跡出土ガラス小玉のA R画像

第77表 大木戸遺跡出土ガラス小玉の蛍光X線分析結果

番号	遺構	遺物番号	製作技法	基礎ガラス	重量濃度 (%)													偏光	
					Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
1	SR-2	gla-4	引き伸ばし	カリガラス	1.1	0.42	2.5	77.5	1.4	1.0	0.07	0.04	0.02	0.01	0.01	0.03	0.02	0.04	0.46
2	SR-2	gla-5	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.48	3.0	73.5	1.7	1.8	0.06	0.04	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.04	0.66
3	SR-2	gla-1	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.40	3.1	72.6	1.7	1.7	0.19	1.9	2.0	0.07	0.03	0.01	0.03	0.04	0.57
4	SR-2	gla-2	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.50	2.9	73.3	1.7	1.7	0.17	1.7	1.9	0.07	0.03	0.05	0.03	0.03	0.13
5	SR-2	gla-3	引き伸ばし	カリガラス	0.1	0.60	2.4	88.2	2.8	2.0	0.25	2.0	1.5	0.09	0.03	0.03	0.02	0.09	0.69
1	SR-3	gla-12	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.41	2.4	77.6	1.5	1.3	0.12	1.3	1.0	0.08	0.02	0.02	0.01	0.04	0.32
2	SR-3	gla-10	引き伸ばし	カリガラス	0.3	0.45	2.9	78.5	1.4	1.2	0.15	1.6	0.9	0.07	0.02	0.02	0.02	0.01	0.30
3	SR-3	gla-25	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.35	2.7	77.5	1.5	1.1	0.16	1.6	0.9	0.07	0.03	0.04	0.02	0.02	0.44
4	SR-3	gla-13	引き伸ばし	カリガラス	0.3	0.59	2.9	79.0	1.3	1.2	0.16	1.5	0.8	0.07	0.02	0.02	0.01	0.06	0.34
5	SR-3	gla-29	引き伸ばし	カリガラス	1.2	0.52	3.0	73.4	1.7	1.3	0.21	2.1	1.2	0.04	0.03	0.03	0.02	0.04	0.55
6	SR-3	gla-31	引き伸ばし	カリガラス	0.5	0.41	2.6	78.7	1.4	1.0	0.14	1.4	1.2	0.05	0.03	0.03	0.02	0.02	0.66
7	SR-3	gla-18	引き伸ばし	カリガラス	1.0	0.48	4.3	71.8	1.7	1.3	0.22	2.0	1.6	0.06	0.03	0.04	0.03	0.02	0.66
8	SR-3	gla-36	引き伸ばし	カリガラス	1.2	0.46	3.1	73.9	1.6	1.3	0.29	2.4	1.5	0.08	0.03	0.02	0.02	0.04	0.66
9	SR-3	gla-33	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.32	2.5	75.5	1.6	0.9	0.22	2.6	1.1	0.07	0.04	0.05	0.02	0.00	0.87
10	SR-3	gla-16	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.45	2.6	81.2	1.0	0.9	0.21	1.7	1.3	0.05	0.02	0.03	0.02	0.02	0.58
11	SR-3	gla-23	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.43	2.7	77.2	1.5	1.1	0.16	1.6	1.0	0.06	0.03	0.04	0.02	0.03	0.45
12	SR-3	gla-11	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.17	3.0	70.1	2.0	1.3	0.19	2.4	2.2	0.06	0.03	0.06	0.05	0.03	0.74
13	SR-3	gla-15	引き伸ばし	カリガラス	1.1	0.39	3.2	74.6	1.6	1.6	0.15	1.2	1.3	0.04	0.03	0.03	0.02	0.01	0.46
14	SR-3	gla-17	引き伸ばし	カリガラス	1.7	0.45	3.0	73.2	1.7	1.4	0.17	1.5	1.0	0.05	0.02	0.02	0.02	0.01	0.60
15	SR-3	gla-24	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.30	2.9	77.1	1.5	1.1	0.15	1.5	1.0	0.06	0.02	0.06	0.03	0.02	0.46
16	SR-3	gla-28	引き伸ばし	カリガラス	0.3	0.58	3.4	73.3	1.6	1.3	0.30	2.8	1.8	0.08	0.04	0.05	0.03	0.02	0.48
17	SR-3	gla-14	引き伸ばし	カリガラス	1.3	0.60	2.7	75.0	1.5	1.2	0.21	2.1	1.8	0.07	0.03	0.02	0.02	0.01	0.56
18	SR-3	gla-7	引き伸ばし	カリガラス	0.5	0.38	2.8	77.9	1.5	1.2	0.14	1.5	0.9	0.07	0.03	0.02	0.03	0.01	0.49
19	SR-3	gla-8	引き伸ばし	カリガラス	1.4	0.73	3.0	77.2	1.3	1.1	0.20	1.9	1.2	0.07	0.04	0.02	0.03	0.01	0.39
20	SR-3	gla-21	引き伸ばし	カリガラス	0.6	0.47	3.0	73.0	1.8	1.2	0.17	1.6	1.6	0.05	0.03	0.02	0.04	0.02	0.50
21	SR-3	gla-32	引き伸ばし	カリガラス	1.5	0.75	2.7	73.3	1.6	1.3	0.30	2.4	2.0	0.09	0.04	0.02	0.02	0.01	0.37
22	SR-3	gla-35	引き伸ばし	カリガラス	0.7	0.80	3.0	74.3	1.4	1.5	0.32	3.4	1.3	0.08	0.03	0.03	0.02	0.04	1.50
23	SR-3	gla-22	引き伸ばし	カリガラス	0.7	0.48	3.0	74.7	1.5	1.6	0.23	2.4	1.4	0.11	0.03	0.03	0.02	0.02	0.81
24	SR-3	gla-34	引き伸ばし	カリガラス	1.5	0.51	2.6	75.2	1.5	1.2	0.18	1.8	1.5	0.05	0.03	0.04	0.01	0.01	0.62
25	SR-3	gla-6	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.57	3.0	74.5	1.6	1.4	0.20	2.0	1.3	0.08	0.04	0.03	tr.	0.02	0.75
26	SR-3	gla-26	引き伸ばし	カリガラス	0.8	0.26	4.2	71.0	1.8	1.3	0.21	2.1	1.7	0.05	0.03	0.05	0.02	0.02	0.67
27	SR-3	gla-20	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.52	2.7	75.3	1.6	1.2	0.17	1.6	1.1	0.04	0.03	0.08	0.03	tr.	0.11
28	SR-3	gla-30	引き伸ばし	カリガラス	0.8	0.50	3.1	73.7	1.7	1.4	0.20	1.9	1.6	0.05	0.03	0.04	0.02	0.01	0.71
29	SR-3	gla-19	加熱貫入	カリガラス	0.7	0.33	2.5	78.1	1.4	0.8	0.13	1.3	1.9	0.05	0.03	0.01	0.01	0.09	0.45
30	SR-3	gla-27	引き伸ばし	カリガラス	0.9	0.58	3.2	72.5	1.7	1.6	0.18	1.8	1.9	0.06	0.03	0.04	0.03	0.03	0.56
31	SR-3	gla-9	引き伸ばし	カリガラス	0.8	0.43	2.5	78.1	1.4	1.2	0.17	1.8	1.1	0.08	0.02	0.03	0.02	0.10	0.42
32	SR-3	gla-37	引き伸ばし	カリガラス	0.4	0.70	3.0	81.1	9.2	1.7	0.24	2.0	1.4	0.06	0.03	0.04	0.02	0.01	0.42
3	SR-4	gla-38	引き伸ばし	カリガラス	tr.	0.23	2.6	78.2	1.4	1.4	0.19	2.0	1.3	0.09	0.02	tr.	0.01	0.00	0.54
4	SR-4	gla-39	引き伸ばし	カリガラス	0.3	0.33	3.0	79.7	1.2	1.6	0.21	1.1	0.5	0.04	0.02	0.02	0.02	0.06	0.61

tr.:痕跡量

n.d.:検出限界以下

*ナバリウムのK_α線のピークからスタンダードレスのFP法により算出

2. 翡翠原石の理化学的分析

はじめに

大木戸遺跡第13地点の調査では、縄文後期の集落を中心とした様々な遺構が検出されるとともに、多くの土器、石器、礫などが出土した。

大木戸遺跡はローム台地に営まれており、地山に礫は含まれていないことから、後世に搬入されたものを除けば、検出された礫は縄文時代に持ち込まれたと考えて良い。

今回の調査に際しては、検出された礫を全て洗浄し、加工の有無と材質の特徴を調べた。その結果、翡翠輝石岩と考えられる剥片が1点見出された。当該地域では、翡翠は製品としての搬入は見られるものの、原石や剥片での搬入は一般的ではない。従って、慎重を期すためにX線回折で結晶構造を調べ、含まれている鉱物種を同定した。

1 資料

被験試料は、埼玉県さいたま市大木戸遺跡から出土した、翡翠製と考えられる剥片1点である。

2 分析操作

2.1 機器の設定

X線回折装置は、理学電気製RINT2100ultima+/pcを使用し、分析時には集中法光学系から平行ビーム法の光学系に設定を変更した。

集中法の光学系による測定では、加圧した試料の平面性と位置が重要であるが、平行ビーム法光学系では、集中法光学系に比べると許容範囲は広い。また試料の持っている面そのままが測定対象となるので、面の選択は可能であるが、研磨などによる表面状態の調整はしていない。従って試料の状況により、同一の材質であっても回折線の強度は異なる。

また、微細な結晶が無秩序な方向性で多量に含まれる岩石では、比較的良好な回折線が得られるが、変成作用や続性作用によって結晶が配向したような岩石を対象とした場合、あるいは比較的大

第78表 X線回折装置の設定

ターゲット:Cu	モノクロ受光スリット:なし
管電圧:40kV	走査モード:連続
管電流:40mA	サンプリング幅:0.02°
カウンタモノクロメータ:固定	走査範囲:3~90°
カウンタ:シンチレーションカウンタ	積算回数:1回
発散スリット:0.5 mm	スキャンスピード:4° / min
発散縦制限スリット:10mm	走査軸 $2\theta / \theta$
散乱スリット:解放	θ オフセット:なし
受光スリット:解放	光学系:平行ビーム法

きな少数の単結晶が測定面に存在していた場合には、非破壊での平行ビーム法光学系では、特定の回折線が強調されたり、表れにくかったりする場合がある。

具体的な装置の設定条件を第78表に示した。

2.2 回折結果の解析

X線回折の結果は、回折角度毎のX線強度として得られるが、この解析にあたっては、通常は判別のための専用ソフトがデータベースとの照合を行い、候補となった物質名を画面に羅列する。ただし、専用ソフトが示してきた各鉱物名候補について、データベースに登録されている回折線の位置と強度を測定値と比較して、実際に候補の中から同定を行うのはオペレータである。この時に粉末法の場合には原則として無定位試料なので、ピークの強度自体も判別のための情報になり得るが、考古遺物を非破壊で分析する際の平行ビーム法では、通常は配向した試料をそのままのかたちで取り扱うために、各ピーク毎の回折線の強度は、結晶の配向の仕方に左右されてしまい、データベースに登録された標準的な強度を示さないことが多い。従って、いくつかの弱い回折線がバックグラウンドのノイズに埋もれてしまい、一部の回折線しか検出できない場合もある。そのような場合には、本来的には何回か試料の位置を変えて測定し、他の回折線を確認するか、あるいは試料を回転させて測定することが望ましい。

なお、ほとんどの鉱物は固溶体を形成するが、X線回折によって得られた回折角度は、結晶中の原子間の距離を反映しているため、固溶体組成の違いは、回折角度の微妙な違いとなって現れてくる。データベースに登録されている固溶体の数はさほど多くはないが、それに対して実際に岩石中に存在している鉱物の固溶体組成は多様である。したがって、照合結果として提示したデータベースに記載されている固溶体組成は、必ずしも試料の固溶体組成を正確には反映していない。

なお、判別のためのソフトはJADE6.0を、回折線のデータベースはICDD-PDF DataSets 1-51 plus 70-89 Release 2001を利用した。

3 結果

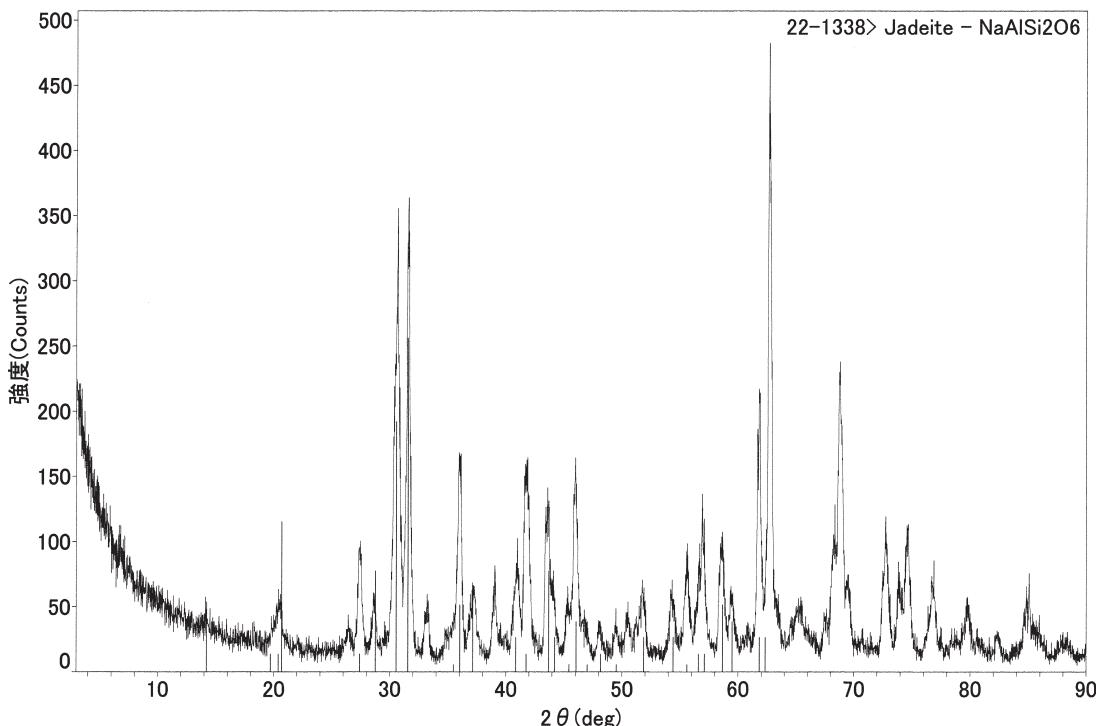
遺物から得たプロファイルを第410図に示した。曲線が試料から得られたプロファイルであり、棒グラフがデータベース上の鉱物データである。

検出されたピークは、翡翠輝石の特徴と一致しており、試料は翡翠輝石岩と判断して良い。

4 考察

従来、当該地域で検出される翡翠は、加工されたものが一般的であり、原石や剥片類が出土することは希であった。製品が遺跡に搬入され、その後の加工を行う例はあるものの、原則として未製品や原材料の形で搬入されることはないと考えられていた。実際、そのような例は少ないと考えられる。しかしながら製品ではない翡翠の出土が皆無ではない以上、剥片類にも注意しなければならない。当該地域では翡翠の出土が一般的でないため、製品でない場合、見落とされている可能性も考えられる。今後は未製品や剥片類、さらには、原産地周辺の遺跡でごく普通に見出される白色円礫の翡翠輝石岩製のハンマーについても、存在している可能性を想定し、遺跡出土の岩石片や礫について、精査することが必要である。原産地周辺以外での加工の有無は、興味深い問題である。

なお、磨製石斧の材料としても質の悪い翡翠輝石岩が3点検出されているが、別途考察する。



第410図 被験試料から得られたX線回折のプロファイル

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

大木戸遺跡第13地点の調査では、旧石器時代の遺物、縄文時代早期の炉穴12基と遺物、前期の住居跡1軒と遺物、中期の遺物、後期の住居跡20軒、掘立柱建物跡2棟、土壙85基と遺物、古墳時代前期の住居跡8軒、方形周溝墓4基、土壙1基と遺物、近世の溝跡16条、土壙155基、ピットと遺物などを検出した。また、遺構は伴っていないものの、縄文時代前期末の十三菩提式の土器片を比較的多く検出した。

中心となる遺構は、縄文時代後期堀之内1～加曾利B2式期にかけての住居跡と、古墳時代前期の集落および方形周溝墓である。

2. 旧石器時代

大木戸遺跡は当事業団とさいたま市教育委員会が複数年度にわたり台地のほぼ全域で発掘調査を実施している。

旧石器時代の遺構、遺物は、台地の西縁辺部と東縁辺部から多く出土している。これまでの調査を概略すると、さいたま市教育委員会によって国道16号バイパスの建設に伴う調査では、台地西縁部から大宮台地では希少な後期旧石器時代初頭(第VII～IX層)の石器集中と、後半期(第IV層と第IV～III層)のナイフ形石器を主体とする石器集中が発見されている。台地東縁部でも後半期(第IV層)のナイフ形石器の石器集中が見つかっている。

当事業団が実施した大宮西部特別区画整理事業関係の発掘調査では、台地西縁部の第3地点から前半期(第VII層)の石器集中1箇所を検出している。出土した石器は基部加工のナイフ形石器と縦長剥片である。東縁部では、第10地点で後半期(第III層)の石器集中4箇所を検出している。出土石器の点数は少なく、製品は搔器や削器だけである。第9地点は単独出土であるが細石核が出土した。

今回の調査地点は台地の西北部に位置し、市教育委員会及び当事業団が後期旧石器時代初頭から後半期の石器集中を多く検出した地点に隣接している。しかし、出土した石器は後期旧石器時代後半から終末期(第III層に相当)に多く見られるナイフ形石器と槍先形尖頭器が主体であり、石器集中は形成していなかった。時期的には大木戸遺跡の中では最も新しい時期に位置付けられる資料である。

3. 縄文時代

縄文時代早期の遺構については、炉穴12基を検出した。遺物は比較的多く、撫糸文土器、条痕文系土器などが出土している。

前期の遺構は諸磯b式期の住居跡を1軒検出したのみであるが、遺物は花積下層式から十三菩提式まで幅広い。中でも諸磯b、c、十三菩提の各型式は出土遺物が多く、調査区周辺に当該期の住居跡がかつて存在した可能性を窺わせるものである。

中期の遺構は検出できず、初頭の五領ヶ台式土器が少量出土したにすぎない。中期の後半では加曾利EⅡ式からEⅣ式までの土器破片が極少量出土しているが、当該期の遺構は今回の調査区の中には存在せず、遺跡の東側から比較的多く検出されている。

後期は称名寺式土器が多少出土し、堀之内1式、2式、加曾利B1式、B2式の土器が多量に出土した。堀之内1式、2式、加曾利B1式、B2式期の住居跡も合計20軒検出している。調査区から出土した最も新しい縄文土器は、安行2式の深鉢口縁部破片1点である。

遺跡の主体は後期堀之内1、2式、加曾利B1、B2式期である。大宮台地や加須低地の縄文時代後期集落は、晚期まで存続することが一般的である。

る。これに対し大木戸遺跡では後期前葉（堀之内1式期）から後期中葉（加曽利B2式期）までと比較的短期間で廃絶している。加須市修理山遺跡のように後期前葉で収束してしまう集落ならば晚期まで続かない類例も多いが、後期中葉まで存続していながら晚期まで続かない例はまれである。また、大宮台地や加須低地の後晩期集落は環状集落を形成し、盛り土遺構を伴うことが一般的であるのに対し、大木戸遺跡は環状集落を形成せず、盛り土遺構を伴わない。こうした大木戸遺跡の特徴は、武藏野台地や相模野台地（西関東）の後期集落の特徴と類似している。

具体的に集落の内容を見てみると、住居跡20軒、掘立柱建物跡2棟で構成されている（第22図）。遺構の分布から見ると、重複した四つの住居跡ブロック（A群、B群、C群、D群）と単独で検出された住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟に分けられる。A群からD群にかけての住居跡ブロックは、同じ場所で複数時期にわたり重複が繰り返されており、調査区西側の緩斜面に展開している。住居跡の入口方向は統一性を持っておらず、環状集落を形成していない。これらの住居跡ブロックは石井寛の唱える「核家屋」であると考えられる（石井1994）。

A群は第15号住居跡、第26～28号住居跡の4軒である。構築は第26、27号住→第28号住→第15号住（加曽利B2式期）の順である。時期は堀之内2式期から加曽利B2式期までである。第15号住居跡からは東北系の注口土器が2点出土した。B群は第9～13号住居跡の5軒である。新旧関係と時期は13住（堀之内2式期）→10住（堀之内2式期）→11住（堀之内2式期）→12住（加曽利B1式期）→9住（加曽利B1式期）である。C群は第4～8号住居跡の5軒である。新旧関係と時期は8住（堀之内1式期）→7住（堀之内2式期）→6住（堀之内2式期）→4住（加曽利B2式期）→5住（加曽利B2式期）である。D群は第1～3号住居跡の3軒である。新旧関係と時期は1住（堀之内2式期）→

2住（堀之内2式期）→3住（堀之内2式期）である。

掘立柱建物跡2棟は出土遺物が乏しく時期決定が難しいものの、集落の形成期間である後期前葉（堀之内1式期）から後期中葉（加曽利B2式期）に収まる時期と考えられる。亀甲形の掘立柱建物跡は、神奈川県綾瀬市上土棚南遺跡の類例と類似しており、武藏野台地や相模野台地といった西関東に由来する可能性が考えられる。

D群の第2号住居跡からは下北原類型（第29図2、第32図149、159、第33図177～219）がまとまって出土しており、B群の第9～13号住居跡（第114図296～317）やグリッド（第230図2、18）からも下北原類型が出土している。下北原類型は神奈川県下北原遺跡を標識とする堀之内式に併行する土器群であり、相模野台地に主体的に分布している。沈線のみで単純に施文された深鉢形土器であり、大木戸遺跡では特徴的な胎土をもつものが多い。当該類型は、埼玉県内の大宮台地や加須低地の遺跡からはさほど多く出土していない。大木戸遺跡の当該類型は径1～3mmの赤褐色粒子を多く含む橙褐色の胎土で、類似した胎土の土器が他にも出土している（第230図）。これらの特異な胎土の土器群は、武藏野台地や相模野台地といった西関東に由来する土器群である可能性を指摘できる。

後期中葉の加曽利B式土器のうち、太目の紐線文を貼りつけた紐線文系土器群（第261、262図）が大木戸遺跡では一定量を占めている。太目の紐線文を貼りつけ、沈線や櫛歯条線で胴部に地文や文様を施す一群である。これらの土器群も、武藏野台地や相模野台地といった西関東に由来する土器群の可能性を想定できる。

その一方で、東関東に由来する中妻類型の深鉢（第250図1～20）や、遠部第Ⅲ類の壺（第250図21～35）も出土している。これらの土器群は橙褐色の胎土と黒い斑文をもつ。

埼玉県内では、蓮田市雅楽谷遺跡や鴻巣市赤城遺跡、さいたま市の寿能泥炭層遺跡などといった

大宮台地や加須低地の遺跡から少量出土している。

このように、大木戸遺跡では出土土器に東北地方や東関東地域の要素が見られるものの、遺跡の継続期間や集落形態、掘立柱建物跡などの遺構、出土土器群に武藏野台地や相模野台地といった西関東地域と共通する特徴も合わせもっている。大木戸遺跡の所在する大宮台地から見て、武藏野台地は荒川を隔てた対岸に位置しており、荒川低地を介した交流関係があったものと推察される。

4. 古墳時代

古墳時代については前期の住居跡8軒、方形周溝墓4基、土壙1基を検出した。このうち、4基の方形周溝墓から出土した遺物は、型式論的な差異を明確に識別できないため、ほぼ同時期に連續的につくられたと考えて大過ない。また、土壙についても同様である。さらに住居跡に関しても、8軒中6軒は方形周溝墓とほぼ同時期であると考えて良いであろう。2軒はやや後出的であり、古墳時代前期の後半ないしは終末に位置づけられる。

古墳時代前期の遺跡としては、台地の僅かに奥まった部分に集落が展開し、低地を望む縁辺部に方形周溝墓が営まれているという、当該期的一般的な集落景観が復元可能である。比較的短期間で廃絶しているため、墓域と集落域の重複が見られない点は注意すべきであり、今後の周辺調査によって、集落の廃絶理由を考察する必要があろう。

5. 近世

近世に関しては、家屋の境界に関連すると考えられる溝を検出しており、18世紀以降に当地に人々が移り住んだ様子が想像できる。台地のやや奥まった場所に集落を形成し、台地の縁辺部には屋敷林を設けている景観が想定される。この屋敷林のために台地の縁辺部では耕作が行われず、また、土壤の流出も避けられた。このため、方形周溝墓の遺存状態は良好であったと思われる。

6. 加曾利B 1式、B 2式土器

大木戸遺跡からは、堀之内1式から加曾利B 2式に至る土器が大量に出土した。その多くは小破片であり、かつ遺構への帰属も不明瞭なものであった。ここではグリッドで取り上げた土器を中心にして、その資料的な制約を踏まえつつ、加曾利B 1式、同B 2式土器について型式論的課題に言及した。

1 古い段階の区切り文

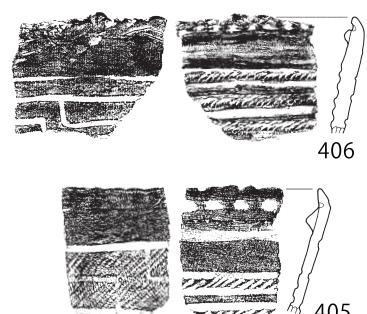
加曾利B 1式を特徴づける要素の一つとして、横帯文とそれに施された区切り文をあげることができる。初期の区切り文は二～三帯の横帯に対して、常に左下がりに位置をずらしながら施文されている。この区切り文を伴った横帯文の型式論的な特徴として以下の点があげられる。

- ①二～三帯の横帯から構成されている
- ②区切り文は左下がりにずれる
- ③横帯の中は縄文が施文されている

第411図に第9～13号住居跡出土の土器を2点示した。本文中に既に記載したように、406は口縁部下に二本、少し帶状に間隔をあけてさらに下に一本以上の横位の沈線を施して一次区画文とし間隔のあいた帶状の部分に単位文を施している。この単位文は、上下の一次区画文を連結したクラシック文であると思われる。

クラシック文の横線は単位間で位置が異なっているため、予め横線を施した後に縦線で横線を切断したものではなく、単位毎に個

別に施文したものである。同様に405は、横位の沈線を施した後に、縦位の区切り文で上下の沈線を連結している。その際に縦



第411図 区切り文関連土器

位の区切り文は上下段で左下がりにずらしている。その後に区切り文間の横位の沈線はナデ消され、さらに上から全体に縄文が施文されている。この縄文施文により区切り文は不鮮明になっている。沈線のナデ返しは行われていない。

このような資料を観ると、既に多く指摘されているようにクランク文から区切り文を持った横帶文への変化を比較的容易に想定することができる。横位に連接するクランク文を起源と考えた場合、クランク文の縦線相互の位置関係と、区切り文は必ず左下がりにずれるという文様の特性とは調和的である。このクランク文の成立について、例えば秋田は石神類型との関連に言及しているが、単純に堀之内2式の枠状文からの描き方の省略と觀ることも可能である。

2 新しい段階の区切り文

加曾利B1式の中頃から新しい段階にかけて、各種の区切り文や単位文が出現する。これらの区切り文や単位文については、浅鉢の内文からの影

響等として説明されることもあるが、ここでは少し視点を変えて、区切り文や単位文の成立について他の可能性を検討してみたい。

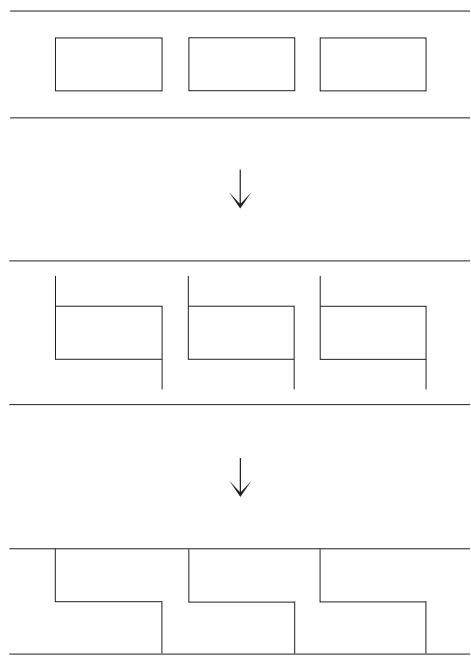
先にグリッドで取り上げた遺物を報告する際に、第IV群（後期）、第8類（紐線文）、第1種（半截竹管を使用したもの）、とした土器（第255図）に注目したい。第413図に抜粋を示した。

第1種とした土器の特徴は、以下の通りである。

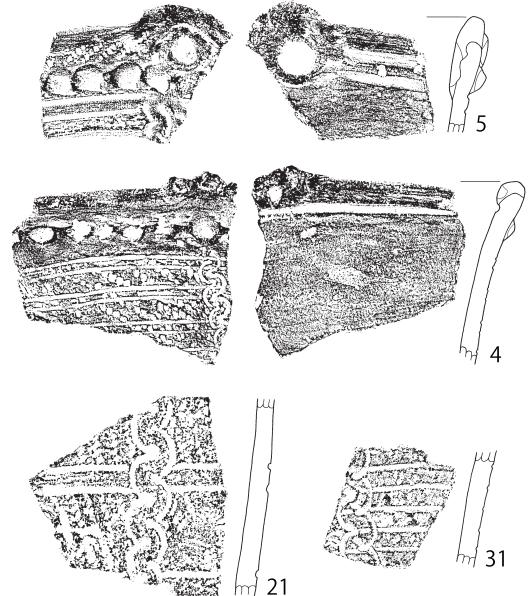
- ①紐線文が施されている
- ②縄文地文が口縁まで施されている
- ③緩やかな波状口縁である
- ④波頂部に貼付文がある
- ⑤波頂部には垂下コンパス文が見られる
- ⑥胴部には半截竹管による横帶が見られる
- ⑦横帶は、半截竹管により異間隔である
- ⑧口唇内面に一～二条の沈線が見られる
- ⑨焼成が良好である

この第8類1種の土器と関連性があると想定できる、より古い段階の土器を第414図に示した。

これらの土器を観察すれば、第IV群8類1種の祖型が堀之内2式の中にあると見てよいことがわ



第412図 枠状文の変遷模式図

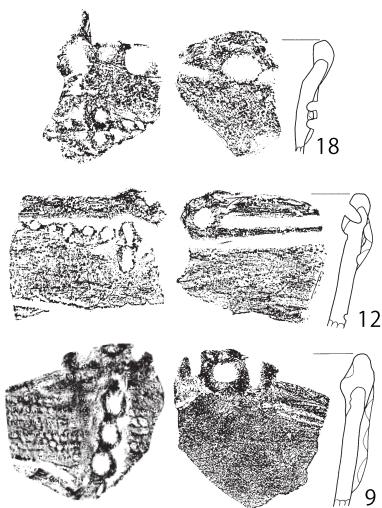


第413図 第IV群第8類第1種の土器

かる。

また、第1種を特徴づける垂下コンパス文の起源も堀之内2式の縦方向の隆帶について半截竹管による沈線で置換したものであることが推定できる。

つまり第1種土器は、堀之内2式に型式論的系譜を求めることが可能であり、概ね加曾利B1式の中に収まるものであろう。この第IV群8類1種を紐線文大木戸1種と仮称する。



第414図 関連性のある土器

一方第415図は、紐線文の第2種としたものである。第1種に準じるが、半截竹管が使用されておらず、半截竹管による平行線が沈線で置き換えられている点に最大の特徴がある。横線が半截竹管から沈線に置き換えられたことにより、以下の特徴が生じている。

①横帶が等間隔になっている

②コンパス文が沈線で模倣されている

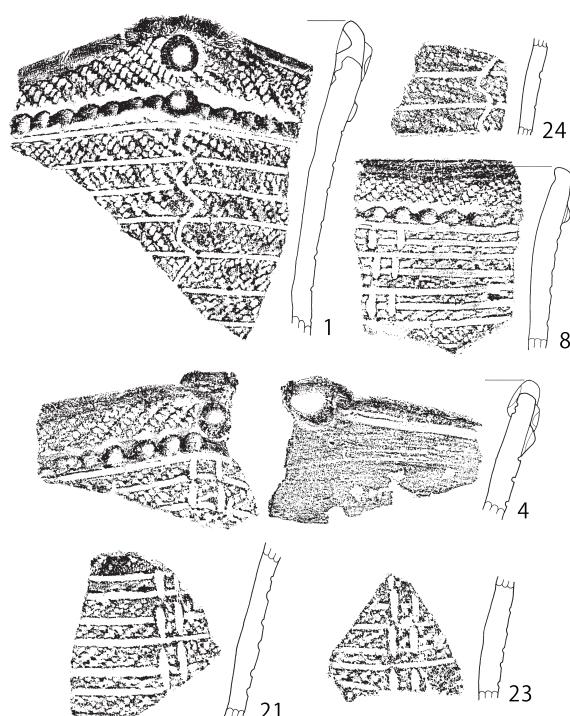
ここで注目されるのは、②である。半截竹管を使用して描かれていたコンパス文を単沈線で表現する必要が生じたため、二つの方法で置き換えが図られている。

一つは、コンパス文の方位形態に重点を置いた転写であり、単沈線で蛇行線を描くことにより、結果として垂下蛇行文が成立している。もう一つは、コンパス文の施文具形態に重点を置いた転写であり、並行する短沈線を描くことにより、結果として垂下並行短沈線文が成立している。

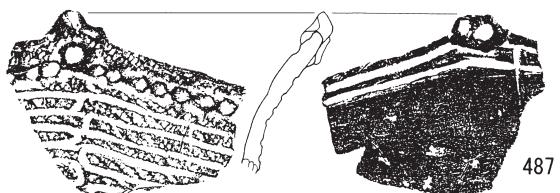
この第8類2種を紐線文大木戸2種とし、垂下蛇行文のものを2a種、垂下並行短沈線文のものを2b種と仮称する。

これらの類型は中妻類型や遠部第III類などと近縁なものであり、かつ少なくとも堀之内2式まで系譜がたどれるものである。

紐線文大木戸1種、2種共に大木戸遺跡での出現頻度はさほど高くはなく、300箱程度を精査してそれぞれ挿図1枚程度である。大宮台地上の各遺跡からも多少出土しているが、分布の中心は東関東にあると考えられよう。



第415図 第IV群第8類第2種の土器



第416図 雅樂谷遺跡出土の紐線文大木戸2種

紐線文大木戸2b種で見られた転写結果としての垂下並行短沈線文は、加曾利B1式の新しい段階の指標とされている、横帶を区切る短い並行沈線の起源であると見て良い。この特徴的な並行した短沈線は、加曾利B1式の古い段階に成立した左下にずれる区切り文とは別系譜である。前者は紐線文大木戸1種の垂下コンパス文を転写して紐線文大木戸2b種が生成する過程で生じたものであり、後者は堀之内2式の枠状文からクランク文を経て生じたものである。この出自の違いは、文様の性質を規定している。クランク文を経て生じた区切り文は、その由来から横帶の区画に依存しており、区切り文の長さと横帶の高さとが整合的である。他方、垂下コンパス文を起源とする垂下短沈線文では、元々のコンパス文の弧線は垂下する押圧の入った隆帶を起源としているため横帶の高さとは無関係であり、これを転写した短沈線や弧線も横帶の高さとは無関係に施文される特性が遺存し続けている。

もう一つの転写形態である垂下蛇行文は、横帶を互い違いの斜位の沈線で切断すると言う特性から、第416図に示した雅楽谷遺跡例のように、切断した横帶の切断面を交互に連結するという長楕円文を成立させる契機となっている。

さらに加曾利B1式で見られる各種の単位文は、浅鉢の内文からの系譜ではなく、紐線文大木戸1種、2種の中から説明可能である。例えば、「玉抱き対弧文」や「逆『の』字文」などは、紐線文大木戸1種、2種に特徴的に見られる円形で中央が窪んだ貼付文の転写と考えることができる。

3 加曾利B2式

次に、加曾利B2式の3単位突起の深鉢について、幾つかの型式論的な課題に関して言及してみたい。

①口縁部最上段の横帶

口縁部最上段の横帶は、堀之内2式の刻みや押圧の入った隆帶にその起源を求め

ることができる、と一般的には考えられているが、加曾利B1式の深鉢の中では、この隆帶又は横帶を型式論的に保持し続けている系統が明確ではない。さらに、加曾利B2式では、この横帶が縄文で施文されている場合と、刻みが見られる場合があり、何らかの原形を転写している可能性を考えられる。

②文様の非均一性

深鉢に付されている模様は、個体を超えて類似はしているものの、それぞれの個体に微妙な僅差がある。

③横帶と対弧文との縦方向の単位のズレ

対弧文は主要な文様要素であるが、横帶あるいはヨコ方向に描かれている沈線と、対弧文とは微妙に単位のズレが見られる。

これらの3点について、紐線文大木戸1種、2種の存在を考慮することによって、一定の説明が可能である。すなわち、①については、堀之内2式からの伝統を受けて、加曾利B1式の継続期間中に、連綿と口縁部に施された紐線の型式論的な情報を維持し続けている系統が、紐線文大木戸1種、2種の可能性である。また、紐線文として型式論的な情報が保持されており、これを精製土器に転写する際に、縄文施文の横帶か刻みの入った横帶が選択されていると考えることができる。

②については、紐線文大木戸1種、あるいは2種の系統を含めて他系統の土器を参照することにより、個体差が生まれると考えられる。

③については、コンパス文、垂下蛇行文、垂下单沈線文など、横帶の単位と無関係な文様が対弧文の起源と考えるならば、横帶あるいは沈線と対弧文との単位のズレも理解可能である。

4 把手の変遷

本文中でも既に述べたが、三単位突起に付着している把手について、再度まとめてみたい。

第252図5、6、8は、堀之内2式の突起からの

系譜が想定できるものである。この段階の突起では横位の「S」字が90°以上の鈍角で折れ曲がった形状を示し、その片側に瘤状の膨らみが見られる。この横位の「S」字は、角度を増して完全に水平に展開し、2、20のような「段差∞形」段階の突起となる。

ひとつの変化の方向は、二つの窪みが段差を持ったままで横方向の「∞」から斜めの「斜位∞形」段階（18、19）を経て縦方向の「8」字形（24）へと変化してゆくとともに、小口面が比較的平坦な突起から盤状の面とその上に載った「8」字状の起伏の組み合わせとなるものである。これを「縦8形」段階とする。その際に、19で見られた背面の貫通しない穴は、突起の窪みと形態的に等価となり、突起上の装飾へと組み込まれてゆく。新しい段階の突起はこの系譜のものが多く見られる。

もうひとつの変化の方向性は、「段差∞形」から15のように、小口面に穴を持った高さの異なる二つの円柱の組み合わせと見ることができる「上側形」段階を経るものである。この「上側形」は、二つの小口面が左右でほぼ対等な形態に変化してゆき、16のような「左右略均衡形」へと変化し、更に21のような片方の穴が省略された、「耳形」へと変わってゆく。なお「上側形」からは、側面の穴が省略された、1、7、17のような「側穴省略形」が派生する。

5 格子目文土器

いわゆる格子目文土器は、複数の系統からなっており、その中の一つについて検討した。

取り上げた系統は、縄文地文を持たない単純な器形の深鉢に対して、帯状に斜位の格子が廻るもので、上下に一次区画文が見られる場合と見られない場合がある。また、格子と口唇部の間に無文帶が廻っている場合と、見られない場合がある。

この格子目文土器を以下のように分類した。

a類（充填格子）

口縁部に無文帶が見られる。その下に一

次区画文を二本描き、その後に一次区画文の中を斜位の格子で充填したもの。

b類（切断格子）

口縁部に無文帶が見られる。その下に帯状の斜位の格子を廻らせ、その後に一次区画文で上下の区画を行ったもの。

c類（離間裸格子）

口縁部に無文帶が見られる。その下に一次区画文を持たない格子が帯状に廻るもの。

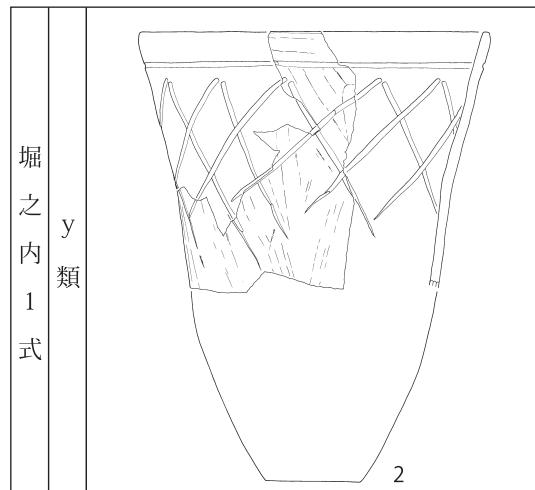
d類（接着裸格子）

口縁部に無文帶が見られない。一次区画文を持たない格子が帯状に口縁直下を廻るもの。

これらのa～d類については、概ね加曾利B1式の中でこの順序で変遷して行くと考えられる。

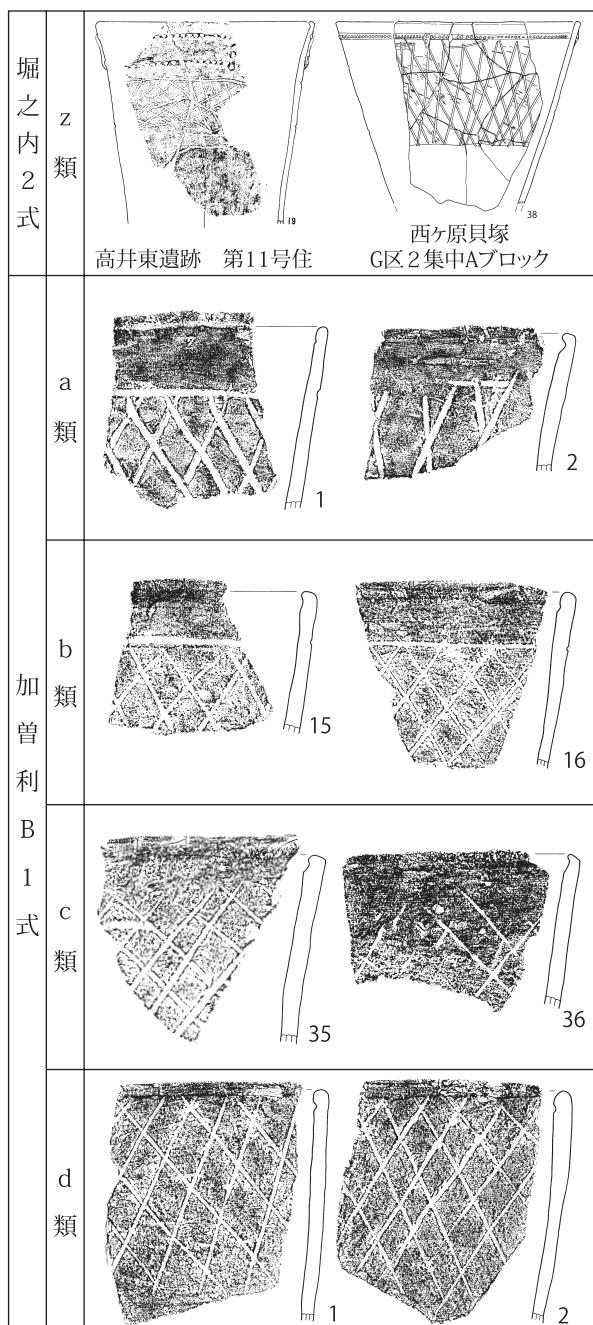
a類では、無文帶に顕著なミガキが見られる。c類からd類にかけては、無文帶の幅に様々な変化がある。格子の描き方が粗雑になり、縦方向の沈線に対して、斜め方向の斜線を描くようになる柵形（さくがた）のものや、数本から十数本ずつ、束にしたように描く束形（たばがた）などの変異が認められる。

a類以前のものとして、堀之内2式期には、粘土紐隆帶で装飾された格子目文土器が散見される。



第417図 堀之内1式の格子目文土器

これをz類（隆帯持ち格子）とする。また、堀之内1式期では、粗雑な格子目を持った土器も散見される。y類（粗格子）とする。大木戸遺跡でもグリッドで取り上げたものの中にy類が見られた（第417図）。y類からz類の系統的連続性は明確ではない。第418図に以上のz類からd類までの格子目文土器を示した。



第418図 格子目文土器の変遷(縮尺不同)

7. 古墳時代の方形周溝墓

今回の調査では、古墳時代初頭の方形周溝墓4基を検出した。ここでは、方形周溝墓と出土土器について検討する。

1 出出土器について

大木戸遺跡出土土器については、第4号住居跡出土資料を中心に、既に篠田泰輔によりまとめられている（篠田2008）。今回の調査資料では、壺で第1号方形周溝墓、広口壺で第17号住居跡、台付甕で第16号住居跡の各出土資料と対応する。第IV章4節で触れたように、第1号方形周溝墓は第2～4号方形周溝墓より後に築造されたと考えられる。出土土器間にはほとんど差異はないが、壺の頸部に着目すると後者の方が屈曲が緩やかで、第1号方形周溝墓の方がやや屈曲が強い。新旧関係として捉えられるほどの差異ではなく、同段階での僅かな前後差と考えられる。現在のところ、第2～4号方形周溝墓の新旧関係は遺構の切り合いでによる前後の把握が優先されよう。

出土土器の中では、第3号方形周溝墓第362図15の高坏が注目される。坏部が中位で立ち上がり、口縁部が外反する形態である。同様の高坏は染谷遺跡群S-17号住居跡（山口1986）、北袋遺跡Y-28号住居跡（宮崎1987）から出土している。これらの資料は 笹森紀己子によって中部高地の箱清水式後半の高坏を模倣したものとされている（笹森1990）。本遺跡の資料は前述の2遺跡の資料よりやや新しい段階ではあるが、同様に中部高地系として差し支えなかろう。第1号方形周溝墓第342図13は上位に段を持って開いており、南関東系と考えられる。

本遺跡出土土器について、篠田は 笹森編年第IV期（ 笹森1993）に位置付けている。第IV期は所謂「前野町式」と呼ばれる段階で、弥生時代終末から古墳時代初頭とされている。かつて、本遺跡同様の上ノ宮遺跡の出土土器群について、その外来要素を取り入れた新たな土器づくりを積極的に評

価して、古墳時代初頭と位置付けた（福田他1999）。本遺跡出土資料も同様の段階の資料である。

実年代については、西日本の研究成果に拠らざるを得ない。「前野町」をほぼ庄内式並行とする、庄内式の開始年代が現在AD300年前後とされることから、現状では4世紀第1四半期としておきたい。

2 方形周溝墓について

盛土：4基の方形周溝墓の内で第1、3号方形周溝墓の2基から盛土と埋葬施設を検出した。埼玉県内の中心埋葬施設が検出されている方形周溝墓は40基ほどあるが、方台部盛土との関係が明らかな例はごく少ない。

まず、ここで確認しておきたいのは第IV章4節で報告したように、調査開始前から地膨れ状の地形の盛り上がりが見られたため（第16図）、手掘りによる表土除去を行い、遺存していた盛土の上面から掘り下げる事ができた点である。手順としては、①表土を除去した上で徹底して遺構確認を試みたが、埋葬施設の掘り込みは検出できなかつた。②トレンチを設定し方台部を断ち割ったところ、盛土の下に埋葬施設が存在する可能性の高いことが明らかになった。③トレンチに沿ってベルトを設定し、盛土の掘削を行った。平面的な土層単位の検出には至らなかつたことから、全体に同様の土によって盛土を行っていると考えられた。盛土全体を除去した面からは古墳時代の表土層が露出し、その面ではじめて埋葬施設が平面的に確認できた。

以上の手順とその都度確認した事実により、本遺跡の方形周溝墓は、方台部への盛土完了後に頂部から中心埋葬施設が穿たれたのではなく、埋葬施設設置後に上に厚く盛土がなされたものと考えられる。

こうした埋葬施設の設置方法は、山岸良二があげ「地山埋め込み型」（山岸1991他）に相当する。山岸は東日本で弥生時代中期に埋葬施設の検出例

が多いのは、盛土の低さも合わせて「地山埋め込み型」、「地山据え置き型」がほとんどであったためと推定している。時期は異なるが、本遺跡例もそうした一つであると考えられる。この方法によって埋葬施設が設置された、盛土との関係が明らかな県内で唯一の例と評価できる。

一般的に、方形周溝墓は年代が下がるにつれて中心埋葬施設の遺存率が低くなり、その一方で周溝は広く深くなる。これは立花実や坂本和俊が指摘する（立花2000、坂本1996）ように、方台部盛土が高くなり、その造成された平坦面から埋葬施設が掘削されるためと考えられる。しかし、本遺跡のように古墳時代初頭に下るような例でも、必ずしもそうした盛土方法、あるいは埋葬施設の設置方法をとらない場合がある。第79表は県内で埋葬施設が発見されている方形周溝墓である。方台部の規模が大きく周溝の深度が深い場合に、必ず高い盛土がなされるとすれば、篠山4号、薬師耕地前7号、井沼方9号、南町1号は確認面に埋葬施設の掘り込みが達しないはずである。これらの大型の周溝墓は古墳時代前期、「地山埋め込み型」、「地山据え置き型」の埋葬施設の設置方法がこの時期まで継続する可能性を示す例と言えよう。

本遺跡の場合には墓壙の深さが40cm前後であるが、第79表のように県内で検出されている埋葬施設では、最も深い例が篠山遺跡の60cmである。墓壙の深さ自体にどれだけ共通性があるか不明だが、遺骸の埋葬施設であることから最低でも40cm以上の深度は必要であると考えられる。検出例はいずれも「地山埋め込み型」であることから、削平によって旧地表面が失われているとしても、土壙掘り込み面は旧地表面よりも上である可能性が考えられる。

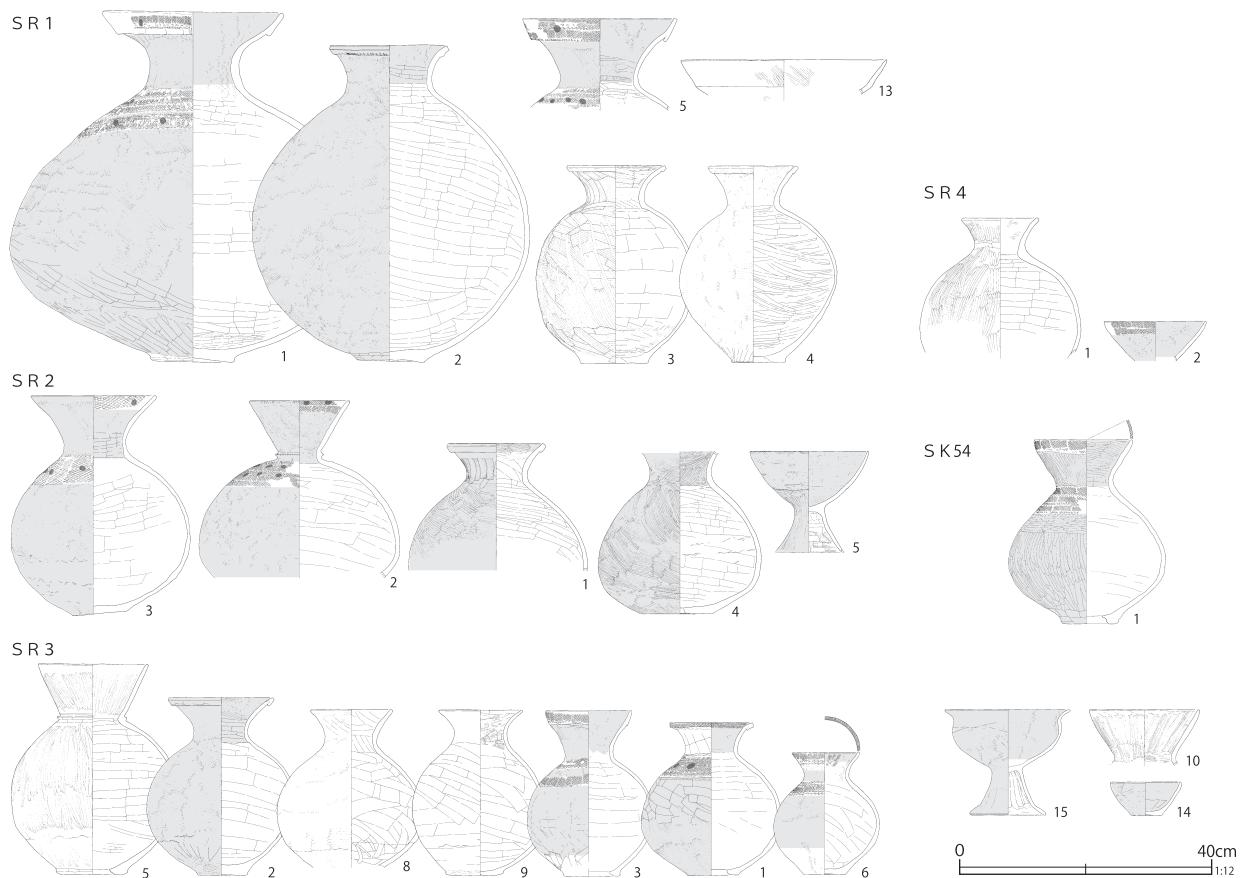
第420図上段は「地山埋め込み型」の方台部の盛土の推定であるが、①盛土を施さずに掘削、埋葬し、その後に盛土を施す場合と、②ごく低い盛土を一段積んだ後に掘削、埋葬し、さらに盛土を

施す場合が考えられる。後者は既に、弥生時代中期の大坂府東大阪市巨摩廃寺遺跡（玉井他1981）などで同様の方法が採られており、一般的な方法の一つと考えられる。大木戸遺跡の盛土の様相を勘案すると「地山埋め込み型」では、盛土はあくまでも埋葬施設を覆うものであることから堅牢さは求められず、単層もしくは2～3層のあまり硬度のない盛土がなされた可能性が高い。こうした盛土が行われている例は、本遺跡のほか久喜市小林八束1遺跡（山本2008）などで見られるが、現地で確認した範囲では、非常に不明瞭であった。

第420図下段は、立花、坂本が想定する古墳時代の高い盛土に埋葬施設を設置し、埋葬施設の底面が古墳時代の旧地表面に達しない方法で、「盛土内埋め込み型」と呼称したい。塩古墳群25号は、こうして築造した盛り土に頂部平坦面から埋葬施

設が掘り込まれているが、発見された埋葬施設は削平を受け、深度は20cmほどしかない。それでも盛土の状況からは、さらにこの検出面の上に1m以上の盛土があったとは考え難い。やはり「地山埋め込み型」同様、60cmを超える程度の埋葬施設の掘り込みと推定されよう。

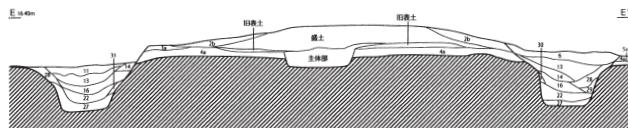
この方法の盛土の典型的な例が中耕遺跡21号（杉崎1993）で、まず土手状の盛土を行って縁辺部の範囲を確定し、順次内側に積み上げていく工程を繰り返している。こうした工程は、後川恵太郎の「土手状盛土」、「内方向積」の「工法D」と称される墳丘築造方法（後川2005・2009）に該当すると考えられ、畿内では瓜生堂遺跡をはじめ弥生時代中期から一般的に行われている方法である。前期古墳においても椿井大塚古墳などで見られ、段状の構築物の伝統的な工法と考えられる。



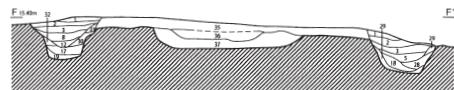
第419図 大木戸遺跡方形周溝墓出土土器

地山埋め込み型

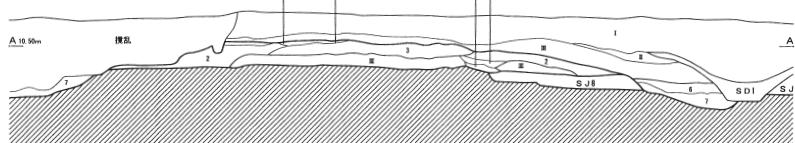
大木戸遺跡 S R 1



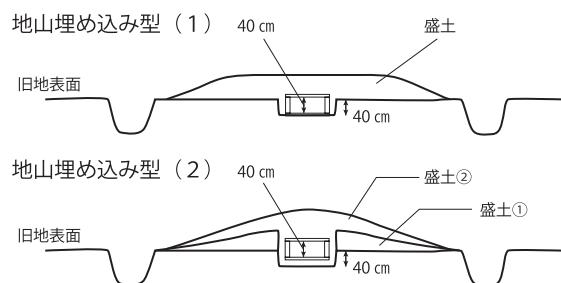
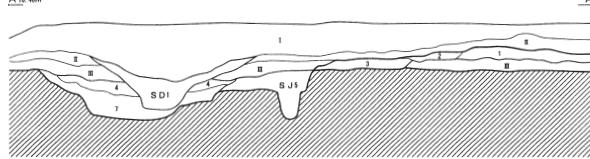
大木戸遺跡 S R 3



小林八束 1 S R 1

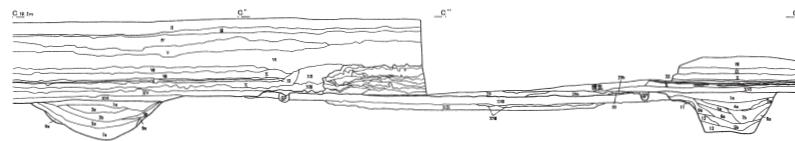


小林八束 1 S R 3



盛土埋め込み型

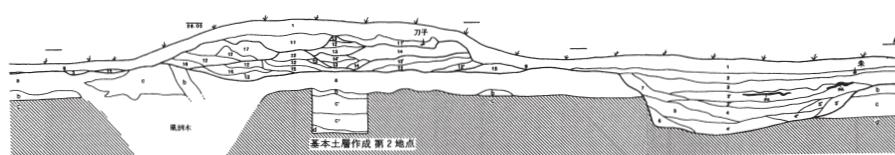
下田町遺跡 S R 12



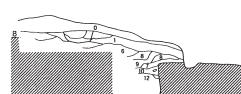
下田町遺跡 S R 12



中耕遺跡 S R 21



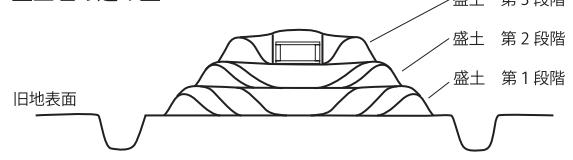
塩古墳群第 25 号墳



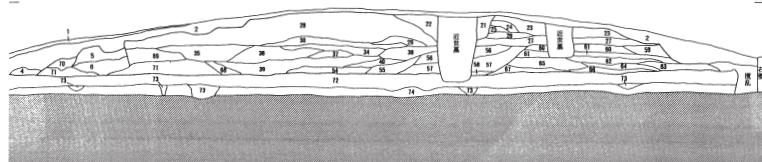
新山遺跡第 6 号墳



盛土埋め込み型

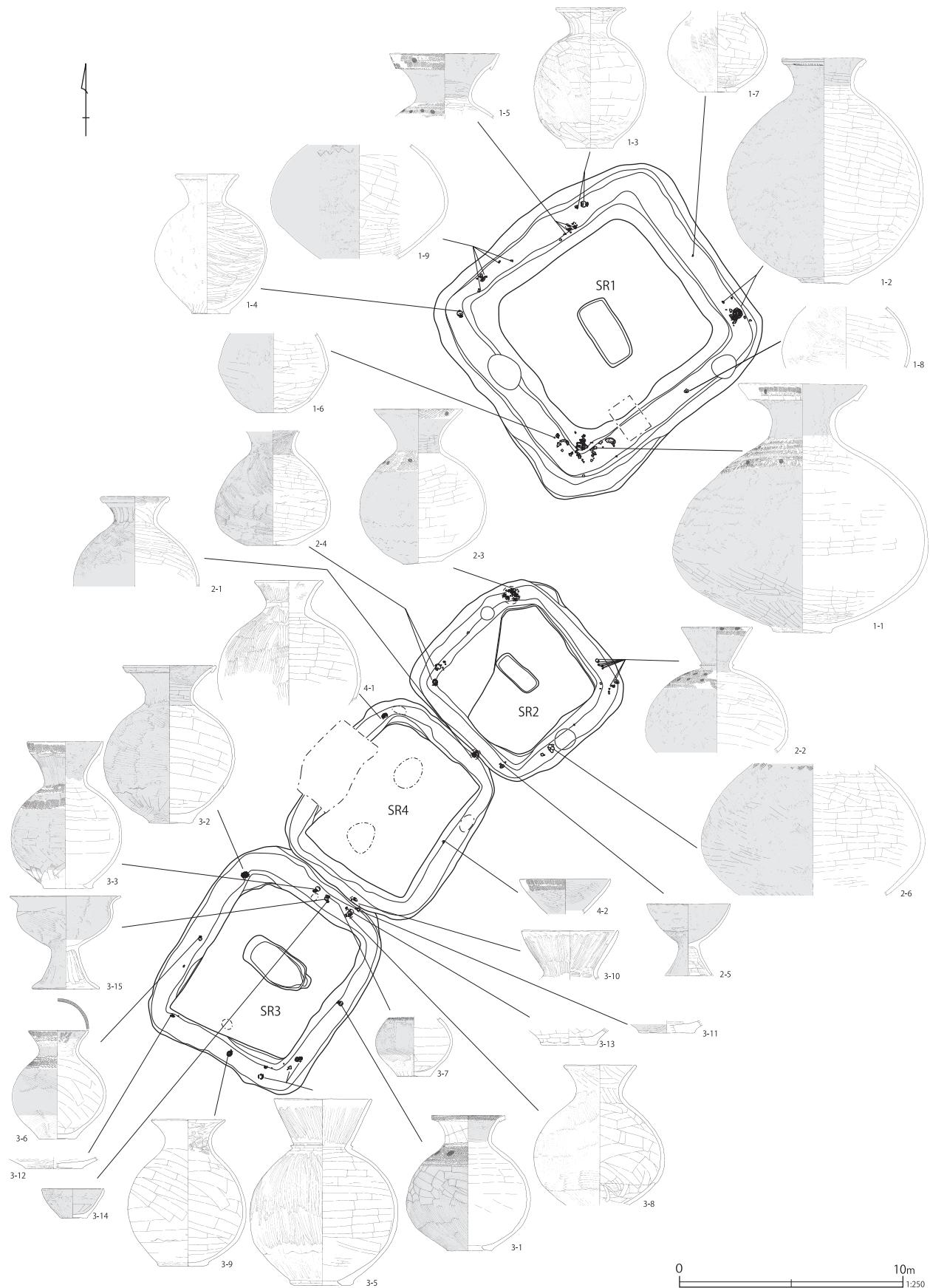


万年寺つつじ山古墳



0 4m
1:160

第420図 埼玉県内の方形周溝墓主体部



第421図 大木戸遺跡の方形周溝墓からの土器出土状況

第79表 埼玉県内の埋葬施設が確認された方形周溝墓一覧

No	遺跡名	規模/m		溝幅周/m		深さ/m		中心埋葬施設/m			埋葬方法	副葬品	副葬品出土箇所	埋葬施設底面・覆土
		長軸	短軸	最狭	最広	最浅	最深	長軸	短軸	深度				
1	大木戸1	9.20	8.60	1.28	2.16	0.76	1.20	3.08	1.52	0.44	直葬			平坦・自然
2	大木戸2	6.30	6.00	0.76	1.26	0.32	0.56	2.08	0.80	0.40	直葬	ガラス小玉5		平坦・自然
3	大木戸3	7.40	6.50	0.64	1.65	0.16	0.56	3.30	1.60	0.40	直葬	鉄釧1 ガラス小玉32	床直	舟形・埋戻し
4	篠山4	9.10	8.20	1.60	2.80	0.40	1.00	2.90	1.70	0.60	木棺			中央盛り上がり・貼床(棺座)・旧地表面あり
5	上ノ宮1	9.20	8.00	1.20	2.00	0.30	0.50	3.00	1.80	0.20				平坦・自然か
6	上ノ宮2	7.80	7.40	1.50	1.60	0.30	—	2.50	1.40	0.20	直葬	ガラス小玉4	床直 上層	平坦・自然か
7	上ノ宮4	—	—	2.00	—	0.30	0.60	2.80	1.00	0.20				平坦・埋戻しか
8	上ノ宮5	6.00	5.20	0.80	1.20	0.20	0.60	2.00	1.30	0.10				舟形か・埋戻しか
9	関東4	5.70	4.60	0.70	0.80	0.20	0.30	2.50	1.20	0.20	木棺			2段・平坦・裏込めか
10	関東6	6.20	4.60	0.60	0.90	0.10	0.30	2.80	1.10	0.40				凹凸あり・自然か
11	関東8	5.40	4.40	0.60	0.90	0.10	0.30	2.20	1.20	0.20				凹凸あり・不明
12	上太寺1	12.00	10.30	0.60	1.70	0.20	0.90	3.30	1.20	0.20				平坦・自然か・施設ありか
13	上太寺2	11.20	8.00	0.80	1.30	0.30	0.60	1.90	1.20	0.20	直葬	ガラス小玉43 薦	床直か 広がる	不明
14	薬師耕地前2	8.10	8.10	1.40	2.00	0.60	0.80	2.80	1.80	0.30	木棺	ガラス小玉12 壺	底から10cm	平坦・自然・壁際に粘土
15	薬師耕地前7-1	5.20	5.20	0.80	1.50	0.30	0.60	2.30	1.70	0.20	木棺?	管玉1 剣1	底から10cm	傾斜・自然
16	薬師耕地前7-2	8.20	5.20	1.10	1.50	0.30	0.60	2.70	1.30	0.40		ガラス小玉4 管玉1	上層	平坦・不明
17	井沼方3	5.70	5.70	0.50	0.80	0.20	0.30	2.45	1.20	0.15	木棺?	ガラス小玉3	ローム(4層)上	平坦・ローム
18	井沼方4	9.30	7.40	0.80	1.40	0.40	0.80	3.35	1.35	0.23	木棺?	ガラス小玉8	ローム(4層)上	凹凸・ローム
19	井沼方7	7.30	—	0.40	1.70	0.10	0.50	2.30	1.40	0.40	勾玉1 石斧1	床直		平坦・自然か・硬質
20	井沼方8	5.50	—	0.40	1.00	0.10	0.80	2.30	1.20	0.30		ガラス小玉8		平坦・自然か・硬質
21	井沼方9	10.50	9.90	1.00	1.40	1.00	1.40	3.10	1.80	0.40		劍1ガラス小玉13 石器1	底から10cm	平坦・自然か
22	井沼方13	6.00	4.80	0.50	0.80	0.20	0.50	2.00	1.00	0.10				平坦・自然か・硬質・ローム
23	南町1	14.60	—	1.40	2.00	0.50	1.00	3.00	1.00	0.10		壺1	上層	平坦・自然
24	安養寺	9.50	8.20	1.35	3.60	0.30	0.50	2.50	0.65	0.08	木棺	劍1	棺床面	2段・ローム櫛
25	觀音寺4	—	—	1.80	—	0.40	0.90	2.80	2.50	0.25		劍1 銅釧1 ガラス小玉1	不明	平坦・自然
26	塙25号墳	8.20	—	1.60	—	0.30	0.50	3.10	1.50	0.20	木棺	劍1 ガラス小玉3	中層	平坦・ローム櫛
27	一本木前1	8.80	7.40	1.70	2.80	0.80	1.10	2.51	0.96	0.40	直葬?			舟形・埋戻し
28	一本木前2	11.00	10.40	2.80	3.70	1.10	1.30	3.80	3.54	0.55		勾玉1 管玉2	底面	2段・平坦・ローム
29	一本木前3	12.80	—	2.60	4.50	1.10	1.50	6.10	3.90	0.40	直葬?			平坦・埋戻し
30	前組羽根倉1	6.70	5.40	0.30	0.80	0.10	0.60	3.40	1.25	0.15	木棺	鉄釧1	棺床面	2段・ローム櫛
31	前組羽根倉2	6.40	5.50	0.30	1.10	0.05	0.50	3.25	1.15	0.30	木棺	管玉1 珠文鏡1	溝中土壠	ローム櫛

杉崎茂樹は中耕遺跡21号の盛土の高さを2.7mと積算している(杉崎2001)。中耕例は最高値であろうが、「盛土内埋め込み型」の周溝墓は相当高い盛土を行っていたと考えられ、盛土を高くするためには中耕遺跡のような方法は有効と考えられる。県内では、古墳時代前期の熊谷市下田町遺跡12号(中山2006)、新山遺跡6号(新井1986)、本庄市万年寺つづじ山古墳(太田、松本、的野2006)などで見られる。これらは1mを超えるような盛土を持つが、埋葬施設は発見されていない。

埋葬施設: 第1、3号方形周溝墓の埋葬施設は長さ3mを超えており、県内でも最大級の規模である。第3号方形周溝墓の底面は舟形で木棺の痕跡はなく埋め戻され、ほぼ底面からガラス小玉と鉄釧が出土することから直葬の可能性が高い。関東地方の方形周溝墓の埋葬施設は福永伸哉のⅡ型木棺が主体であると考えられているが(福永1985)、

子細に報告を見るとさいたま市上ノ宮2、5号(新屋、福田1991)、上太寺2号(奥村1988)などは底面が舟底状で覆土が埋戻しており、直葬の可能性が考えられる。詳細は別に譲るが、今後埋葬の一つの形としての検討が必要であろう。

周溝: 周溝はいずれも幅1m以上で、しっかりと掘り込みを持つ。第1号方形周溝墓は一様に深さが0.8~1.2mと深い。南コーナーにテラス状の段があり、この部分が入り口と考えられる。第2~4号方形周溝墓はいずれの周溝も深さ0.3~0.5mで、段や溝中土壠等の施設は検出されなかった。弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓では、周溝内に土壙状の掘り込みや段が見られるのが一般的で、加えていざれかの周溝が浅い場合がほとんどである。本遺跡では全く施設が検出されておらず、各周溝の深さも均一で、逆に特異である。

出土遺物: 中心埋葬施設出土のガラス小玉と鉄釧、

周溝から出土した土器がある。ガラス小玉については第V項を参照されたい。

螺旋状鉄鋤は、土屋了介の集成によれば、関東地方で35例の類例が知られている（土屋2009）。分布の中心が大きく信州と東京湾岸に分かれ、熊谷市下田町遺跡と本資料は両者の中間的な位置に当たる。その生産や流通、型式論的検討を行う用意は筆者にはない。ここでは既に牛山英昭らが指摘しているように（牛山1998）、（1）で述べた中部高地系高坏が出土し、鉄鋤の集中した出土が見られる東京都北区でも御殿前遺跡で樽式土器が出土するといった、中部高地系土器と鉄鋤の重複した分布を確認するに留め、改めて検討したい。

出土土器は第1号方形周溝墓第342図13、第2号方形周溝墓第350図5、第3号方形周溝墓第362図14の鉢、15の高坏を除き、全て壺である。各々の周溝墓出土土器の組み合わせを見ると、規模の大きな第1号方形周溝墓出土土器は、柿沼幹夫の「超大型壺」に該当する器高50cmを超える第339、図1、340図2と器高30cm程度の中型壺の組み合わせになっている。ほぼ同規模の周溝墓が連接する第2～4号方形周溝墓出土土器は、中型壺とそれよりやや小型の壺の組み合わせである。土器の量にも多寡があり、第3号方形周溝墓が特に多く、第4号方形周溝墓は少ない。方形周溝墓群の出土土器の法量や個体数については、坂戸市入西遺跡群の資料をもとにした柿沼の研究がある。規模の大きなものには大型壺が伴い、出土量も多く規模に比例して出土土器の法量や個体数が異なるとされ、階層差が推定されている（柿沼1996）。大型の第1号方形周溝墓とやや小型の第2～4号方形周溝墓の出土土器の組み合わせの差異は、入西遺跡群と同様であり、両者に階層差を感じさせる。

第1号方形周溝墓第341図3、4は法量、色調、器形とも共通しており、所謂「対の土器」の可能性がある。

底部穿孔土器は全て焼成後穿孔で、第4号方形

周溝墓以外の各周溝墓から出土している。弥生時代までの限定的な底部穿孔に対して、比企地方では古墳時代前期に爆発的に施されるようになるとかつて指摘したが（福田1991）、本遺跡における様相も同様である。

第54号土壙は周溝墓に関連する土壙として報告したが、底部穿孔土器の出土はその傍証となる。

土器配置：本遺跡では、どの周溝墓でもコーナーを中心とした出土状況を示している。一単位のみの群であるため列構成を意識した土器配置はあまり明瞭ではないが、第2、3号方形周溝墓の北側、南側を中心とした土器群は、周溝墓群全体を意識した配置とも考えられる。第1号周溝墓南コーナー出土の第339図1は破碎された状態で出土しており、入口部の儀礼的な行為に伴う可能性がある。

土器そのものや穿孔行為においても、井沼方遺跡でみられたような複数の周溝墓間で共通した文様構成を持つ土器や、共通した穿孔を施すような例は見られない。土器群は各周溝墓で完結していると考えられる。

出土層位では第1号方形周溝墓第342図9、第2号方形周溝墓第351図6の壺が下層、第2号方形周溝墓第350図5の高坏が中～下層、第3号方形周溝墓第362図15の高坏が溝底直上で、それ以外は上、中層である。土器の段階的な使用とまでは断言できないが、高坏は周溝掘削直後の儀礼的行為に使用された可能性がある。弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝墓では、小型器種が溝底から見られる例が多く、本例もそうした一つと考えられる。

第3号方形周溝墓の北東溝、南西溝からは壺の底部のみが出土しているが、戸田市南町遺跡第1号でも同様の出土が見られ、意図的廃棄と考えられる。

群構成：群としては規模の大きな第1号方形周溝墓と、中規模で連接する第2～4号方形周溝墓の一列の組み合わせである。同様の群構成は篠山遺

跡や坂戸市広面遺跡（村田1990）、中耕遺跡などで見られ、当時の一般的な群のあり方と考えられる。一方、坂戸市の2遺跡は埋葬施設が盛土内埋め込み型であり、個々の方形周溝墓群で多様な様相を示すと考えられる。

大木戸遺跡は方台部の盛土と埋葬施設の双方を

検出できた、県内でも屈指の良好な方形周溝墓群である。「地山埋め込み型」の埋葬施設と盛土の関係など、多くの新知見が得られたが、大宮台地でこれまで調査してきた方形周溝墓群とは異なる部分もあり、周辺資料との対比を通してさらに検討を進める必要がある。

参考文献

- 秋田かな子 1996 「南関東西部の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』『同一記録集一』
- 我孫子昭二 1988 「加曾利B様式の変遷と年代（上）」『東京考古』6 東京考古談話会
- 我孫子昭二 1989 「加曾利B様式の変遷と年代（下）」『東京考古』7 東京考古談話会
- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集 埼玉県埋文事業団
- 新屋雅明 1997 『石神貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第182集 埼玉県埋文事業団
- 新屋雅明 福田聖 1999 『上ノ宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集 埼玉県埋文事業団
- 新屋雅明 福田聖 2007 『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集 埼玉県埋文事業団
- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
- 市川 修 1974 『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第4集 埼玉県遺跡調査会
- 牛山英昭 1998 「七社神社前遺跡出土の鉄鉗」『七社神社前遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第24集
- 後川恵太郎 2009 「方形周溝墓の墳丘構築法について」『研究フォーラム「方形周溝墓の埋葬原理」』鰐江市教育委員会
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究（I）」『考古学研究室研究紀要』2
- 大塚達朗 1986 「型式学的方法 加曾利B式土器－磨消縄紋土器群の分析－」『季刊考古学』17
- 大塚達朗 1989 「加曾利B式三細別に於ける齶齶の解消－学史的理義とは何か」『先史考古学研究』2 阿佐ヶ谷考古学研究会
- 柿沼幹夫 2006 「大きな方形周溝墓出土の超大型壺」『埼玉県の考古学』II 埼玉考古学会
- 小滝 勉 1994 『上土棚南遺跡第3次調査』綾瀬市埋蔵文化財調査報告5 綾瀬市教育委員会
- 埼玉県立埋蔵文化財センター 2002 「下田町遺跡」平成14年度第1回遺跡見学会資料
- 笹森紀己子 1990 「大宮市内出土の外来系土器について」『大宮市立博物館研究紀要』2 大宮市立博物館
- 笹森紀己子 1993 「大宮台地における弥生後期土器」『二十一世紀への考古学』雄山閣出版
- 篠田泰輔 2008 「調査のまとめ」『大木戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第355集 埼玉県埋文事業団
- 菅谷通保 1996 「南関東東部の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』『同一記録集一』
- 杉崎茂樹 2001 「埼玉県坂戸市中耕遺跡第21号方形周溝墓の墳丘復元試論」『研究紀要』16 埼玉県埋文事業団
- 鈴木保彦 1978 『下北原遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会
- 鈴木正博 1979 『取手と先史文化』上巻 取手市教育委員会
- 鈴木正博 1981 『取手と先史文化』下巻 取手市教育委員会
- 立花 実 2000 「方形周溝墓の常識」『西相模考古』9 西相模考古学会
- 土屋了介 2009 「螺旋状鉄鉗の基礎的研究」『日々の考古学2』 東海大学文学部考古学研究室
- 長瀬 出 1997 「南関東地方における方形周溝墓の方台部被葬者の検討」『法政考古学』23 法政考古学会
- 西井幸雄他 2008 「大木戸遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第355集 埼玉県埋文事業団
- 西澤 明 2011 「西ヶ原貝塚」東京都埋蔵文化財センター調査報告第262集 東京都埋蔵文化財センター
- 橋本 勉 1990 「雅楽谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集 埼玉県埋文事業団
- 福田 聖 2007 「方形周溝墓における土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32-1 考古学研究会
- 山岸良二 1991 「方形周溝墓」『原始・古代日本の墓制』 同成社
- 渡辺清志 2005 「雅楽谷遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第307集 埼玉県埋文事業団